

# 第1部

## 千崎古墳群第2次・第3次調査報告



維和中学校への現地説明会風景

## 一 位置と環境

### 1. 地理的環境（第1・2図、図版1）

天草諸島は九州中西部、熊本県の西の海上に位置している。そこは、有明海と八代海の入口にあたり、九州西岸の北と南をつなぐ海上交通の要衝として、熊本県はもちろん九州全体の歴史においても重要な役割を担ってきた。

天草諸島は、<sup>かみしま</sup>上島、<sup>しもじま</sup>下島という2つの島を中心に、その周辺部にある<sup>おおやのじま</sup>大矢野島や<sup>いわじま</sup>維和島、<sup>ひのしま</sup>樋島、<sup>ごしょうらじま</sup>御所浦島、<sup>ししじま</sup>獅子島、<sup>ながしま</sup>長島など大小多数の島々から形成されている。下島は、北方四島や琉球列島をのぞけば、佐渡島、対馬、淡路島に次ぐ面積を有している。下島の西海岸は東シナ海に続く天草灘に面しており、東は本渡瀬戸を挟んで上島と相対している。また、その北端からは早崎瀬戸を挟んで長崎県島原半島の南端を望むことができ、南西側には鹿児島県の北西端をなす獅子島、長島が存在している。上島や維和島の東は、八代海を挟んで八代、芦北など熊本県南部地域と相対している。熊本平野の南端から西方へ伸びる宇土半島を経て、大矢野島、上島、下島、長島と島伝いに南進すれば、鹿児島県の出水平野に達することができる。九州本島側の八代平野から南は海岸線近くまで険しい山が迫っているから、八代海、あるいは天草諸島を経由する海上ルート的重要性がうかがい知れよう。

さて、千崎古墳群の所在する維和島は、天草諸島の北端にある大矢野島の東約1kmの海上に位置している。南北約5.5km、東西約2.5km、面積約6.4km<sup>2</sup>の菱形を呈した島である。大観山（標高141.5m）・高山（標高166.9m）という2つの山から連なる丘陵が島の中央部に存在している。この丘陵によって島は東西に二分され、平地はきわめて少ない。千崎古墳群はこの維和島の北端、千崎丘陵上に位置している。千崎丘陵は<sup>どうぞう</sup>蔵々瀬戸を挟んで箱式石棺墓群の存在する<sup>とばせじま</sup>戸馳島と相対している。

（清水）

千崎古墳群  
の位置

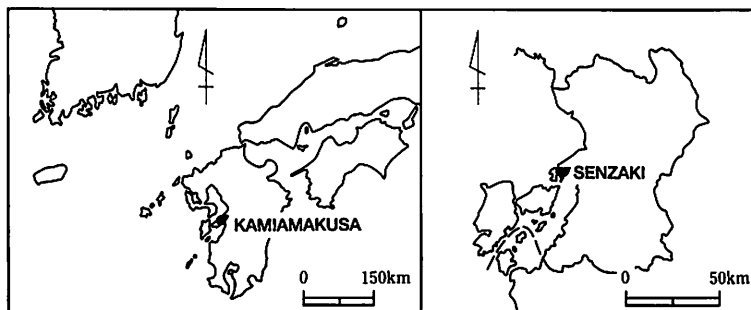
### 2. 歴史的環境（第2・3図）

#### （1）八代海沿岸地域の首長墓動向

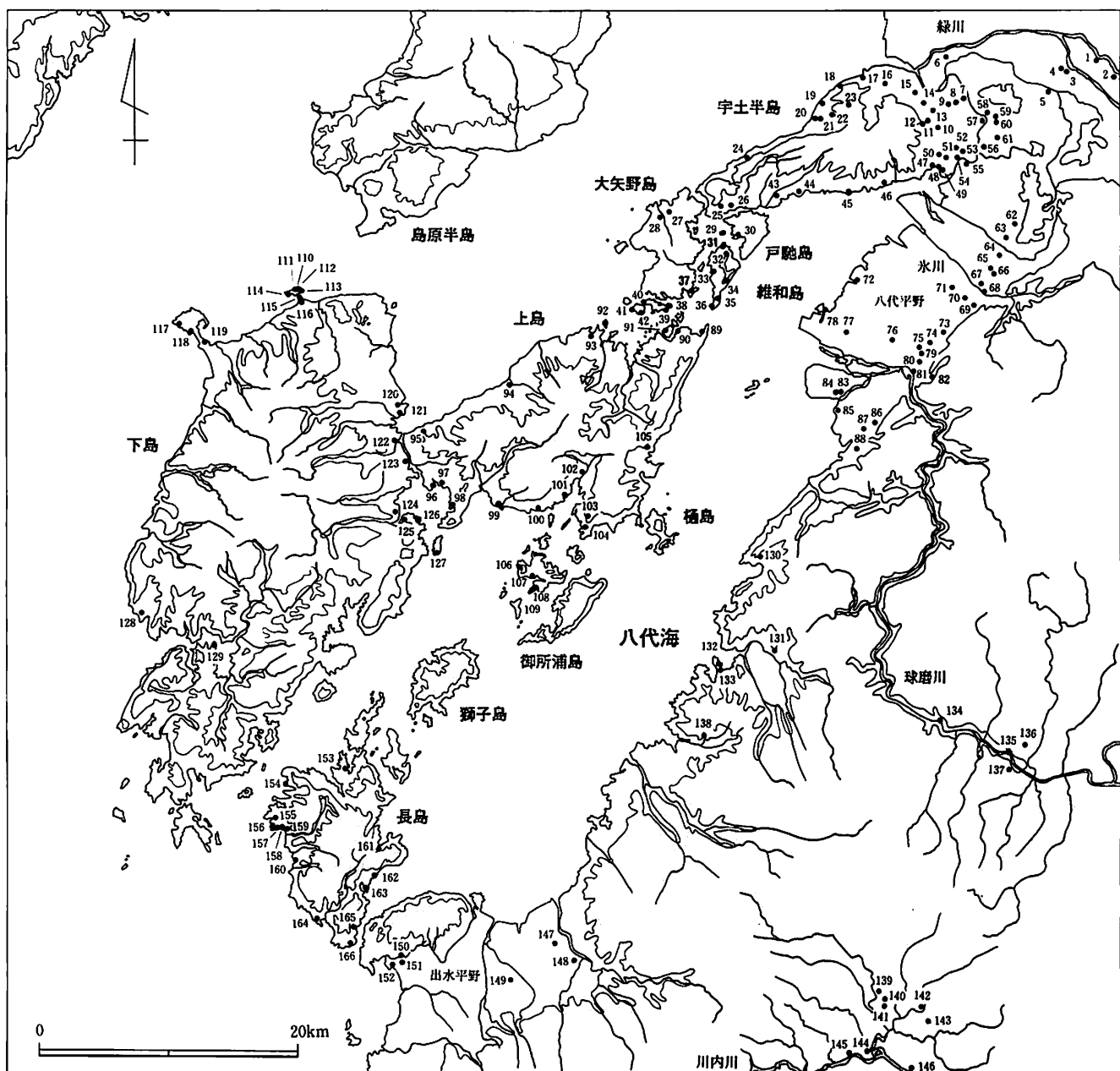
熊本県地域では、有明海・八代海に注ぐいくつかの河川流域を中心に、数多くの古墳が分布している。そのなかで、首長墓とよばれる前方後円墳や大型円墳が分布する地域は限られており、八代海沿岸やその付近では、宇土半島基部地域・緑川中流域・氷川下流域・球磨川下流域の4つの地域にその分布が集中している。

熊本県地域でもっとも早く前方後円墳が築造されたのは、宇土半島基部地域である。それは当地域の西側丘陵上に築造された城ノ越古墳（13：番号は第2図に対応）で、3世紀末頃に位置付けられる。同じ丘陵上にはスリバチ山古墳（12）や迫ノ上古墳（11）、丘陵北側には天神山古墳（15）といった前方後円墳が続いて築造された。一方、当地域の東側丘陵上では、4世紀中頃に向野田古墳（54）や御手水古墳（53）などが築造されている。しかし、5世紀になると前方後円墳はほとんどみられなくなり、わずかに当地域の平野部において

宇土半島基  
部地域の首  
長墓の動向

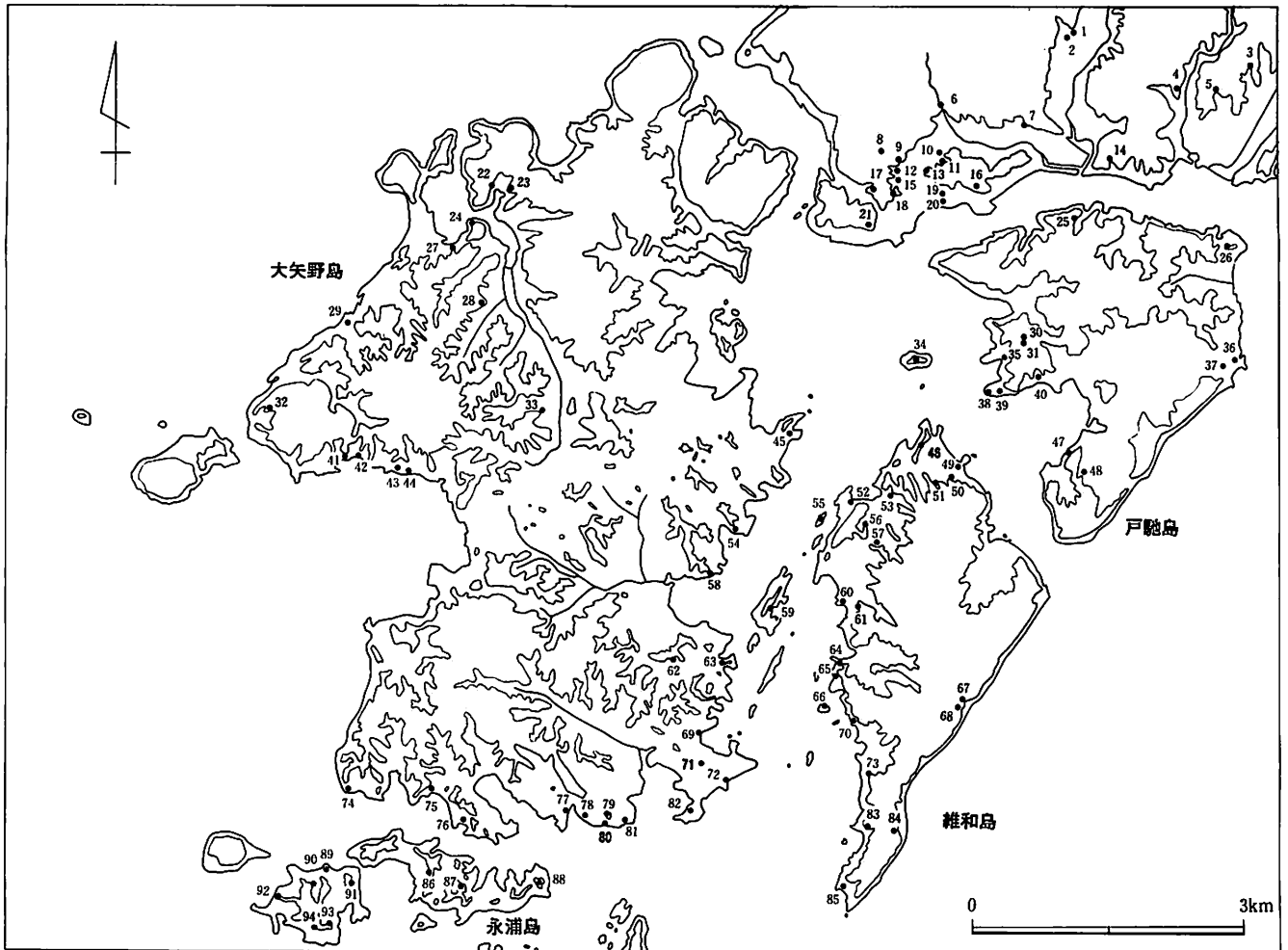


第1図 千崎古墳群の位置



- |            |             |           |            |             |             |             |
|------------|-------------|-----------|------------|-------------|-------------|-------------|
| 1 長塚古墳     | 25 越路古墳     | 49 弁天山古墳  | 73 車塚古墳    | 97 竹島古墳群    | 121 大矢崎古墳群  | 145 大住土墳    |
| 2 今城大塚古墳   | 26 重盛山古墳群   | 50 鴨巻古墳   | 74 岡塚古墳群   | 98 先尾串古墳群   | 122 妻の鼻古墳群  | 146 菱刈小学校土城 |
| 3 狐塚古墳     | 27 成合津古墳群   | 51 塚原平古墳  | 75 長塚古墳    | 99 稚児崎古墳群   | 123 楠浦新田古墳  | 147 溝下古墳    |
| 4 葛九郎山古墳   | 28 女鹿串古墳    | 52 南山内石棺群 | 76 用七古墳    | 100 境目古墳    | 124 立浦古墳群   | 148 成願寺古墳   |
| 5 塚原古墳群    | 29 寺島箱式石棺墓群 | 53 御手水古墳  | 77 高島古墳    | 101 宮崎石棺群   | 125 榎ノ浦古墳群  | 149 堂前古墳群   |
| 6 坂本古墳     | 30 大崎箱式石棺墓群 | 54 向野田古墳  | 78 大島古墳    | 102 名樹石棺墓群  | 126 天附古墳群   | 150 糸割湯古墳   |
| 7 古保里箱式石棺群 | 31 千崎古墳群    | 55 松橋大塚古墳 | 79 八代大塚古墳  | 103 大道鬼の釜古墳 | 127 横島金比羅古墳 | 151 鷗本遺跡    |
| 8 上松山箱式石棺  | 32 桐ノ木尾ばね古墳 | 56 西潤野古墳  | 80 茶臼山古墳   | 104 葛崎古墳    | 128 城の尾古墳群  | 152 新田ヶ丘古墳  |
| 9 境目石棺群    | 33 千束古墳群    | 57 潤野3号墳  | 81 高取上ノ山古墳 | 105 成川内石棺群  | 129 鬼塚古墳    | 153 浦辺古墳    |
| 10 仁王塚古墳   | 34 越路古墳     | 58 檜崎古墳   | 82 乙丸古墳群   | 106 田ノ尻古墳   | 130 太田古墳    | 154 温之浦古墳   |
| 11 迫ノ上古墳   | 35 大戸鼻古墳群   | 59 女塚古墳   | 83 小嵐蔵山古墳群 | 107 牧向古墳    | 131 宮浦遺跡    | 155 明神下岡遺跡  |
| 12 スリバチ山古墳 | 36 広浦古墳     | 60 男塚古墳   | 84 大嵐蔵古墳群  | 108 黒崎古墳    | 132 セベツト古墳群 | 156 明神古墳群   |
| 13 城ノ越古墳   | 37 長砂遺古墳    | 61 古保山古墳群 | 85 尾張宮古墳   | 109 串崎古墳    | 133 鬼塚古墳群   | 157 小浜崎古墳   |
| 14 椿原古墳    | 38 カミノハナ古墳群 | 62 東新城古墳  | 86 丸山古墳群   | 110 通詞島北古墳  | 134 荒毛遺跡    | 158 白金崎古墳   |
| 15 天神山古墳   | 39 もへ山古墳    | 63 大野窟古墳  | 87 五反田古墳   | 111 通詞島西古墳  | 135 高原遺跡    | 159 鬼塚古墳    |
| 16 梅崎箱式石棺群 | 40 瀬崎古墳群    | 64 天塚古墳   | 88 田川内古墳群  | 112 通詞島南古墳  | 136 新深田遺跡   | 160 指江古墳群   |
| 17 御殿山箱式石棺 | 41 梅ノ木古墳    | 65 姫ノ城古墳  | 89 下大戸御古墳群 | 113 通詞島東古墳  | 137 本日遺跡    | 161 鷗崎古墳    |
| 18 長浜箱式石棺群 | 42 保ヶ島古墳    | 66 中ノ城古墳  | 90 鬼塚古墳    | 114 三社宮地古墳  | 138 初野遺跡    | 162 小向江古墳   |
| 19 小松古墳群   | 43 平松古墳群    | 67 物見櫓古墳  | 91 梅殿塚古墳   | 115 沖の原西古墳  | 139 大田土城    | 163 加世堂古墳   |
| 20 城2号墳    | 44 見島崎古墳    | 68 鑑ノ城古墳  | 92 竹の島古墳群  | 116 沖の原東古墳  | 140 成就寺土城   | 164 唐隈古墳    |
| 21 マブシ古墳群  | 45 大串古墳     | 69 大王山古墳群 | 93 大浦古墳群   | 117 春ノ追遺跡   | 141 諏訪野土城   | 165 日之浦古墳   |
| 22 城1号墳    | 46 要古墳群     | 70 原田古墳   | 94 権六古墳    | 118 白岩崎古墳   | 142 瀬の土上城   | 166 濁之尻古墳   |
| 23 ヤンボシ塚古墳 | 47 国越古墳     | 71 有佐大塚古墳 | 95 大松道古墳   | 119 富岡古墳    | 143 寒の神古墳群  |             |
| 24 小田良古墳   | 48 弁天山箱式石棺  | 72 産島古墳群  | 96 下浦須奈古墳  | 120 野浦箱式石棺  | 144 焼山土城    |             |

第2図 八代海沿岸の古墳分布図（アミは標高100m以上を示す）



- |                 |             |              |
|-----------------|-------------|--------------|
| 1 洲の上貝塚         | 33 田端横穴群    | 65 仙十長瀬古墳2号  |
| 2 オサキ古墳         | 34 寺島箱式石棺墓群 | 66 和田島遺跡     |
| 3 くのおご貝塚        | 35 小崎貝塚     | 67 越路北古墳     |
| 4 金桁古墳群         | 36 浜の洲貝塚    | 68 越路南古墳     |
| 5 鬼塚古墳          | 37 道の峯貝塚    | 69 小瀬戸遺跡     |
| 6 古米貝塚          | 38 辺田遺跡     | 70 北ヶ島古墳     |
| 7 塩田浦製塩遺跡       | 39 大崎箱式石棺墓群 | 71 長砂連古墳     |
| 8 うすくぼ遺跡        | 40 辺田貝塚     | 72 貝場遺跡      |
| 9 際崎古墳群         | 41 犬飼横穴群    | 73 大鷲浦古墳     |
| 10 陣の内A遺跡       | 42 犬飼海岸遺跡   | 74 小泊遺跡      |
| 11 陣の内遺跡        | 43 小波戸遺跡    | 75 満越遺跡      |
| 12 際崎貝塚         | 44 江樋戸遺跡    | 76 五杷浦遺跡     |
| 13 越路古墳群        | 45 大湯遺跡     | 77 終が浦古墳群    |
| 14 黒崎石棺         | 46 千崎古墳群    | 78 西小柳古墳     |
| 15 三角船員保険保養所内石棺 | 47 丸子島古墳    | 79 柳の石棺      |
| 16 重盛山古墳群       | 48 犬櫓遺跡     | 80 柳貝塚       |
| 17 三角小学校内石棺     | 49 千崎住吉祠古墳  | 81 小柳遺跡      |
| 18 際崎窯跡遺跡       | 50 桐ノ木墓地古墳  | 82 前原遺跡      |
| 19 陣の内B遺跡       | 51 桐ノ木尾ばね古墳 | 83 白須古墳      |
| 20 島崎古墳群        | 52 梅ノ木遺跡    | 84 大戸鼻古墳群    |
| 21 磯山古墳群        | 53 梅ノ木貝塚    | 85 広浦古墳      |
| 22 成合津遺跡        | 54 治郎田遺跡    | 86 永浦支石墓     |
| 23 成合津古墳群       | 55 禿島遺跡     | 87 もへ山古墳     |
| 24 女鹿串古墳        | 56 浮無田北古墳   | 88 カミノハナ古墳群  |
| 25 田井の浦古墳       | 57 浮無田南古墳   | 89 瀬崎古墳群     |
| 26 鬼塚古墳         | 58 荒木浜遺跡    | 90 樋合島塚大明神古墳 |
| 27 串遺跡          | 59 野牛島遺跡    | 91 樋合島遺跡     |
| 28 賤之女遺跡        | 60 弓田貝塚     | 92 梅ノ木古墳群    |
| 29 諏訪原横穴        | 61 弓田古墳     | 93 山見古墳      |
| 30 鬼塚原遺跡        | 62 野米貝塚     | 94 保ヶ島古墳     |
| 31 鬼塚古墳         | 63 野米遺跡     |              |
| 32 鳩之釜遺跡        | 64 仙十長瀬古墳1号 |              |

第3図 大矢野島・維和島周辺の遺跡分布図（アミは標高20m以上を示す）



松橋大塚古墳（55）が築造される程度である。6世紀前半に築造された国越古墳（47）は、当地域ではじめて横穴式石室を採用した前方後円墳である。宇土半島付け根の南側に位置し、墳頂からは八代海を挟んで野津古墳群（65～68）を望むことができる。6世紀後半に築造された男塚古墳（60）・女塚古墳（59）は、この地域で最終段階の前方後円墳である。7世紀前半には椿原古墳（14）が築造されるが、それは古墳時代終末期に属する唯一の方墳である。

緑川中流域  
の首長墓の  
動向

緑川中流域では、御船地域や城南地域に首長墓がみられる。両地域とも4世紀代には有力な古墳は数少ない。しかし、5世紀になると、御船地域では小坂大塚古墳が、城南地域では將軍塚古墳が築造された。いずれも円墳であるが、多くの武器・武具類が出土していることから、近畿中央部にあった中央政権との密接な関係をうかがうことができる。また、將軍塚古墳がある塚原古墳群（5）では、琵琶塚古墳や花見塚古墳といった前方後円墳が築造された。古墳時代中期において、緑川中流域は、熊本県北部地域の菊池川中・下流域に並ぶ有力な地域と位置付けられよう。6世紀になると、御船地域では長塚古墳（1）や今城大塚古墳（2）が、城南地域では浜戸川を挟んで塚原古墳群所在丘陵の対岸に狐塚古墳（3）や甚九郎山古墳（4）といった前方後円墳が築造されたが、総じて墳丘規模は小さい。

氷川下流域  
の首長墓の  
動向

氷川下流域では、4世紀後半頃、有佐大塚古墳（71）・大王山1号墳（69）という2基の前方後円墳が築造されるが、5世紀代の有力な古墳はほとんど存在しない。しかし、6世紀になると、野津古墳群に物見櫓古墳（67）・中ノ城古墳（66）・姫ノ城古墳（65）・端ノ城古墳（68）が連続して築造された。これらはすべて墳長70mから100m規模の前方後円墳である。さらに続いて、野津古墳群のすぐ北側の丘陵に大野窟古墳（63）が築造された。大野窟古墳は円墳とされることが多いが、周辺の地形などから墳長100mを超える前方後円墳である可能性が高い。このように、6世紀代の氷川下流域は、50m以下の前方後円墳が多くを占める熊本県内の他地域とは様相を異にしており、きわめて有力な地域であったとみることができる。しかし、当地域周辺ではほかに、宇土半島基部地域の国越古墳（47）や球磨川下流域の八代大塚古墳（79）といった6世紀前半の前方後円墳が存在するから、それら古墳と野津古墳群との関係が検討されなければならない。

球磨川下流  
域の首長墓  
の動向

球磨川下流域では、大鼠蔵古墳群（84）が4世紀中頃から後半にかけて、また、高取上ノ山古墳（81）が5世紀中頃から後半頃に築造された。6世紀になると、前方後円墳の八代大塚古墳（79）や大型円墳の茶臼山古墳（80）などが築造された。（西山）

## （2）天草諸島の歴史

天草諸島の  
旧石器時代

天草諸島の旧石器時代の遺跡は、少数であるが確認されている。下島南部の内ノ原遺跡群（牛深市）、下島北部東側の丸尾ヶ丘遺跡・妻の鼻遺跡・菅原遺跡（本渡市）、上島中央南側の扇状地に位置する上揚遺跡・下塔尾遺跡（倉岳町）などが挙げられる。

天草諸島の  
縄文時代

天草諸島の縄文時代の遺跡は、海岸部に位置する比較的大きな拠点的な遺跡と、小河川流域の山間部にある小規模遺跡に二分される。有明海・八代海には九州最大の干潟が存在しているから、それを背景として沖ノ原貝塚（五和町）などの多数の貝塚が形成された。

天草諸島の  
弥生時代

天草諸島における弥生時代の遺跡は、縄文時代に比べると極端に数が少ないため、その実態には不明な点が多い。弥生時代前期にさかのぼる志岐原遺跡（苓北町）や沖ノ原遺跡（五和町）はいずれも下島北部にあり、小壺を副葬した墓が検出されている。中尾遺跡（五和町）採集の石包丁は唯一、稲作農耕の存在を示す資料である。ほかに椎ノ木崎遺跡（牛深市）からは

挟入柱状片刃石斧が出土している。しかし、山地が海岸近くにまで迫り、小河川流域に狭い沖積地が形成されるにすぎない天草諸島では、稲作農耕が主とした生業であったとみなすことは難しく、縄文時代以来の自然に依拠した生業が持続されていた可能性が高いと考えられている。

天草諸島の古墳の大部分は海岸部に分布している。海にむかって突出した岬や、大矢野島・維和島等の小島にも多くの古墳が築造される。こうした岬や小島にある古墳は、いずれも尾根上に立地している。そこは眺望がよく、海上からもよくみえる場所である。墳形には円墳が多く、地下式板石積石室墓や横穴墓もみられる。前方後円墳や前方後方墳などの大型古墳は存在していない。内部主体として、竪穴式石室・箱式石棺・横穴式石室などがある。

天草諸島の  
古墳時代

上天草市松島町の永浦島に所在するカミノハナ古墳群(38)は、天草諸島で唯一、形象埴輪と円筒埴輪を持つことで知られている。埴輪は1号墳からの出土で、5世紀後半に位置付けられる。ほかに3号墳では横刎板鋌留短甲が検出されており、古墳時代中期後半における当古墳群の重要性を示している。本渡市の妻の鼻古墳群(122)では、多くの地下式板石積石室墓が検出された。地下式板石積石室墓は、南九州に特徴的な墓制のひとつで、天草諸島や、球磨川流域と川内川流域に囲まれた地域に分布している。その特徴として、主体部が地下につくられること、群集すること、追葬が行われること、副葬品が少ないことなどが挙げられる。これらの点は八代海沿岸の箱式石棺の特徴と一致しているため、地下式板石積石室墓は八代海沿岸の箱式石棺を祖形とするものと考えられている。

天草諸島の  
古墳

大矢野島・維和島に分布する古墳では、成合津古墳群(27)がまず挙げられる。それは、大矢野島の北西、串湾をのぞむ岬の丘陵上に位置する。1号墳は箱式石棺、2号墳は箱式石棺を内部に持つ竪穴式石室で、千崎古墳群の様相と類似する。桐ノ木尾ばね古墳(32)は、千崎古墳群のすぐ南、道路による切り通しを挟んだ丘陵上に位置する。並列した2つの竪穴式石室を持つ円墳であるが、その近接した位置関係から、千崎古墳群との相関関係が考慮されるべき古墳である。維和島ではほかに、箱式石棺の越路北・南古墳(34)などがある。なお、大矢野島南端の長砂連古墳(37)、維和島南端の広浦古墳(36)は装飾古墳として著名である。

天草諸島における古墳時代の生業では製塩がよく知られている。それは長い脚部を持つ天草式製塩土器を用いて行われたが、5世紀後半から6世紀代にほぼその時期が限られる点は、有明海沿岸の古墳動向と関連させて考察すべききわめて重要な問題である。(西山)

#### 参考文献

- 阿部堅二・今井義量・山崎純男・西健一郎・松本健郎・三島 格 1977「熊本県天草郡成合津古墳調査概報」『熊本史学』第50号 熊本史学会：pp.19-40
- 岩崎充宏編 1990『宮崎石棺墓群』宮崎石棺墓群調査団
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館編 1988『館企画特別展 南九州の墳墓－弥生・古墳時代－展示図録』
- 熊本県教育委員会 1998『熊本県遺跡地図』
- 坂本経堯・坂本経昌 1971『天草の古代』私家版
- 島津義昭 1987「古墳時代」『松島町史』松島町：pp.54-88
- 杉井 健 2003a「古墳時代の始まり」『新宇土市史』通史編第1巻 自然・原始古代 宇土市：pp.421-425
- 杉井 健 2003b「古墳時代の展開と終焉」『新宇土市史』通史編第1巻 自然・原始古代 宇土市：pp.425-433
- 高木恭二 2003「熊本における古墳の動向」『新宇土市史』通史編第1巻 自然・原始古代 宇土市：pp.437-444
- 西健一郎 1988「地下式板石積石室墓の基礎的研究」『九州大学文学部九州文化史研究所紀要』第33号 九州大学九州文化史研究施設：pp.167-209
- 西健一郎 2000「地下式板石積石室墓起源論」『琉球・東アジアの人と文化 高宮廣衛先生古希記念論集』高宮廣衛先生古希記念論集刊行会：pp.103-121
- 文化庁 1975『全国遺跡地図 鹿児島県』
- 益田悦郎 2002「五和町の地質・地形」『五和町史』五和町：pp.2-22
- 山崎純男 2002「原始・古代」『五和町史』五和町：pp.112-264

## 二 調査経過

### 1. 過去の調査（第1次調査）（第4・5図）

千崎古墳群  
の位置

千崎古墳群は熊本県上天草市大矢野町維和千崎3080・3081番地他に所在する。そこは上天草市の東方、維和島の北端にあたり、古墳群の位置する千崎丘陵上からは、北に宇土半島西端の三角港を望むことができる。

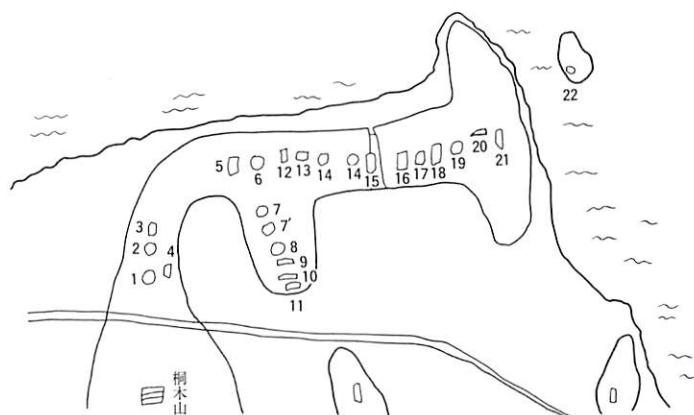
第1次調査

千崎古墳群にはじめて考古学調査の手が入ったのは1955年のことである。玉名高等学校考古学部によるそのときの調査によって、千崎丘陵上で23基、丘陵の東方140mに位置する千崎げんの島で1基の古墳の存在が確認され、各古墳に1から22までの番号（途中に7'を挟む、14が重複する）が付与された（田辺1955a・1955b）（第4図）。これ以降、当古墳群に言及する際にはこの番号が用いられてきたが（熊本県教育委員会1998）、後述のように2004年の測量調査によって新たな古墳の存在が確認されるなどしたため、同年、実状に沿ったかたちで古墳番号を新規に設定した（第1表）。したがって、本書の記述はこの新規番号によっている。

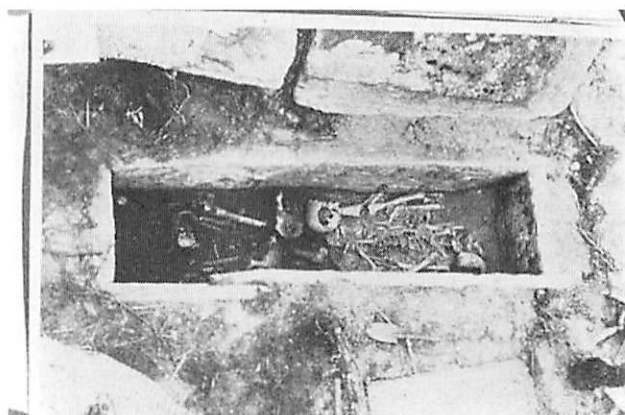
さて、1955年の調査では4基の古墳の発掘調査が実施された。まず、10号墳（旧第11号古墳）では箱式石棺内から4体の人骨が検出された。そのうち3体の頭位は北、1体は南であったという。未盗掘であったらしいが、副葬品は検出されていない（田辺1955b）（第5図）。18号墳（旧第15号古墳）でも箱式石棺内から人骨1体が検出された。石棺の床には砂利が敷かれ、円形の粘土枕が造り付けられていたらしい。副葬品は検出されていない。この石棺の西、丘陵頂部付近の表土直下からは数個の歯を含む人骨が発見されている（田辺1955b）。11号墳（旧第5号古墳）は箱式石棺ですでに開棺されていたが、その棺外から鉄剣1点が7つの破片となって出土した（田辺1955b）。杉村彰一は鉄剣のほかに玉12点と鉄斧が出土したと記している（杉村1955）。鉄剣の長さは55cm、幅は3.8cmであるという。13号墳（旧第12号古墳）も箱式石棺ですでに開棺されていた。その棺外西長側石沿いで10片に割れた鉄剣1点が、棺内で淡い空色のガラス玉1点と3片に割れた刀子1点が検出された（田辺1955b）。以上の出土遺物のうち、人骨は熊本大学医学部に、それ以外は玉名高等学校に持ち帰られた（田辺1955b）。

積石塚に関  
する問題点

ところで、このときの調査概要報告書において、千崎古墳群に分布する各古墳は、箱式石棺あるいは積石塚のいずれかに分類された（田辺1955b）。積石塚とされたのは、箱式石棺に用いられたものとは異なる石材が散布している古墳であり、それらは「箱式石棺の上に積石にて



第4図 1955年作成の古墳分布図（田辺1955aより）



第5図 1955年の10号墳調査風景（坂本1971より）

被覆するもの」(田辺1955 a)とみなされた。しかし、「石をつみあげて墳形を作ったもの」(小林1959)という一般的な積石塚の定義からすれば、現状で石材が散布するだけの古墳に対して積石塚という用語を用いたことには問題があったとしなければならない。このとき以降、当古墳群には積石塚が存在すると各所に記述されることになったのである。なお、以上の調査を、第 1 次調査と呼称する。(杉井)

2. 第 2 次調査 (第 6 図、第 2・3 表)

第 1 次調査以降、千崎古墳群の調査はほとんど行われておらず、わずかに、1981年、熊本大学文学部学生古城史雄と松尾法博によって現状確認調査が実施されたにとどまる(古城・松尾1981)。このときに作成された詳細な記録は、今回、第 1 次調査時の記録と現状の古墳とを対照するにあたり、非常に有益な基礎データとなった。一方、当古墳群の保存に対する取り組みは着実に進められており、1977年11月15日には大矢野町文化財に指定され、1989年からは順次、土地の公有地化がはかられている。

さて、大矢野町(2004年度から上天草市)では、2002年度から町史編纂事業をスタートさせた。熊本大学文学部杉井健はその編纂委員会委員を委嘱されたが、それにとまなう町内遺跡の実地調査を行うなかで千崎古墳群の重要性を認識した。しかし、1955年以来本格的な考古学調査が実施されておらず、また測量図も作成されていない現状を知り、町史編纂事業の一環として、当古墳群についての基礎的資料の作成を計画した。また、熊本大学文学部考古学研究室では2001年度から熊本県植木町所在高熊古墳(前方後円墳)等の調査を開始していたが(杉井・檀編2003、西嶋編2004)、そうした首長墓と千崎古墳群に営まれたような在地墓制とを比較研究することは、熊本県地域の古墳時代を考察するうえで非常に重要であると考えられた。

そこでまず、2003年4月26日から29日までの4日間をかけて、古墳群の現状確認調査を行った。約50年前の玉名高等学校による調査記録と現状の古墳との対照に苦労したが、古墳群はおおよそ旧状を保っていることを確認した。ただし、旧第3号古墳の位置は特定できず、また、千崎げんの島に所在するとされた旧22号古墳は別の場所から持ち運ばれた石材が集積したものと認識した。そして、コンパスと距離計による簡単な分布図を作成して今後の調査に備えた。

以上をもとに、2004年3月16日から23日、および2004年4月24日から5月1日の計16日を費やして、千崎丘陵全体の測量調査を実施した。当初、閉合トラバース網の作成も考えたが、測量範囲が広大である点などを考慮し、トータルステーションを用いた開トラバース測量によって測量基準点を設定した(第6図)。また、千崎丘陵北端にある四等三角点汐浜と対岸の四等三角点後大渦を用いて、現場座標を国土座標に変換した(第2・3表)。そして、平板測量に

第 1 表 新規古墳番号と1955年付与番号の対応関係

新規番号 (2004年)	玉名高等学校による調査 (1955年)		『熊本県遺跡地図』 (1998年)での番号
	古墳番号	備 考	
1号墳	記載無		記載無
2号墳	第1号古墳		第1号墳
3号墳	第2号古墳		第2号墳
削除	第3号古墳		第3号墳
4号墳	第4号古墳		第4号墳
5号墳	第7号古墳		第7号墳
6号墳	第7'号古墳		記載無
7号墳	第8号古墳		第8号墳
8号墳	第9号古墳		第9号墳
9号墳	第10号古墳		第10号墳
10号墳	第11号古墳	人骨4体	第11号墳
11号墳	第5号古墳	鉄剣1・玉12・鉄斧	第5号墳
12号墳	第6号古墳		第6号墳
13号墳	第12号古墳	鉄剣1・刀子1・ガラス小玉1	第12号墳
14号墳	第13号古墳		第13号墳
15号墳	第22号古墳	田辺1955 bでは第22号古墳と記載。 第4図では「14」号墳と誤記。	記載無
16号墳	第14号古墳		第14号墳
17号墳	記載無		記載無
18号墳	第15号古墳	人骨1体	第15号墳
19号墳	記載無		記載無
20号墳	第16号古墳		第16号墳
21号墳	第17号古墳		第17号墳
22号墳	第18号古墳		第18号墳
23号墳	記載無		記載無
24号墳	第19号古墳		第19号墳
25号墳	第20号古墳		第20号墳
26号墳	第21号古墳		第21号墳
削除	第22号古墳	千崎げんの島に所在。 田辺1955 bではチンカンドンの墓、 第4図では「22」号墳と記載。	記載無

第 2 次調査

現状確認調査

測量調査

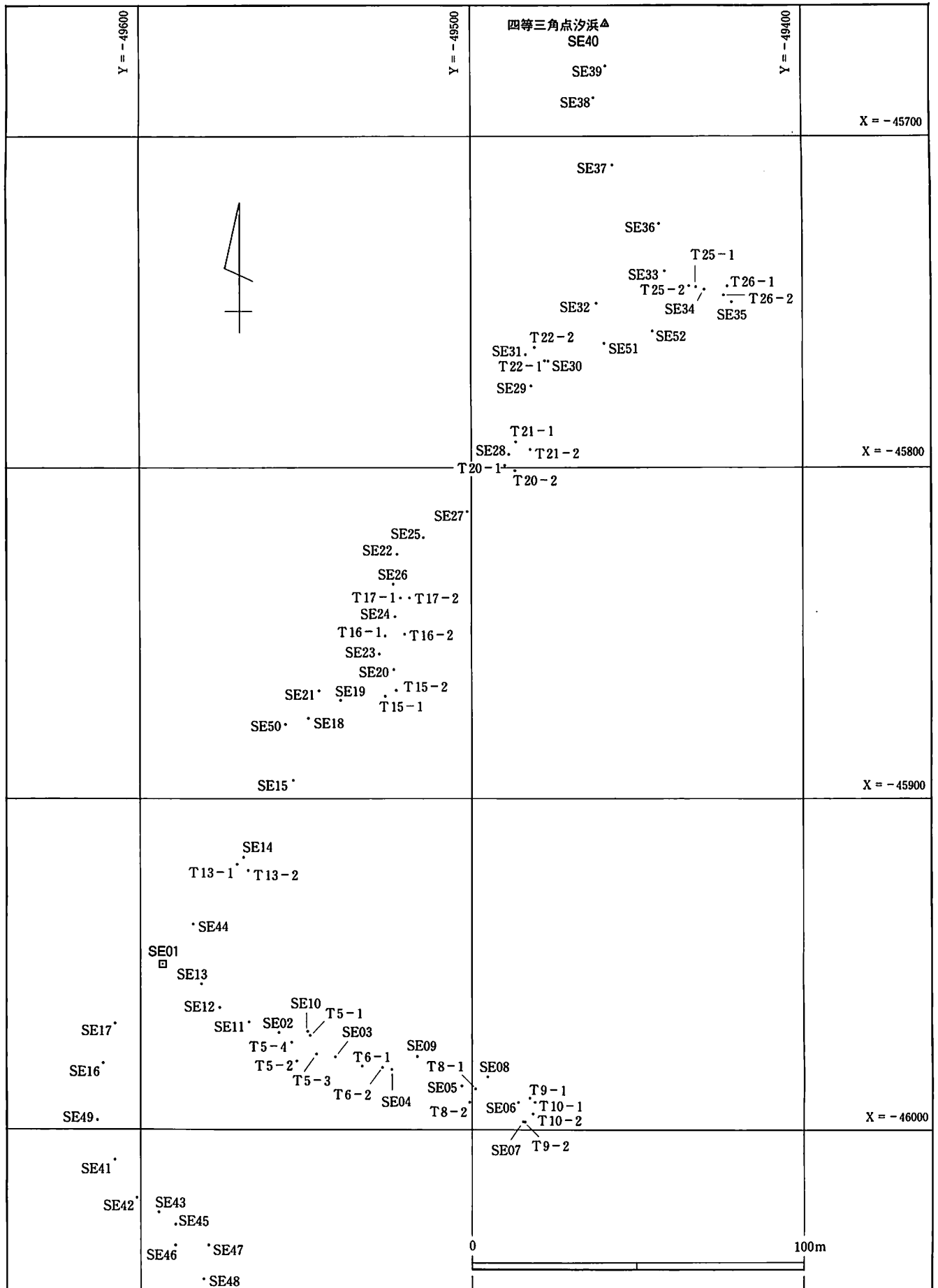
測量調査の方法

第2表 千崎古墳群測量基準点の現場座標

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	標高 (m)	備考
S E 01	0.000	0.000	26.783	
S E 02	0.000	40.182	14.801	
S E 03	2.589	58.403	12.729	
S E 04	8.118	75.122	13.483	
S E 05	15.042	96.071	17.611	
S E 06	19.605	113.615	19.117	
S E 07	15.378	118.067	18.315	
S E 08	21.478	101.496		
S E 09	15.499	79.816	14.081	
S E 10	4.910	47.364	12.845	
S E 11	-1.785	30.860	17.357	
S E 12	-2.574	21.204	20.448	
S E 13	0.797	13.028	23.570	
S E 14	40.003	4.042	24.005	
S E 15	67.613	4.847	22.002	
S E 16	-34.775	0.395	25.296	
S E 17	-22.529	-2.764	24.310	
S E 18	86.085	-0.910	23.144	
S E 19	95.674	4.667	21.835	
S E 20	112.092	13.778	18.805	
S E 21	94.823	-2.452	22.063	
S E 22	142.255	-3.431	23.990	
S E 23	113.659	7.495	18.625	
S E 24	125.774	5.921	20.122	
S E 25	150.702	0.980	24.913	
S E 26	133.945	0.324	22.011	
S E 27	164.440	8.329	21.963	
S E 28	185.857	10.473	20.008	
S E 29	206.828	5.732	22.720	
S E 30	215.899	6.287	23.338	
S E 31	214.098	-0.659	23.511	
S E 32	238.424	9.704	23.275	
S E 33	257.372	22.134	23.948	
S E 34	258.713	35.095	25.072	
S E 35	259.725	44.087	24.072	
S E 36	268.718	13.265	21.581	
S E 37	276.919	-7.729	21.040	
S E 38	291.564	-23.092	22.199	
S E 39	301.586	-25.070	22.895	
S E 40	312.565	-31.979	23.80	四等三角点汐浜
S E 41	-58.139	18.477	29.063	
S E 42	-64.704	29.856	28.521	
S E 43	-65.034	37.576	27.815	
S E 44	14.881	1.502	25.509	
S E 45	-65.589	43.679	27.046	
S E 46	-70.955	46.958	26.339	
S E 47	-65.983	55.211	24.319	
S E 48	-75.493	59.379	23.570	
S E 49	-50.506	7.853	27.199	
S E 50	80.916	-5.767	21.964	
S E 51	229.295	17.957	23.404	
S E 52	239.821	28.421	23.186	
四等三角点後大潟	-434.134	-1218.440	22.98	
T 5 - 1	4.354	48.422		
T 5 - 2	-4.636	49.250		
T 5 - 3	0.286	53.189		
T 5 - 4	-0.464	44.925		
T 6 - 1	4.433	66.868		
T 6 - 2	7.16	72.346		
T 8 - 1	16.426	100.147		
T 8 - 2	11.964	100.716		
T 9 - 1	22.478	115.901		
T 9 - 2	15.593	118.344		
T 10 - 1	22.311	117.925		
T 10 - 2	18.911	119.210		
T 13 - 1	37.149	3.464		
T 13 - 2	37.303	7.267		
T 15 - 1	103.84	15.811		
T 15 - 2	107.049	17.686		
T 16 - 1	119.249	6.340		
T 16 - 2	122.873	11.129		
T 20 - 1	182.569	10.886		
T 20 - 2	182.723	14.472		
T 22 - 1	215.545	5.313		
T 22 - 2	217.351	0.652		
T 26 - 1	263.140	40.415		
T 26 - 2	260.192	40.982		
T 17 - 1	131.443	4.362		
T 17 - 2	132.850	6.736		
T 21 - 1	190.220	10.315		
T 21 - 2	190.506	15.310		
T 25 - 1	257.885	32.646		
T 25 - 2	257.229	30.737		

第3表 千崎古墳群測量基準点の国土座標(世界測地系)

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	備考
S E 01	-45949.870	-49593.197	
S E 02	-45970.636	-49558.796	
S E 03	-45977.836	-49541.859	
S E 04	-45981.743	-49524.689	
S E 05	-45986.641	-49503.176	
S E 06	-45991.802	-49485.798	
S E 07	-45997.721	-49484.171	
S E 08	-45983.935	-49495.205	
S E 09	-45977.850	-49516.856	
S E 10	-45970.144	-49550.110	
S E 11	-45967.346	-49567.700	
S E 12	-45963.031	-49576.374	
S E 13	-45955.920	-49581.631	
S E 14	-45917.712	-49569.063	
S E 15	-45894.491	-49554.105	
S E 16	-45979.845	-49610.830	
S E 17	-45967.728	-49607.206	
S E 18	-45875.701	-49549.487	
S E 19	-45870.374	-49539.757	
S E 20	-45861.027	-49523.472	
S E 21	-45867.424	-49546.291	
S E 22	-45826.311	-49522.617	
S E 23	-45856.439	-49528.041	
S E 24	-45845.254	-49523.128	
S E 25	-45821.359	-49514.475	
S E 26	-45835.366	-49523.697	
S E 27	-45813.396	-49501.084	
S E 28	-45796.169	-49488.180	
S E 29	-45775.765	-49481.401	
S E 30	-45768.286	-49476.238	
S E 31	-45766.238	-49483.115	
S E 32	-45750.768	-49461.672	
S E 33	-45740.970	-49441.238	
S E 34	-45746.521	-49429.449	
S E 35	-45750.301	-49421.228	
S E 36	-45726.674	-49442.967	
S E 37	-45708.803	-49456.702	
S E 38	-45688.326	-49462.286	
S E 39	-45678.724	-49458.800	
S E 40	-45665.753	-49458.995	四等三角点汐浜
S E 41	-46009.192	-49607.424	
S E 42	-46020.693	-49601.076	
S E 43	-46024.965	-49594.637	
S E 44	-45937.906	-49584.220	
S E 45	-46028.594	-49589.699	
S E 46	-46034.882	-49589.665	
S E 47	-46034.891	-49580.030	
S E 48	-46045.187	-49581.376	
S E 49	-45997.167	-49612.575	
S E 50	-45877.616	-49556.316	
S E 51	-45762.849	-49459.324	
S E 52	-45759.245	-49444.926	
四等三角点後大潟	-45691.847	-50860.717	
T 5 - 1	-45971.167	-49549.492	
T 5 - 2	-45979.291	-49553.429	
T 5 - 3	-45977.113	-49547.513	
T 5 - 4	-45973.484	-49554.976	
T 6 - 1	-45980.632	-49533.659	
T 6 - 2	-45981.128	-49527.560	
T 8 - 1	-45987.563	-49498.971	
T 8 - 2	-45991.677	-49500.790	
T 9 - 1	-45990.524	-49482.356	
T 9 - 2	-45997.680	-49483.823	
T 10 - 1	-45991.713	-49480.710	
T 10 - 2	-45995.287	-49481.367	
T 13 - 1	-45919.856	-49571.032	
T 13 - 2	-45921.690	-49567.697	
T 15 - 1	-45869.143	-49525.996	
T 15 - 2	-45867.364	-49522.733	
T 16 - 1	-45851.056	-49526.141	
T 16 - 2	-45850.429	-49520.168	
T 20 - 1	-45799.197	-49489.525	
T 20 - 2	-45800.918	-49486.376	
T 22 - 1	-45768.086	-49477.255	
T 22 - 2	-45764.131	-49480.312	
T 26 - 1	-45745.480	-49422.607	
T 26 - 2	-45748.297	-49423.645	
T 17 - 1	-45839.595	-49521.533	
T 17 - 2	-45839.617	-49518.773	
T 21 - 1	-45792.352	-49486.060	
T 21 - 2	-45794.688	-49481.636	
T 25 - 1	-45745.964	-49431.973	
T 25 - 2	-45745.539	-49433.947	



第6図 千崎古墳群測量基準点の位置関係（国土座標による）



第7図 現地説明会風景（第3次調査）

### 3. 第3次調査（第7図）

#### 第3次調査 の目的

第3次調査は、2004年8月31日から9月16日までの17日間で実施した。目的は、すべての古墳の現状写真を撮影すること、露出しているすべての石棺の現状実測図を作成すること、さらに積石塚とされている古墳の実体を解明することとした。そのため、参加学生が数人単位で古墳群全体に分散して個々に作業を行うという、これまでの熊本大学にはない調査体制となった。いわゆる積石塚の実体解明では、5号墳と6号墳を選択し、散乱する石材の現状実測図を作成したのち、発掘区を設定して掘り下げを行った。その結果、5号墳では、10cm程度掘り下げた段階で、残存する竪穴式石室上面の輪郭を検出した。このことにより、積石塚とされてきたものであると推定された。なお、5号墳の掘り下げは石室の輪郭が検出された段階で中止し、記録作業を行ったのち、土のうを用いて埋め戻した。一方、6号墳では表土直下で地山を検出したが、墓壙などの痕跡はまったく確認できなかった。そのため、6号墳は、墓壙底にまでおよぼ徹底した破壊を被っている可能性がきわめて高いと判断された。

途中、台風18号が九州を直撃するということがあったが、9月10日には維和中学校、11日には地元の方々への現地説明会を実施することができ、あわせて100名程度の参加者を得た。そして16日の撤収をもって現地での作業を終了した。なお、遺物はまったく検出されなかった。

#### 今後の課題

最後に今後の課題について整理しておく。まず、不備が発見された26号墳の箱式石棺実測図を再度作成する必要がある。また、5号墳のより詳細な調査も必要である。さらに、第1次調査で発掘された石棺の再調査、また、検出遺物の所在確認および資料化も不可欠である。人骨については、2004年10月12・13日に九州大学大学院中橋孝博先生に熊本大学までご足労いただき調査を開始した。次年度以降に、以上の調査を継続していきたいと考えている。

なお、第2・3表には、第2次・第3次調査で設定した測量基準点のデータを提示している。

（杉井）

#### 参考文献

- 熊本県教育委員会 1998『熊本県遺跡地図』
- 熊本県立玉名高等学校考古学部 1955『天草維和村の考古学的調査の果』
- 小林行雄 1959『積石塚』『図解考古学辞典』東京創元社：p.674
- 坂本経亮・坂本経昌 1971『天草の古代』私家版
- 杉井 健・檀佳克編 2003『高熊2号墳測量調査報告』『考古学研究室報告』第38集 熊本大学文学部考古学研究室
- 杉村彰一 1955『千崎古墳発掘調査記』『玉高新聞』第34号 熊本県立玉名高等学校新聞部
- 田辺哲夫 1955a『玉名高等学校考古学部の天草郡維和古墳群調査結果について』熊本県立玉名高等学校
- 田辺哲夫 1955b『天草郡大矢野町維和古墳群調査概要』熊本県立玉名高等学校
- 古城史雄・松尾法博 1981『肥後・天草の古墳文化』熊本大学文学部1981年度卒業論文
- 西嶋剛広編 2004『高熊古墳第1次・第2次調査概要』『考古学研究室報告』第39集 熊本大学文学部考古学研究室



### 三 古墳群の構造

#### 1. 古墳群の現状（第8・9図、図版1）

千崎古墳群は、熊本県上天草市大矢野町維和千崎3080・3081番地他、維和島北端に突き出した千崎丘陵上に位置する。北に三角港を望むこの千崎丘陵は、現在、周囲を海と田畑などの平地で囲まれている。しかし、丘陵周辺の平地は干拓地であり、当丘陵はかつて海に突出した岬であったと思われる。また、現在は道路の開通により寸断されているが、本来丘陵は南端からさらに道路を挟んで南東へ続いていたと思われる。その南東へ続く丘陵上には、並列した2つの竪穴式石室を持つ桐ノ木尾ばね古墳が所在している。

千崎古墳群  
の位置

千崎丘陵の大きさは、崖下まで含めると南北に約500m、東西に約300mであり、小規模の丘陵である。丘陵は、11号墳のある標高27.260mの頂部を分岐点として3方向に伸びている。この分岐点を境にして北東へ伸びる尾根を北尾根、南へ伸びる尾根を南尾根、南東へ伸びる尾根を東尾根と呼称することにする。また、北尾根はさらにその北端部付近で北西へ分岐し、標高23.80mを示す四等三角点汐浜に至る。丘陵上の古墳が分布する範囲は、南尾根から北尾根までを合わせると長さ400mにもおよぶ。

千崎丘陵  
尾根の呼称

さて、南尾根は、分岐点より南へ徐々に高さを増し、4号墳の位置する頂部で千崎丘陵中最高点の標高29.034mとなる。そこからは南へ行くにしたがって高さを減じている。

南尾根

東尾根は、分岐点から南東へ急激に標高を下げ、5号墳周辺で緩傾斜にかわる。そして、水平な平坦面を挟んで、6号墳付近からふたたび緩やかに標高を上げる。東端の9・10号墳付近が東尾根の最高点で標高19.206mを示すが、そこから東はきわめて急な崖となっている。

東尾根

北尾根は、分岐点から北東へ幾つかの頂部を持ちながら伸びる。1つ目の頂部は14号墳付近であり、標高23.318mである。2つ目の頂部には18号墳が位置しており、標高は24.871mを示す。そこから北東へ下ると19～21号墳が並ぶ丘陵鞍部に至るが、その東側は現在蜜柑畑となっている。21号墳から北へは緩やかに標高を上げ、かなり広い平坦地に至る。そこにはジャガイモ畑があり、その北東には蜜柑畑が営まれている。北尾根の北端は25号墳周辺で標高25.314mの頂部となり、そこからは急激に下っていく。26号墳の南東側は現在墓地となっている。

北尾根

北尾根北端より四等三角点汐浜に向かって北西へと伸びる尾根上には、そこが他より痩せ尾根であるためか、古墳は分布していない。

現在、丘陵全体は山林となっている。丘陵尾根上に箱式石棺や石室を持つ古墳が点在しているが、それらは風雨や植物の影響、あるいは盗掘によって相当の破壊を受けている。墳丘盛土が消失して石室石材が散乱しているものが多く、また長側石や小口石の半ばまで露出している石棺も存在する。

千崎丘陵の  
現状

（原）

#### 2. 古墳の分布状況（第9図）

千崎古墳群では現在26基の古墳が確認されている。そのうち、現状で明確に箱式石棺の存在を確認できるものが15基（4・7～11・13・15～17・20～22・25・26号墳）ある。また、竪穴式石室の存在を確認できるものが1基（5号墳）、石室石材と思われる石材が散布しているものが11基（2・3・7・12・14・16・18・19・22～24号墳）ある。ほかに、徹底的な破壊を被っていることが今回の調査によって判明したものが1基（6号墳）、詳細が不明で古墳とし

古墳の内訳



て認定できるのか否かが不確定なものが1基（1号墳）存在している。

**南尾根** 南尾根上には1号墳から4号墳までの4基が分布している。11号墳が位置する尾根分岐点からいったん下ったのち、ふたたび上がった頂部に4号墳が位置する。そこから南へ緩やかに標高を下げながら3号墳、2号墳、1号墳の3基が続く。これら4基は近接し、また他の古墳と離れて存在していることから、1つのまとまりをなしていると考えられる。

**東尾根** 東尾根上には5号墳から10号墳までの6基が分布している。11号墳がある尾根分岐点から東へ急激に下ったのち傾斜が緩やかになる地点に、竪穴式石室の存在が確認された5号墳が位置している。その東、丘陵鞍部の平坦面を挟んで、ふたたび緩やかに傾斜を上げ始める地点に6号墳が存在する。それは当古墳群の中でもっとも低い地点に位置している古墳である。6号墳からさらに上がったところには7号墳が存在する。その周辺には石室石材と思われる石材が尾根幅いっぱい散布している。7号墳からやや上った地点には8号墳があり、東尾根東端頂部には9・10号墳の2つの石棺が並列している。以上の東尾根の6基も、その配置から判断すれば1つのまとまりをなしていると思われる。埋葬施設の主軸方向が尾根筋に直交するという共通点がある。

**北尾根** 北尾根上には11号墳から26号墳までの16基が分布している。

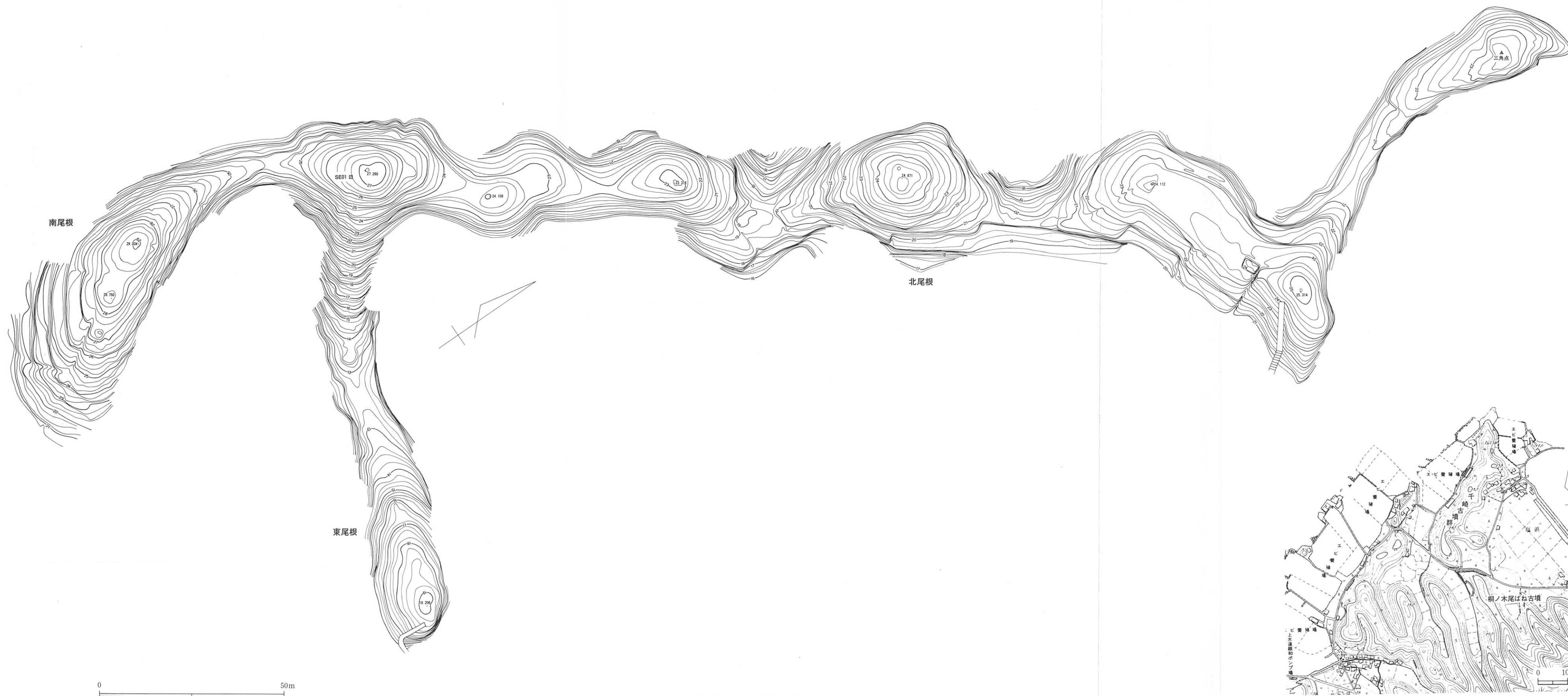
11号墳は千崎丘陵の尾根分岐点に位置する。そこからやや北東に下った場所に12号墳が、さらに標高を下げて平坦面となったところに13号墳が存在する。これら3基の古墳は近接していることから1つのまとまりをなすと考えられる。

13号墳から北東へ進むと北尾根1つ目の頂部に至り、そこには14号墳が存在する。その地点と18号墳がある北尾根2つ目の頂部とに挟まれた丘陵鞍部には、15～17号墳が存在する。15号墳は尾根筋から少し東へ入った平坦地にある。16・17号墳は18号墳へ続く傾斜地に位置する。14～18号墳の5基は、その近接した位置関係を重視すれば1つのまとまりとみなすこともできる。しかし、丘陵頂部に位置する14号墳と18号墳はそれぞれが独立した存在である可能性がある。そうであれば、14・15号墳、16～18号墳という2つのまとまり、あるいは14号墳、15～17号墳、18号墳という3つのまとまりにグループ分けすることもできるだろう。

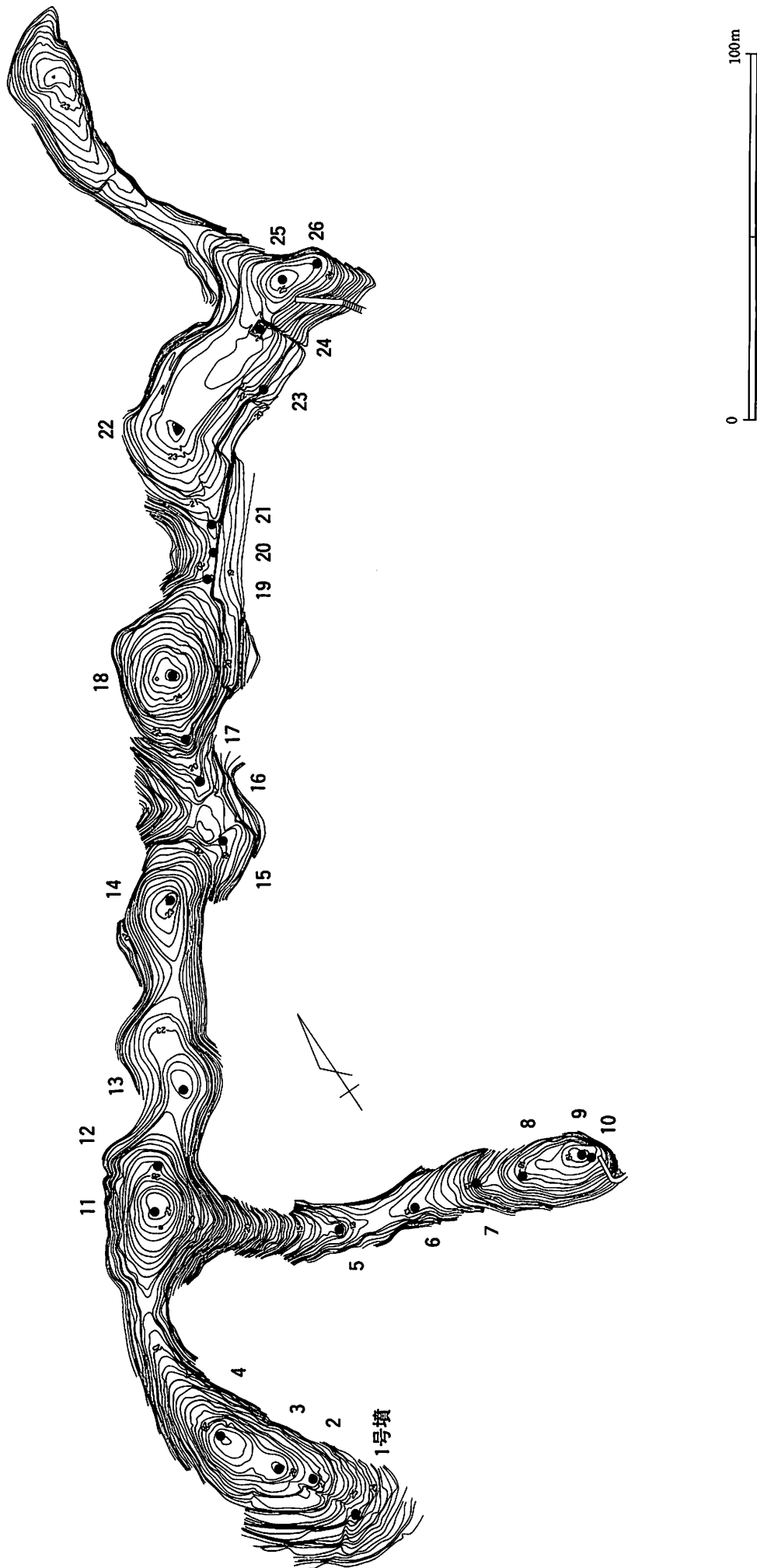
北尾根2つ目の頂部には18号墳が存在するが、それと22号墳の間は丘陵鞍部となっている。そこには19～21号墳の3基がほぼ等間隔に並んでいる。その位置関係から判断して、これら3基は、1つのまとまりをなすものと考えられよう。

21号墳から北へ斜面を上がると、北尾根北端の広い平坦地に至る。その平坦地南端の頂部には22号墳が存在する。22号墳から尾根筋に沿って東へ進むと24号墳が、さらにそこから東へ行くと北尾根北端の頂部となり、そこには25号墳が存在する。25号墳の南東、北尾根の先端部には26号墳が存在している。また、24号墳の南西、現在蜜柑畑となっている南向き斜面には23号墳が位置している。それは、段々畑の段落ち部分に石室控え積石材が顔をのぞかせた状態である。これら22～26号墳の5基は、北尾根北端の平坦地に位置するグループとして1つにまとめられる。しかし、他からやや離れている点を重視すれば、22号墳を単独の存在とみなすことも可能である。その場合、23・24号墳を石室であるという共通点で、さらに25・26号墳を箱式石棺であるという共通点で、それぞれを1つにまとめることができるのかもしれない。ただし、23号墳は尾根筋上に位置しない点で、25号墳は石棺主軸方向が丘陵尾根筋に平行する点で、千崎古墳群にある他の古墳とは様相を異にしている。

(原)



第8図 千崎古墳群所在丘陵の地形測量図(1/800)



第9図 千崎古墳群の古墳分布図 (1/1600)



第10図 1号墳の現状（南東から）



第11図 2号墳の現状（北から）



第12図 3号墳の現状（北から）



第13図 4号墳の現状（北から）

### 3. 各古墳の構造

第3次調査では、千崎古墳群で確認されている26基の古墳のうち、箱式石棺が地表に露出しているものについては現状実測図を作成し、それ以外については写真撮影などの記録作業を行った。以下にその所見を記す。なお、発掘調査を実施した5号墳と6号墳については、次章で記述する。（杉井）

#### （1）1号墳（第10図）

千崎古墳群のもっとも南に位置する。そこは4号墳が所在する南尾根最高所から南へ約40mの緩やかな傾斜地にあたり、標高は約24.4mである。

当地は、丘陵の尾根筋方向に約4m、それに直交する方向に約5mの円丘状の高まりをなす。古墳としての番号を付したが、当地の北西側にある段々畑造成によって形成された高まりである可能性がある。また、石材がわずかに散布しているが、それは本来2号墳にともなっていた石材が転落してきたものである可能性が高い。したがって、1号墳に関しては、古墳として認めることができるのかどうかの今後の検証作業が不可欠である。（杉井）

#### （2）2号墳（第11図）

南尾根、4号墳の南約28mにある。標高は27.8mである。直径約4.5mの低い円丘状の高まりの中央に多数の石材が散布する。石材散布範囲は東西2.9m、南北2.5mの長方形を呈し、その輪郭の所々で石材が直線に並ぶ箇所を観察できる。それは石室控え積石材の外郭線を示している可能性が高い。したがって当墳の主体部は東西に主軸を持つ竪穴式石室と推定できる。その上半部は破壊されているが、基底部付近は残存している可能性がある。（杉井）

#### （3）3号墳（第12図）

南尾根、4号墳の南19.6mにある。標高は28.7mである。直径5～6mの低い円丘状の高まりがあり、その東寄りの東西3.9m、南北3.5mの範囲に多数の石材が散布する。竪穴式石室が崩壊したものと思われる。石材の散布状況からすれば、その主軸は東西（尾根筋に直交）方向である可能性がある。石棺材とも思われる板石がいくつか存在するが、明確なことはわからない。（杉井）



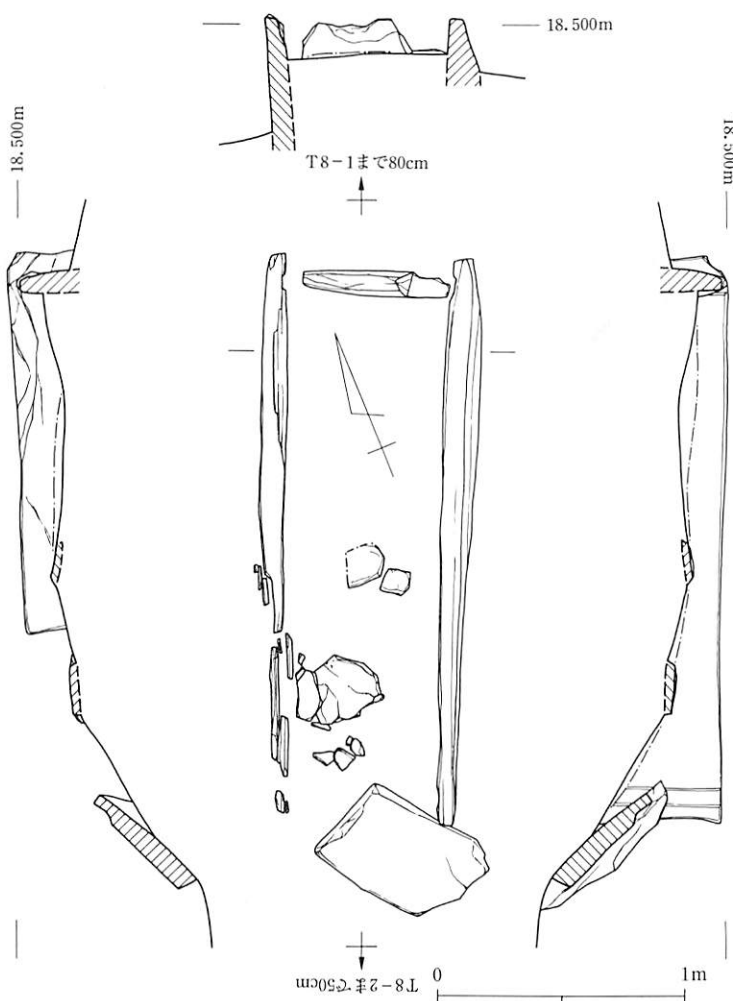
#### (4) 4号墳 (第13図)

南尾根の最高所、標高29.034mに位置する。11号墳がある尾根分岐点から約65mの距離がある。地山岩盤が地表面の一部に露出しており、そこに石棺材片と思われる石材が10点弱散布する。また、原位置を保つと思われる石棺材(厚さ7cm)が、50cm以上にわたって地表面に顔をのぞかせる。それによれば、石棺主軸は東西(尾根筋に直交)方向と推測できる。なお、石室石材らしきものは散布していない。(杉井)



#### (5) 7号墳 (第14図)

東尾根東端頂部から西へやや下った傾斜地、8号墳の西12.6mに位置する。直径約5mの範囲に多数の石材が積み重なるように散布する。散布石材の隙間では、立った状態の板石(厚さ8cm)が数箇所に見られ、それらが直角に組み合わせられた箇所も観察できる。これらのことから、箱式石棺を囲う竪穴式石室が崩壊したものと推測できる。ただし、石室石材の散布範囲が広いこと、観察される石棺材の長さやその位置などを考慮すれば、2基以上の箱式石棺が存在する可能性が高い。なお、当墳は千崎古墳群でもっとも大規模なものである。(杉井)



第14図 7号墳の現状(西から)

#### (6) 8号墳 (第15図、図版2-1)

東尾根先端部の頂上付近、9号墳の西18.0mに位置する。覆土は消失し箱式石棺の大部分が露出している。蓋石は残存していない。南小口石は原位置を保っていない。西長側石の南側の石材は破壊され、その破片が石棺内に散乱している。主軸方向はN22°Eで、尾根筋と直交する。石室石材らしきものは見られない。

石棺は小口が各1枚ずつの石材、長側石のうち東側は1枚、西側は2枚の石材で形成されている。小口石と長側石の組み合わせ方はH字形(清家2001)である。西長側石の2枚の石材はその端部をカギ状に加工し組み合わせられている。長側石の小口石と組み合わせる部分には凹状の切り込みが設けられている。しかし現状では、長側石の切り込み部とかみ合っていない。

カギ状に加工した石材を2枚組み合わせた長側石は9号墳、13号墳にも見られる。しかし、両長側石の枚数が異なるのは8号墳のみである。また、長側石の凹状の切り込みは9号墳、13号墳、15号墳、22号墳にも見られる。

第15図 8号墳箱式石棺現状実測図

石棺の大きさを内法で示すと、北小口幅は65.6cm、南小口幅は約60cmで、北側の方が広い。長さは、南側を東長側石の凹状削り込み部までで計測すると、約195cmである。(森)

(7) 9号墳・10号墳(第16～18図、図版2-2～4)

東尾根東端の頂部、8号墳から東18.0mのところに位置する。西側が9号墳、東側が10号墳で、どちらも箱式石棺が露出している。9号墳の石棺主軸方向はN11.5°E、10号墳はN10.5°Eで、尾根筋と直交する。これら2つの石棺の間隔は2mと非常に狭く、またほぼ平行に配置されていることから、両者は密接な関係を持って築かれたと推測できる。現在それぞれに異なった古墳番号が付されているが、本来は同一墳に並列して築かれたものである可能性がある。したがって、この報告では、同じ項のなかで言及する。

9号墳(第17図) 覆土は消失し、箱式石棺の上面が露出している。石室石材と思われるものはみられず、石棺身部と蓋石の一部が残存する。長側石と小口石はほぼ原位置を保っているが、蓋石は移動している。第16図の石材Aと石材Bは、断面の形や石の質などから同一石材であると判断でき、9号墳の蓋石の一部と考えられる。

小口石はそれぞれ1枚の石材で、長側石はどちらも2枚の石材で形成されている。長側石と小口石の組み合わせ方はH字形である。長側石は2枚の石材の端部をカギ状に加工して組み合わせたものである。また、組み合わせ部分の外側に長側石から割れたものではない別の板石が置かれている。これは、長側石の組み合わせ部分を外側から押さえる目的で置かれたものと思われる。カギ状に加工された組み合わせ部を持つ長側石は、8号墳、13号墳にもみられる。しかし、組み合わせ部分の外側に別の板石をとまうものは9号墳のみである。

長側石の小口石と組み合う部分には、凹状の削り込みが設けられている。しかし、西長側石の南側には削り込みがみられない。南小口石はやや石棺内側に傾いており、長側石の削り込みと対応していない。蓋石の裏には、石棺身部上端面と対応する溝状の加工が施されている。

石棺の大きさを内法で示すと、北小口幅58cm、南小口幅54.5cmであり、北側の方が広い。長さは204.5cmである。

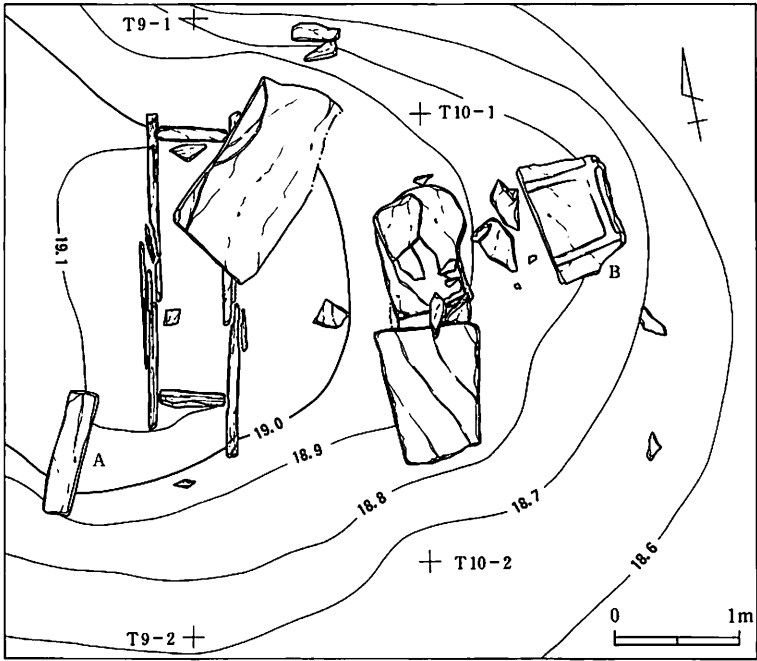
10号墳 10号墳は1955年の第1次調査で発掘され、箱式石棺内から4体の人骨が検出された。副葬品は出土していない(田辺1955b)。現在、蓋石は元に戻されており、2枚の蓋石の上面と長側石の一部分が露出している状態である。石室石材と思われるものはみられない。

今回の調査では、石棺内の構造に関する調査はできなかった。しかし『天草の古代』(坂本経堯・経昌1971)には、蓋石を外された状態の10号墳(旧第11号古墳)の写真が掲載されている(第5図)。それによると、小口石は各1枚の石材で、長側石の片方は2枚の石材で形成されていること、また長側石と小口石の組み合わせ方はH字形であることがわかる。

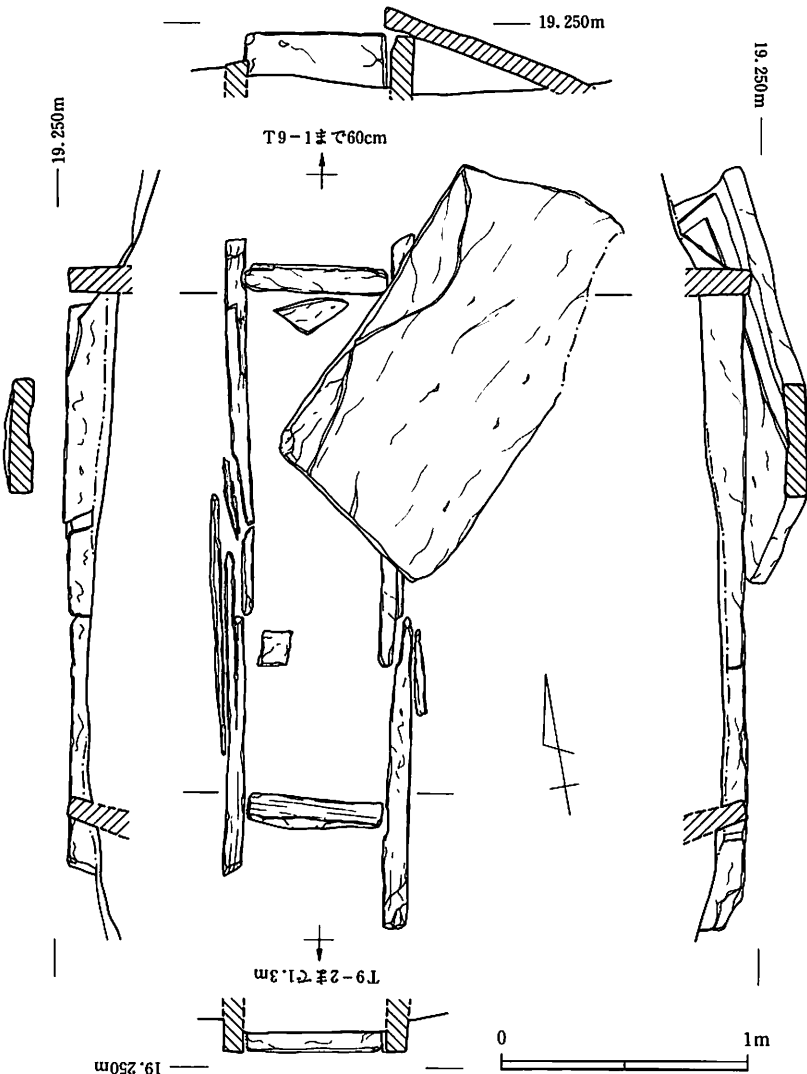
蓋石の全長は224.5cm、幅はもっとも広い箇所が85.5cmである。長側石上端から棺内床面までは30～35cmの高さがある。棺幅は内法で35.5cmと狭く、9号墳より小型である。(仙波)

(8) 11号墳(第19図)

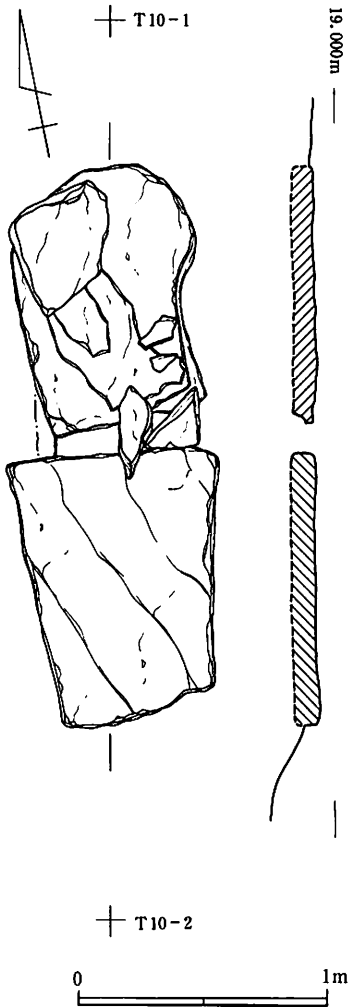
北尾根、南尾根、東尾根の結節点、標高27.2mに位置する。箱式石棺西長側石の一部がわずかに露出する。ピンポールで土中を確認したところ、その東60cmの位置に東長側石が埋没していることが判明した。主軸は北から約40°西へ振る。西長側石露出箇所から南2mには蓋石片と思われる石材が10点弱、西5mには2枚の板石が散布する。石室石材らしきものは存在しない。当墳は1955年の第1次調査で発掘され、棺外から鉄剣1点(田辺1955b)が、ほかに玉12



第16図 9・10号墳位置関係図



第17図 9号墳箱式石棺現状実測図



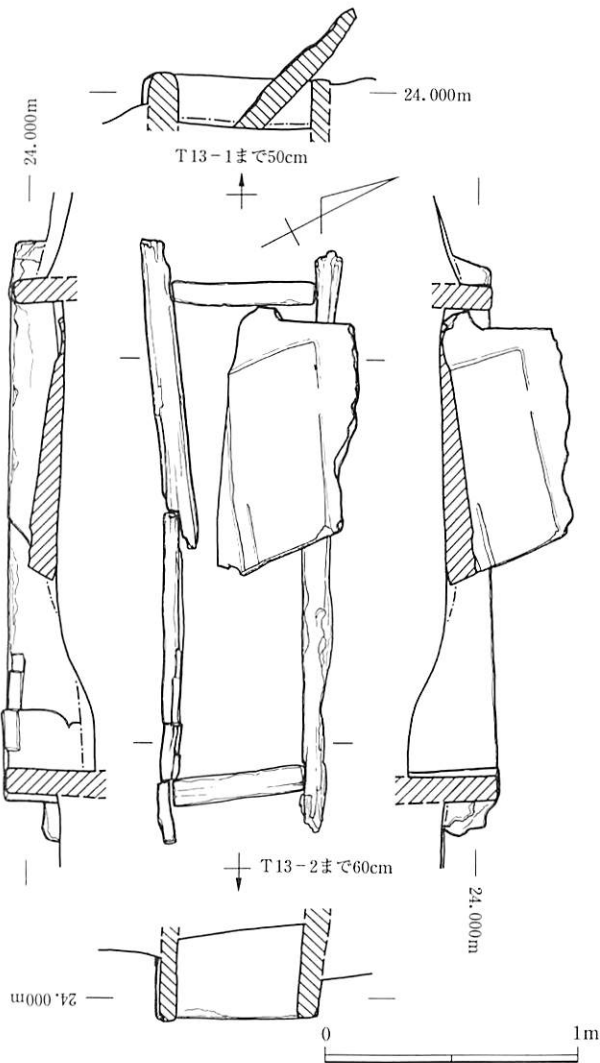
第18図 10号墳箱式石棺現状実測図



第19図 11号墳の現状（北東から）



第20図 12号墳の現状（南西から）



第21図 13号墳箱式石棺現状実測図

点と鉄斧（杉村1955）が検出されている。（杉井）

#### （9）12号墳（第20図）

11号墳から北尾根方向へ15.4m、緩やかな傾斜地に位置する。標高は25.7mである。長軸3m、短軸1.5mの楕円形に石材が散布する。ただし、その中央付近にはほとんど石材が存在しない。尾根筋に直交する方向に主軸を持つ竪穴式石室が破壊されたものと思われるが、石室基底部付近は残存している可能性がある。石棺石材と思われるものは散布していない。（杉井）

#### （10）13号墳（第21図、図版3-1）

北尾根と東尾根が分岐する地点のやや北、12号墳の北東21.0mに位置する。覆土は消失し石棺の大部分が露出している。石室石材と考えられる石材はみられない。主軸方向はN61.5°Wであり、尾根筋と直交している。

13号墳は、1955年の第1次調査で発掘が行われている。その際に、石棺内からガラス小玉と刀子が各1点、棺外側面から鉄剣が1点出土している（田辺1955b）。

石棺は小口石が各1枚の石材、長側石が各2枚の石材で形成されている。小口石と長側石の組み合わせ方はH字形である。長側石の2枚の石材はその端部をカギ状に加工し組み合わされている。長側石の小口石と組み合わせ部分には凹状の削り込みが設けられている。また、蓋石の裏面は、石棺身部上端面と組み合わせ部分が低くなるように削られている。なお、カギ状に加工した石材を2枚組み合わせた長側石は8号墳、9号墳に、長側石の凹状の削り込みは8号墳、9号墳、15号墳、22号墳にもみられる。また、蓋石裏側の加工は9号墳にもみられる。

石棺の大きさを内法で示すと、長さは約184cm、幅は西小口約56cm、東小口約50cmで、西側の方が広い。（森）

#### （11）14号墳（第22図）

北尾根にはいくつかの頂部があるが、当墳は11号墳のある尾根分岐点から数えて1つ目の頂部、標高23.3mに位置する。13号墳からは北東へ51.4mの距離がある。

石材が直径約5mの範囲にまばらに散布する。その多くは石棺材片と思われるが、一部に角の取れた礫や厚みのある礫があり、それらは石室石材と推測できる。棺内床面に敷かれたと思われる径2～4cmの円礫が頂部やや東寄りに露出している。その状況から、石棺主軸は尾根筋に直交する方向と推測できる。当墳は相当の破壊を受



けていると判断できる。(杉井)

### (12) 15号墳 (第23図、図版3-2)

北尾根の14号墳と18号墳に挟まれた鞍部、14号墳の東22.4mに位置する。覆土は消失し、石棺の上面が露出している。石棺の周囲には蓋石の破片が散乱している。主軸方向はN118.5° Wである。

石棺は小口石が各1枚、長側石が各2枚の石材で形成される。小口石と長側石の組み合わせ方はH字形である。両長側石とも東側の石材を西側の石材の外側に配置している(重ね継ぎA、清家2001)。また、西側の石材にはどちらもとくに薄い板石が用いられている。

長側石の小口石と組み合う部分には凹状の削り込みが設けられている。これは8号墳、9号墳、13号墳、22号墳にもみられる造作である。

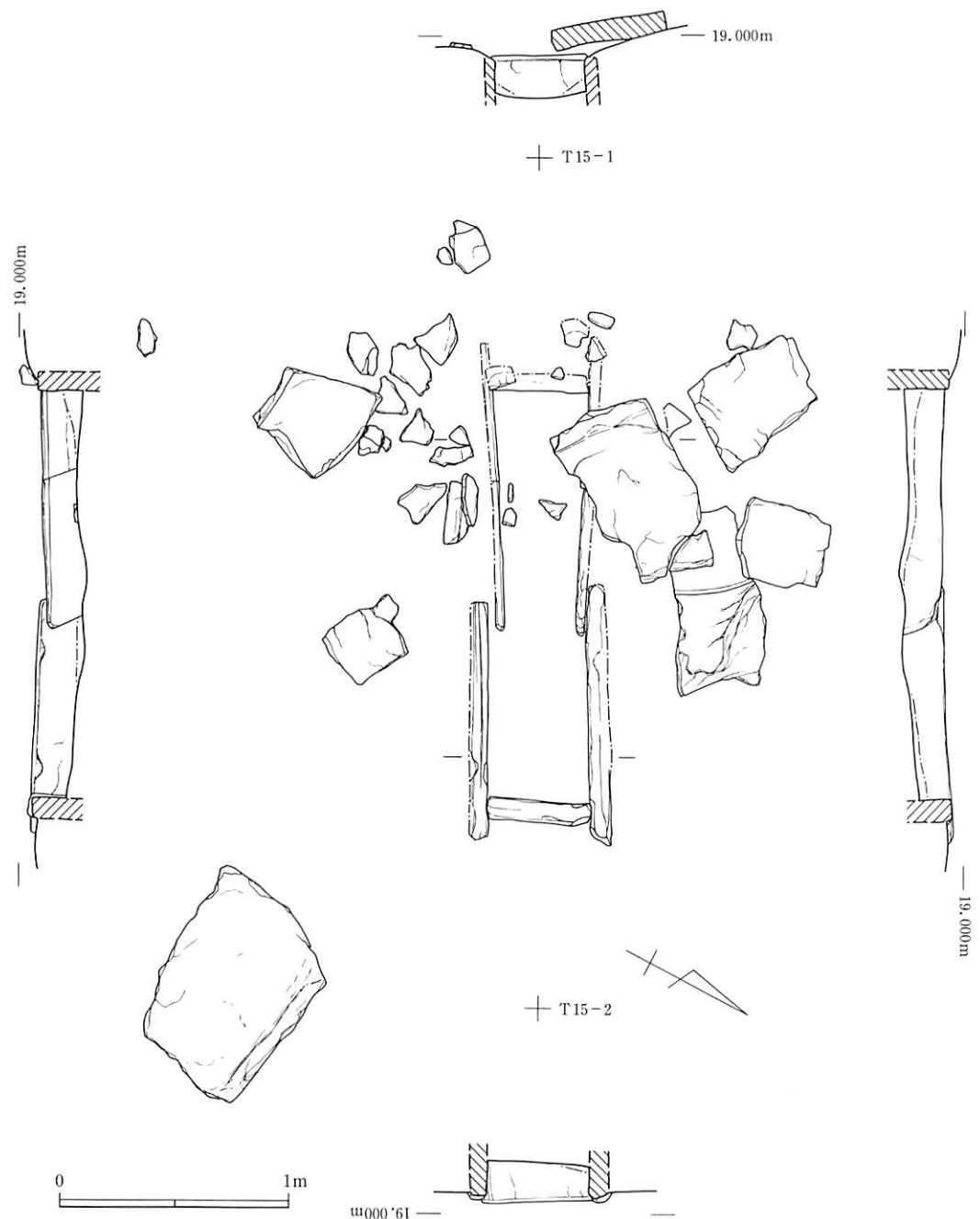
両小口石と両長側石の棺内面に赤色顔料が付着している。顔料の付着が確認されているのは、現在当墳のみである。

石棺の大きさを内法で示すと、長さは約178cm、幅は東西両小口とも約42cmである。しかし、石棺西側の幅は、長側石の重ね継ぎ部分へ向けて徐々に狭くなり、石棺の中央に至ると約32cmとなっている。

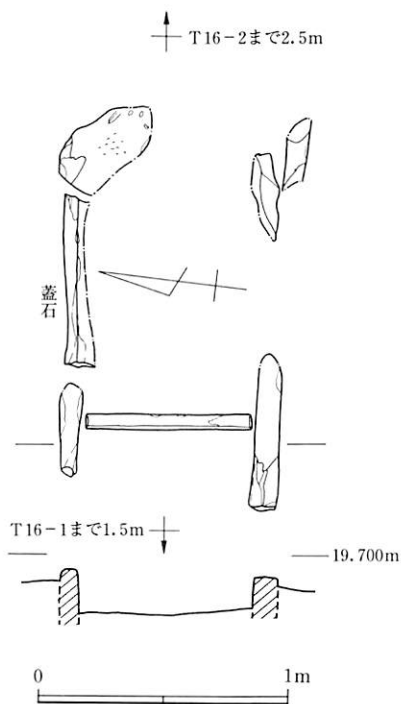
(森)



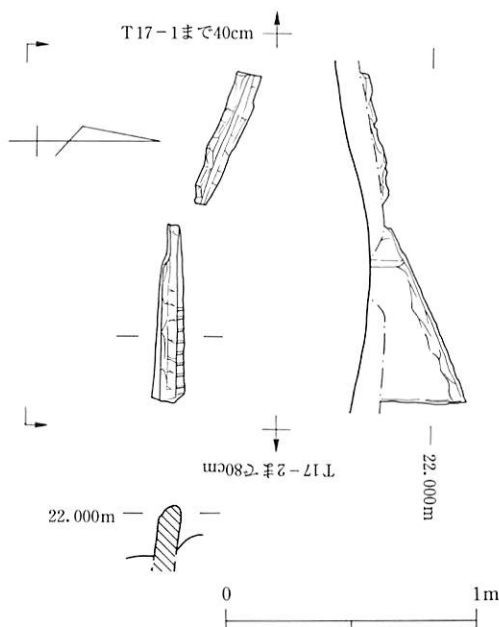
第22図 14号墳の現状 (北東から)



第23図 15号墳箱式石棺現状実測図



第24図 16号墳箱式石棺現状実測図



第25図 17号墳箱式石棺現状実測図



第26図 18号墳の現状（北から）

### (13) 16号墳（第24図、図版3-3）

北尾根の14号墳と18号墳に挟まれた鞍部、15号墳の北17.7mに位置する。箱式石棺の西半部のみが露出しており、長側石と蓋石の一部、西小口石を確認できる。南長側石の中間部分は埋没している。北長側石は小口石と組み合わせ箇所が露出するのみで、その東側にある石材は斜めになった蓋石の端面である。ピンボールで土中を確認したところ、さらに東側では石棺材を確認できなかった。隣接する畑の造成時に失われた可能性がある。また、石棺の南5.6m地点には長さ125cm・幅80cm・厚さ7cmの石材があり、それは当石棺の蓋石の一部と考えられる。西小口とその蓋石の間には、石室石材と思われる多数の石材が散乱している。石棺の主軸方向はN96°Wであり、尾根筋と直交している。

石棺の構造は、その露出部分が少ないため不明な点が多い。小口石と長側石の組み合わせ方は、H字形である。北長側石の棺外の側面部には、加工痕と思われる多数の凹凸が確認できる。

西小口幅は内法で70cmあり、他の石棺に比べてかなり広い。現状で確認できる長側石の長さは、南長側石の露出面西側で65cm、東側で25cm、北長側石の露出面で38cmである。（牧野）

### (14) 17号墳（第25図、図版3-4）

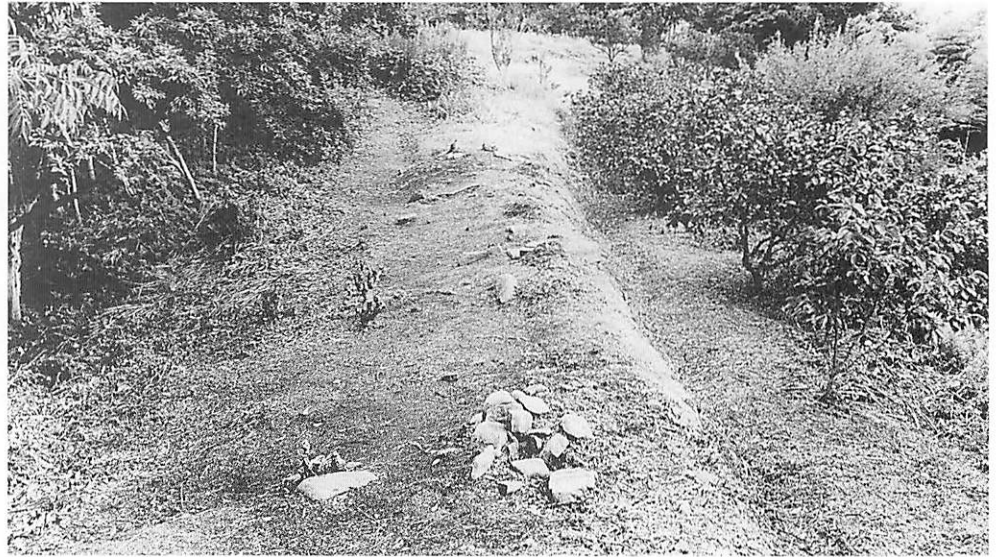
北尾根の14号墳と18号墳に挟まれた鞍部、18号墳の南18.6mの斜面に位置する。わずかな円丘状の高まりとなっており、そこに2枚の石材が縦方向に並んで露出している。方向はN89.5°Wで、尾根筋に直交する。これら石材は箱式石棺の長側石であると考えられるが、東側の石材は東から西へ大きく傾斜しているため原位置を保っていないと判断できる。この石材の上面には加工痕が明瞭に観察できる。またその西端部はカギ状に加工されているようにみえるが、そのカギ状部が上辺と直交しないため、長側石組み合わせのための人工的な加工かどうかはよくわからない。西側の石材は風化が激しいため、詳細は不明である。東側石材の長さは約70cm、西側石材の露出面の長さは約58cmである。（高平）

### (15) 18号墳（第26図）

北尾根のほぼ中央、11号墳のある尾根分岐点から数えて2つ目の頂部に位置する。標高は24.8mである。1955年には箱式石棺が完存していたらしいが（田辺1955a）、今はその面影もなく、直径約2mの範囲に石材がわずかに散布するのみである。大半は石室石材と思われるが、石棺材らしき板石も存在する。第1次調査では人骨1体が検出されている。なお、古城史雄らは当石棺が大矢野町植物園に移設されたと記述するが（古城・松尾1981）、それを確認することはできなかった。（杉井）

## (16) 19号墳 (第27図)

北尾根の18号墳と22号墳に挟まれた丘陵鞍部に位置し、北東7.4mには20号墳が、15.2mには21号墳が並列する。蜜柑畑造成によってできた崖面に沿って、長さ約2.5mにわたり石材が散布する。石室石材と思われる角の取れた礫が多いが、板石も若干存在している。これ以外の詳細は不明である。(杉井)



第27図 19～21号墳の位置関係 (手前が19号墳、南西から)

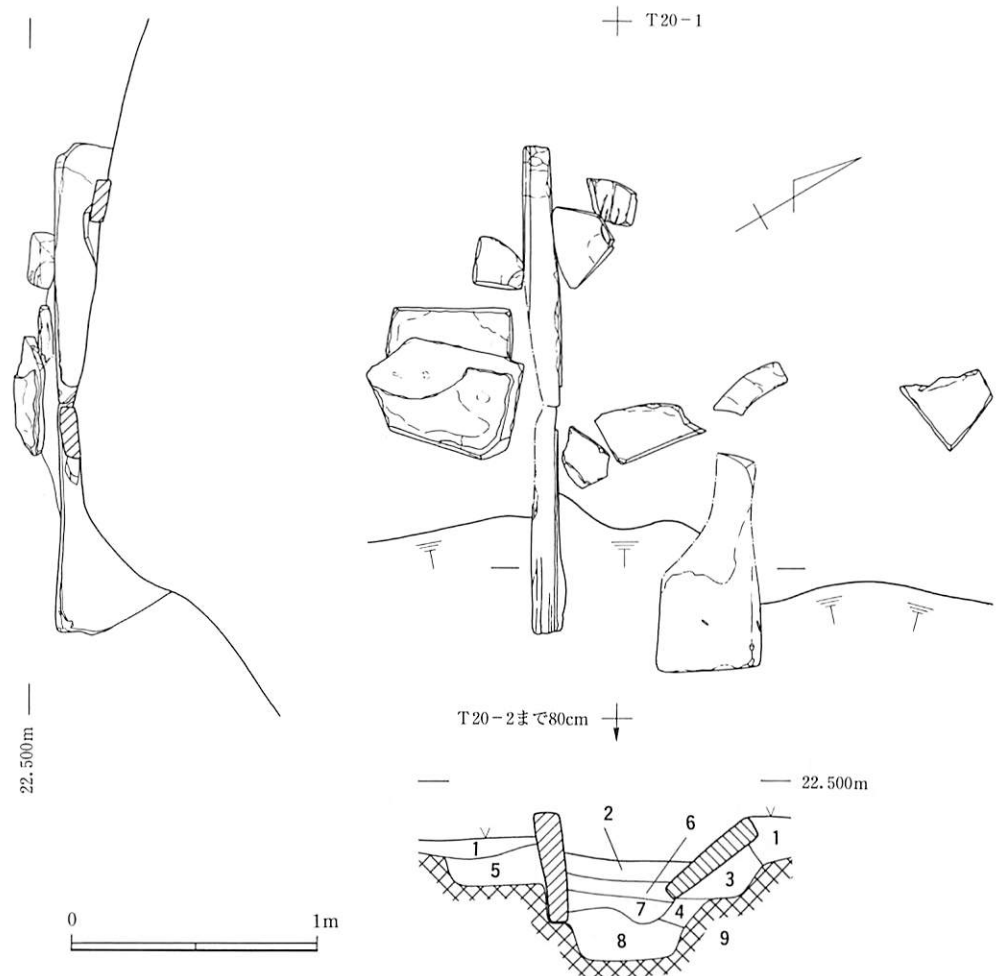
## (17) 20号墳 (第28図、図版4-1・2)

北尾根の18号墳と22号墳に挟まれた丘陵鞍部に位置する。南西7.4mには19号墳が、北東7.8mには21号墳が並列する。蜜柑畑の造成によって、東側が大きく削られている。

箱式石棺の両長側石が残存しているが、北長側石は原位置を保っていない。周辺に散乱している石材は破壊された石棺材材で、石室石材らしきものは確認できない。主軸方向はN60.5°Wで、尾根筋に直交する。

南長側石は1枚の石材で形成されている。両小口石と北長側石の構造は不明である。北長側石には加工痕が観察できる。

当石棺はその東側が大きく削平されているため、墓壙の観察が可能である。地山は硬質な岩盤である(9



- |   |         |               |
|---|---------|---------------|
| 1 | 灰褐色砂質土  | (Hue 5 YR6/2) |
| 2 | 灰白色砂質土  | (Hue10YR8/2)  |
| 3 | 明褐色砂質土  | (Hue7.5YR7/2) |
| 4 | 浅黄褐色砂質土 | (Hue10YR8/4)  |
| 5 | 浅黄褐色礫   | (Hue7.5YR8/3) |
| 6 | 灰白色礫    | (Hue10YR8/1)  |
| 7 | にぶい黄褐色礫 | (Hue10YR7/4)  |
| 8 | 灰白色礫    | (Hue7.5YR8/2) |
| 9 | 浅黄褐色礫   | (Hue7.5YR8/3) |

表土。  
後世の堆積土。径2～5cm程度の円礫を含む。しまり良し。  
後世の堆積土。しまり悪し。  
後世の堆積土。しまり良し。  
棺外埋土。地山の礫を含む。かなり粗。  
礫床。径1～5cm程度の円礫を多く含む。しまり良し。  
礫床下の置き土。地山の礫を含む。しまり良し。  
下段墓壙の置き土。地山の礫を多く含む。しまり良し。  
地山。

第28図 20号墳箱式石棺現状実測図・墓壙断面図



第29図 21号墳箱式石棺現状実測図（アミは原位置の石棺材）



第30図 21号墳の現状（北東から）

cm程度しかなく、他の石棺に比べて非常に薄い。石材Aには加工痕が観察できる。

石棺の大きさを内法で示すと、東小口幅は約47cm、長さは約163cmである。（島津屋）

#### (19) 22号墳（第31図、図版4-3・4）

北尾根の北端近く、23～26号墳と同じ平坦面上にある。それらのなかではもっとも東に位置

層）。同様の岩盤は6号墳でも確認されている。その地山を2段に掘り込んで墓壙が形成される。下段墓壙の下部には地山の礫を多く含んだ置き土がなされる（8層）。そして石棺材が据えられ、7層によって固定される。7層も地山の礫を含む岩質層である。その上には1～5cm程度の円礫からなる6層が存在する。これは棺底をなすものと判断できるから、当石棺は底石を持たない礫床構造であったことがわかる。

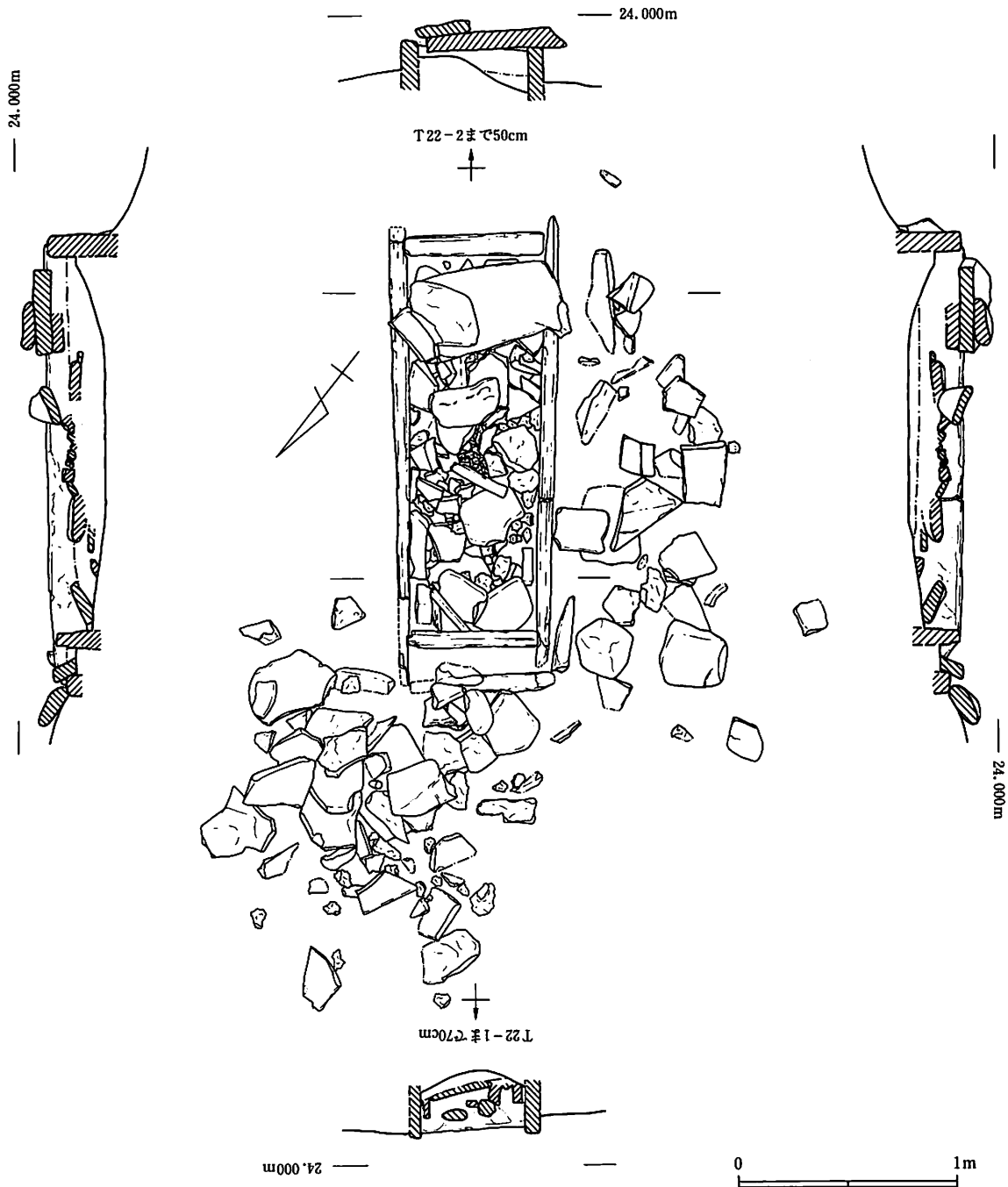
上段墓壙底のテラス面は棺外面となっており、そのレベルは棺内礫床面とほぼ一致する。1955年の第1次調査で石棺棺外から鉄剣が出土した11・13号墳（田辺1955b）も、当墳と同様の2段墓壙であった可能性が高い。南側の棺外にみられる5層は7・8層と同様の岩質層であることから、埋葬行為が終了したのちに埋め戻されたものとみなされる。北側の棺外にも上段墓壙底のテラス面を確認できる。しかし、北長側石が大きく倒れ込んでいることから、その棺外にみられる堆積土（3・4層）は、北長側石が移動させられたのちに流れ込んだものと推測される。1・2層も後世の堆積土である。

石棺の大きさを示すと、南長側石は長さ約196cm、北長側石の露出部分は約80cmである。北長側石が4層の位置に据えられていたとすれば、東小口の幅は40～50cm程度である。（島津屋・杉井）

#### (18) 21号墳（第29・30図）

北尾根の18号墳と22号墳に挟まれた丘陵鞍部、20号墳の北東7.8mに位置する。東小口石、および西小口石と両長側石の一部が露出している。石棺周辺には石材が散乱しているが、その性格はよくわからない。石棺の主軸方向はN62.5°Wで、尾根筋と直交する。

小口石と長側石の組み合わせ方はH字形であると思われる。当石棺に用いられる石材は厚さが3



第31図 22号墳箱式石棺現状実測図

する。21号墳の北27.5m、24号墳の西35mの場所である。箱式石棺がきわめて良好に遺存しており、棺身上には蓋石の一部が残存している。石棺の北約4.5mの地点には蓋石片と思われる石材が2点散布している。石棺内外には多量の石材が散乱しているが、それらは石室石材および蓋石の破片と判断される。主軸方向はN142° Eであり、尾根筋に直交している。

当石棺は、その北小口部に2枚の板石を立てて副室を形成している点に特徴がある。本来であれば北小口石となるべき石材が仕切り石の役割を果たしている。したがって、南小口の組み合わせ方はH字形といえるが、北小口はコ字形と判断される。副室の幅は約60cm、長さは約12cmである。千崎古墳群では唯一の副室を持つ石棺である。

両長側石、両小口石、仕切り石ともに1枚の石材で形成されている。長側石がどちらも1枚の石材で造られているのは当石棺のみである。ただし、北小口石のみ、他とは異なった目の粗





第32図 23号墳の現状（南東から）



第33図 24号墳の現状（南西から）

い石材が用いられている。両長側石と南小口石の上面角は面取りがなされている。北小口石は風化のため確認できないが、これも面取りがなされていた可能性がある。長側石の南小口石、仕切り石と組み合わせる部分には凹状の削り込みが設けられている。凹状の削り込みは、8号墳、9号墳、13号墳、15号墳でもみることができる。

石棺の大きさを内法で示すと、北小口幅は約60cm、南小口幅は約65cm、長さは約173cmである。幅の広い南側を頭位方向と考えると、副室は足下に設置されていたことになる。（島津屋・杉井）

#### （20）23号墳（第32図）

北尾根の北端近く、22号墳の東25.5m、24号墳の南西16.6mに位置する。標高は22.0mである。そこは丘陵尾根筋から若干下った南向きの斜面地で、現在蜜柑畑として利用されている。これ以外の古墳はすべて尾根筋上に位置しているから、当墳のこうした立地はきわめて特徴的である。

当地は段々畑に造成されているが、その段落ち部分に大小の石材が長さ2mにわたって顔をのぞかせている。段の高さは60cm程度あり、板石を主とする石材が積み上げられた様子をよく観察できる。そうした状況から、これは竪穴式石室控え積の外郭線が露出しているものと推測できる。段々畑造成時に石積みが見えたので、それを取り込むかたちで段落ち部分を成形したのであろう。この推測が正しければ、石室の中心部分には大きな破壊がおよんでいない可能性がある。（杉井）

#### （21）24号墳（第33図）

北尾根の北端近く、23号墳の北東16.6m、25号墳の西14.9mに位置する。東西4.3m、南北2.7mのほぼ長方形をなす高さ70cm程の高まりがあり、その上半部に多くの石材が集積している。石材は高まりの西半部に多く、中央東寄りに少ない。

周囲の状況から、この矩形の高まりは人工的に削り出されたものであることが明らかである。すなわち、北・西・南の三辺は畑の造成時に造り出された部分である。また、東側には、土地の境界を示すと思われる溝が掘られている。しかし、この部分のみが削り残されている点は重要で、本来ここに何らかの構築物が存在していた可能性を示唆しよう。現状の石積みのほとんどは後世に積み直されたものと思われるが、それら石材の特徴から判断すれば、竪穴式石室を内部主体とする古墳がこの場所に存在した可能性が高い。（杉井）

#### （22）25号墳（第34・35図）

北尾根の北端頂上、26号墳の北西10.0mに位置する。残存状況が悪いため箱式石棺の主軸方向の判断が困難であったが、南側に残る石材の大きさからそれを長側石と判断した。これは、当古墳群内の石棺が長側石と小口石をH字形に組み合わせるものがほとんどである点にも矛盾しない。したがって、当石棺には南長側石と東小口石が残存しているとみることができる。そ

れ以外の石材は現状で確認することができない。

石棺の主軸方向はN101° Eで、尾根筋に平行する。隣接する26号墳をはじめ当古墳群内の他の石棺は尾根筋と直交するから、当石棺の主軸が尾根筋に平行していることはきわめて特徴的である。

現状で確認できる石棺材は、南長側石と東小口石ともに1枚のみである。石材の大きさから推測すると、石棺長辺側は複数の石材で形成されていたと判断できる。なお、南長側石の石材は、他の石棺のように整った板石状には加工されておらず、割れ面を残す。東小口石は風化が著しい。

現状で確認できる石材の長さを示すと、南長側石が86.5cm、東小口石が29.5cmである。(津田)

### (23) 26号墳 (第36・37図)

実測図に不備があったため写真のみ掲載する。

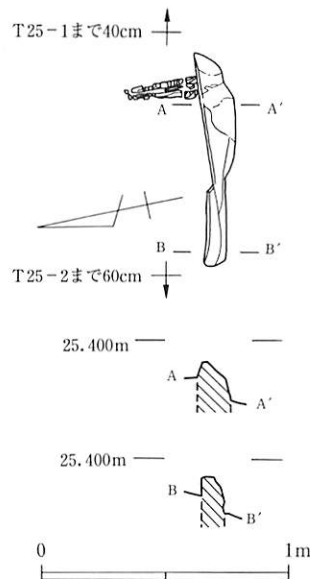
26号墳は北尾根の北端、25号墳の南東10.0mに位置する。覆土は消失し箱式石棺が露出している。蓋石や石室石材はみられない。主軸方向はN20° Eであり、尾根筋と直交している。

現状で小口石が各1枚、長側石が各2枚存在する。しかし、東長辺側は2枚の石材の間に約60cmの隙間があるため、本来3枚以上の石材で形成されていた可能性がある。西長側石北側の石材は南側の石材の内側に重ね継ぎされる。小口石と長側石の組み合わせ方は、北側ではH字形であるが、南側では小口石が西長側石を越えて置かれている。いわゆる井桁状の組み合わせ方である。当石棺は、全体的に、他の石棺に比べて雑な造りである。

大きさは内法で、北小口幅51cm、南小口幅28cm、長さ176cmである。北小口幅の方が広い。(森)

#### 参考文献

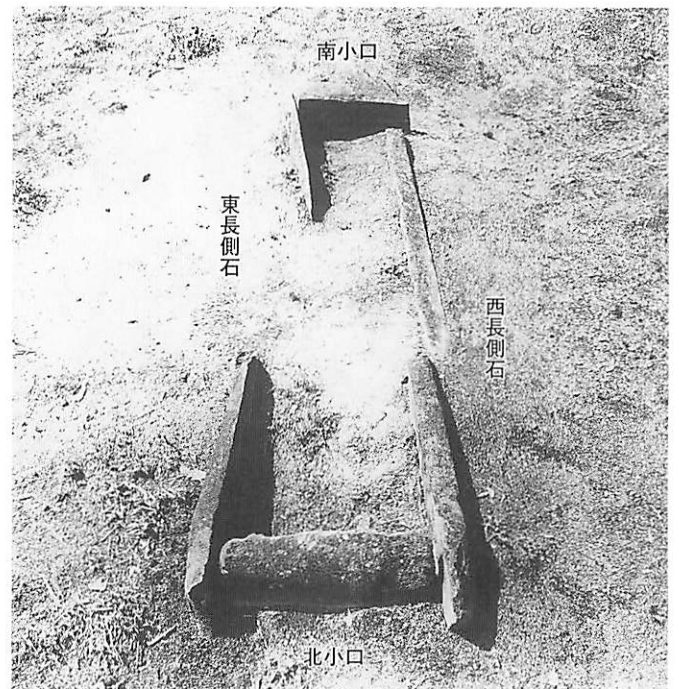
- 坂本経堯・坂本経昌 1971『天草の古代』私家版  
 杉村彰一 1955「千崎古墳発掘調査記」『玉高新聞』第34号 熊本県立玉名高等学校新聞部  
 清家 章 2001「畿内周辺における箱形石棺の型式と集団」『古代学研究』第152号 古代学研究会：pp. 1-18  
 田辺哲夫 1955 a 「玉名高等学校考古学部の天草郡維和古墳群調査結果について」熊本県立玉名高等学校  
 田辺哲夫 1955 b 「天草郡大矢野町維和古墳群調査概要」熊本県立玉名高等学校  
 古城史雄・松尾法博 1981「肥後・天草の古墳文化」熊本大学文学部1981年度卒業論文



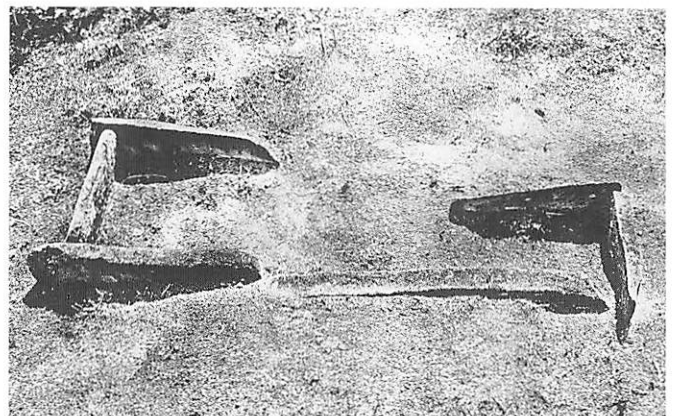
第34図 25号墳箱式石棺  
現状実測図



第35図 25号墳の現状  
(東から)



第36図 26号墳の現状 (北から)



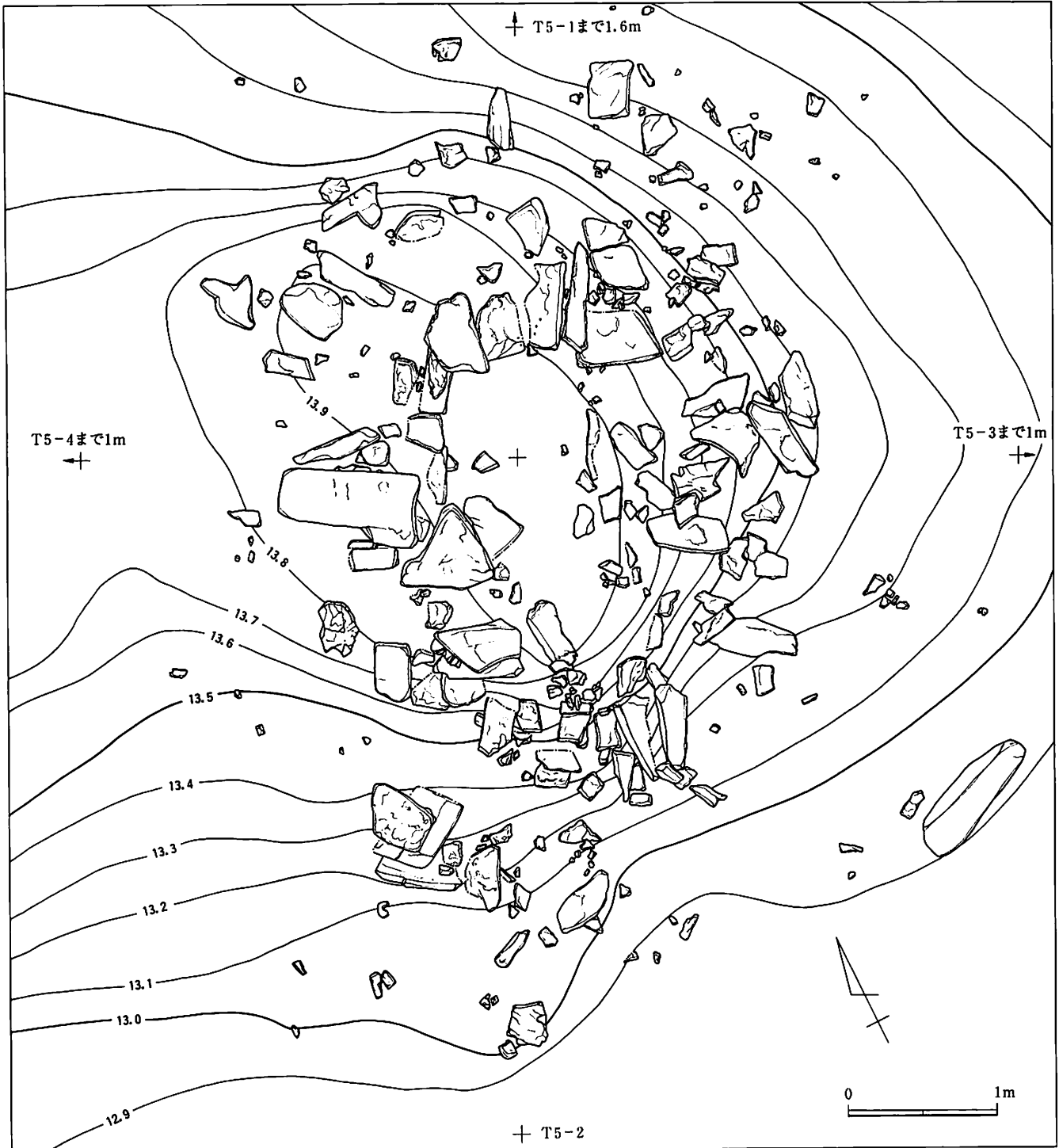
第37図 26号墳の現状 (西から)

## 四 発掘調査の成果

### 1. 5号墳

#### (1) 古墳の現状 (第38図、図版5-1・2)

5号墳の位置と現状 東尾根中央の鞍部、11号墳の南東50.0mに位置する (第8・9図)。そこは、11号墳のある尾根分岐点から南東方向へ下る急斜面がその傾斜をなだらかに変化させた地点にあたり、現在、



第38図 5号墳調査前実測図



低い円丘状の高まりとなっている。その高まりの斜面傾斜は標高13.0m前後でゆるやかになるが、その付近を墳端とすれば、当墳は直径7～8m程度の円墳であった可能性がある（第38図）。現状での高さは1m程度である。

高まりの上面、南北約7m、東西約4mの範囲には多くの石材が散布している（第38図）。2003年4月に実施した現状確認調査の際、それら石材のなかに原位置を保つものがあること、その輪郭をたどれば長方形を呈することが観察された。そのことから、散布する石材は石室石材であり、当墳には竪穴式石室の下半部が残存している可能性が高いと推測された。また、高まりの南側では石室控え積の一部と思われる石積みの存在も確認された。（中村・杉井）

## （2）調査の経過

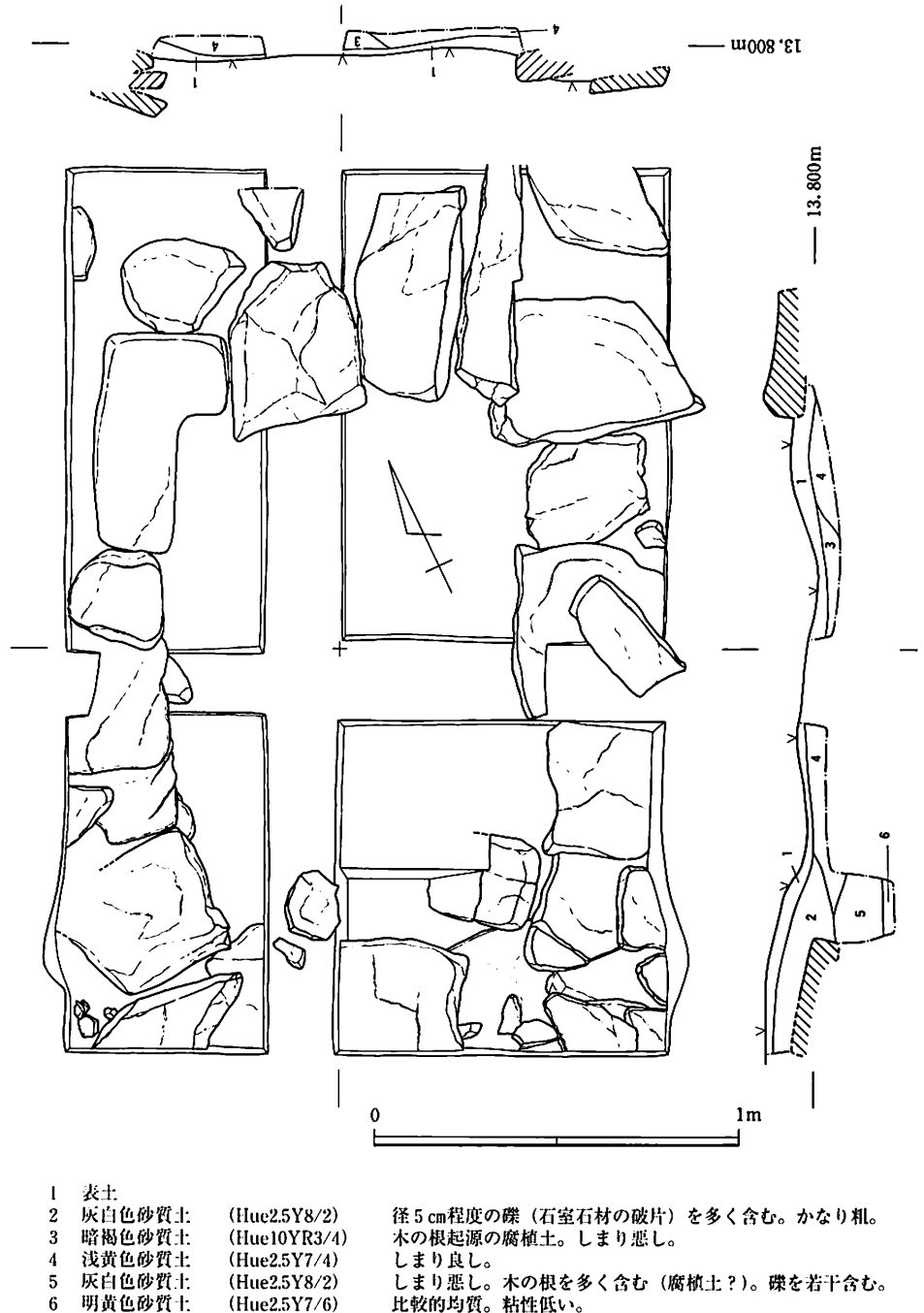
調査目的は、現状の石材散布状況の記録、および石室の内容の把握である。

まず、現状で推測できる石室の主軸線、および石室中央でそれに直交する軸線を基準にして石材散布状況の実測図を作成した（第38図）。

次に、南北2.4m、東西1.65mの発掘区を設定し、原位置を保たない石材を取り上げながら掘り下げを行った。そして残存する石室上面の輪郭を検出し、これが竪穴式石室であると確定した段階で掘り下げを停止した。したがって、掘り下げ深度は、比較的大きな破壊を被っていた石室南側では約30cmに達したが、それ以外では10cmに満たない。なお、記録作業の後、今後の調査に備えて土のうを用いて埋め戻した。（中村・杉井）

## （3）調査の成果（第39図、図版5-3）

当墳の主体部は竪穴式石室である。その上半部は破壊され失われているが、下半部は良好に遺存していると思われる。現状で推測される石室の



第39図 5号墳竪穴式石室平面図・断面図

**竪穴式石室** 主軸方向はN25.5° Eで、尾根筋に直交する。石室の大きさは検出面で長さ約1.45m、幅0.95mであり、きわめて短小な石室である。しかし、壁体が観察できる部分では持ち送りの存在を確認できるから、石室床面での規模はこれより幾分大きなものとなるだろう。なお、検出面の状況からすれば、石室中央部の幅がその両小口部に比べて若干広いようにもみうけられる。

残存する石室上面の石材をみれば、石室北西コーナー部にL字形に加工された石材が用いられていることがわかる。原位置を保たない石材にも同様の加工が施されたものがみられる。また、多くの石材は小口積みされており、とくに石室北側でその様子を明瞭にうかがうことができる。石室南小口の両コーナー部では、隅角を消すように斜めに石材が置かれているが、現状の北小口ではこれを観察することができない。

**今後の課題** 当墳はこれまで積石塚とされてきたが、当墳にみられる石材の散布は竪穴式石室の上半部が破壊されたことに起因するものであることは明らかである。今回の調査は石室残存面を検出したにとどまっているから、今後、石室や棺の構造、墳丘形態を明らかにするためのさらなる調査が必要である。 (中村)

## 2. 6号墳

### (1) 古墳の現状 (第40図、図版6-1)

**6号墳の位置と現状** 東尾根中央の鞍部、7号墳の西18.8mに位置する。そこは、東尾根東端の頂部から続く傾斜面が平坦面に変化した地点にあたる。平坦面を挟んで西22.0mには5号墳が存在する。

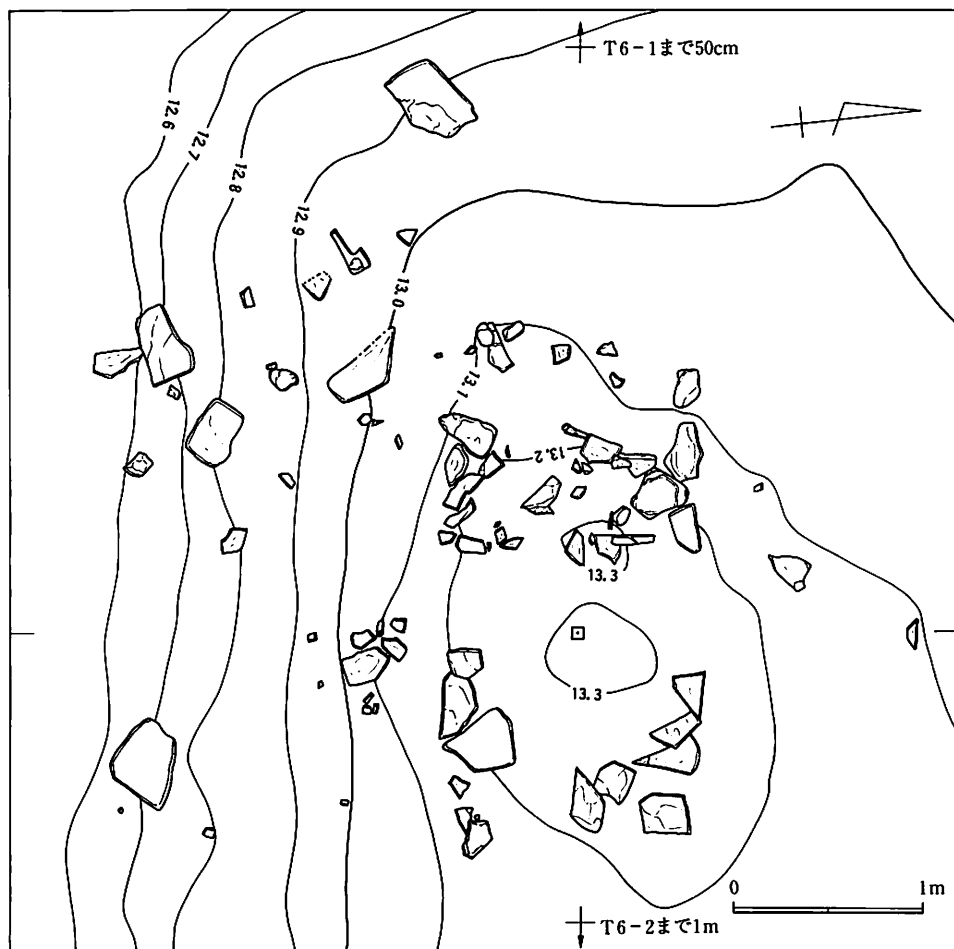
現在、当地は標高13.315mを最高点とするきわめて緩やかな微高地となっている。その微高地を中心とする南北4.4m、東西4.2mの範囲に石材が散布している (第40図)。

原位置を保つものは存在せず、散布状況からは石材が尾根の南斜面方向に転落していった様子がうかがえる。多くは箱式石棺に用いられていたと思われる板石の破片であるが、それと判断できない石材もわずかに含まれている。

以上の状況から、測量調査の時点で、当地には本来箱式石棺が存在していたと推測された。 (今村)

### (2) 調査の経過

調査目的は、埋葬施設の構造の解明である。まず、微高地を中心として尾根筋方向およびそれに直交する



第40図 6号墳調査前実測図

方向に基準線を設定し、石材散布状況の実測図を作成した（第40図）。

次に、尾根筋方向に7m、直交方向に3mの発掘区を設定し、1mごとに20cm幅の畦を残しながら掘り下げを行った。その際、散布する石材は番号を付して取り上げ、上天草市大矢野公民館に搬入した。調査終了後は、埋め戻しを行い旧状に復した。（今村）

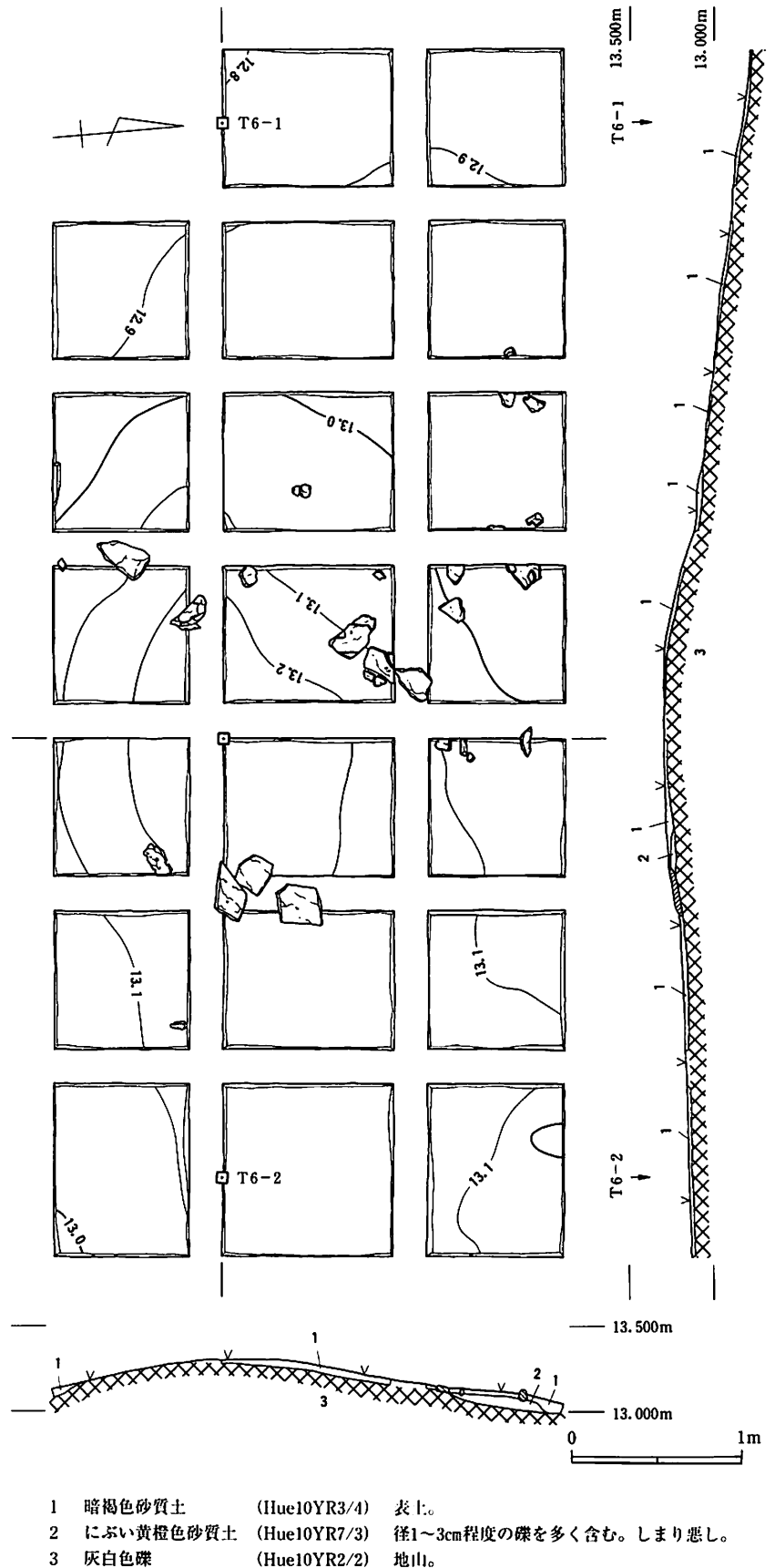
### （3）調査の成果（第41図、図版6-2・3）

まず、第41図をみながら土層の状況について述べると、1層が表土層、2層が山砂層、3層が地山の岩盤である。2層は発掘区の北側に多く堆積している。南側では急な斜面が形成されているから、この種の土層はすでに流失してしまった可能性が高い。3層の地山岩盤は発掘区の全面で検出された。硬質であるが、その表面は岩脈にそってひび割れた状態である。

さて、調査の結果、上述の地山面に人為的な加工の痕跡を何ら発見することはできなかった。遺物もまったく出土しなかった。

当地に石棺材と判断できる石材が集中して散布する状況から判断すれば、ここに箱式石棺が存在していた可能性はきわめて高いと考えられる。また、墓壙の様子を観察できる20号墳の石棺では、地山を掘り込んで形成された墓壙の存在を確認できる。これと同様の墓壙が当墳の石棺にも築かれていたと仮定すれば、当墳は、墓壙のすべてが失われるような徹底した破壊を被っていると判断せざるを得ない。

現在みられるわずかな地面の高まりや石材の散布が、古墳の存在を証明する唯一の証拠なのである。（今村）



第41図 6号墳発掘区平面図・断面図

## 五 まとめ

### 1. 古墳群の立地と調査に至る経緯

- 千崎古墳群の位置** 千崎古墳群は熊本県上天草市大矢野町維和千崎3080・3081番地他に所在する。当古墳群が所在する維和島は、天草諸島北端にある大矢野島の東約1kmの海上に位置している。その維和島の北端、千崎丘陵上に当古墳群は立地し、現在26基の古墳の存在が確認されている。当古墳群
- 第1次調査** では1955年に熊本県立玉名高等学校考古学部によってはじめての調査が実施された（第1次調査）。その時、分布調査が行われ、千崎丘陵上で23基、丘陵の東方140mに位置する千崎げんの島で1基の古墳が確認された。また、これら24基の古墳は箱式石棺もしくは積石塚に分類された。さらに、4基の古墳（箱式石棺）の発掘調査が行われ、人骨や鉄剣などが検出された。以後、この時の調査成果が千崎古墳群に関する基礎的資料となった。
- 第2次調査** 第1次調査後は今日まで本格的な調査が行われることはなかった。そこで大矢野町（現上天草市）では、町史編纂事業の一環として当古墳群についての基礎的資料の作成を計画した。そして熊本大学文学部考古学研究室の協力を得ながら、2003年4月に現状確認調査、2004年3月と4月に千崎丘陵全体の測量調査を実施した（第2次調査）。その際、いくつかの古墳を新しく発見し、また従来積石塚とされてきた古墳に散布する石材は、破壊された竪穴式石室や石棺の石材が散乱したものであり、さらに、一部の古墳では竪穴式石室が残存している可能性があるのではないかという知見を得た。
- 第3次調査** 2004年8～9月の調査は第3次調査となる。その目的は千崎古墳群に所在する全26基の古墳の現状確認と、積石塚とされてきた古墳の実体解明である。そのために、すべての古墳の現状写真撮影と記録作業、箱式石棺が露出している12基に関しては現状実測図の作成を行った。さらに積石塚とされていた5号墳と6号墳の発掘調査を実施した。このときの調査成果に基づいて、第4表には各古墳の現状を、第5表には現状図作成を行った箱式石棺の特徴を整理した。次に、それらをみながら今回の調査で明らかになったことをまとめておこう。（森）

### 2. 調査の成果

- 古墳の分布** 千崎丘陵は11号墳のある地点を分岐点として、北、南、東の3方向に尾根が伸びている。そして南尾根には4基、東尾根には6基、北尾根には尾根分岐点にある11号墳を含めて16基の古墳が分布している。また、北尾根はその北端部で四等三角点汐浜のある北西方向へさらに分岐している。しかし、この分岐した尾根は他の尾根よりも痩せ尾根であるため、古墳が存在していない。ほとんどの古墳は尾根筋上に分布しているが、23号墳は尾根筋からはずれて立地している。また、千崎丘陵にはいくつかの頂部があり、それらの頂部には必ず古墳が築かれている。頂部以外では尾根鞍部の平坦面や傾斜地に築かれている。
- 箱式石棺の主軸方向** 箱式石棺の主軸方向はその大部分が尾根筋と直交する。これは当古墳群の箱式石棺の特徴といえるだろう。現状では25号墳の石棺だけが尾根筋と平行すると考えているが、その石棺は一部しか露出・残存していないため、今後の検証作業が必要である。現状で小口幅の広い方を頭位方向と判断しても、その方位に共通性はなく、各箱式石棺は方位ではなく尾根筋との関係を重視して築かれたと考えられる。
- 箱式石棺の構造** 小口石と長側石の組み合わせ方はH字形（清家2001）が大部分を占める。それ以外の組み合

第 4 表 千崎古墳群所在古墳の概要

名 称	旧名称	位 置	標高 (m)	現 状	備 考
1 号墳	記載無	南尾根	24.4	円丘状の高まりになっている。	古墳かどうかの検証が必要。
2 号墳	第 1 号墳	南尾根	27.8	円丘状の高まりの中央に石材が散布している。	竪穴式石室基底部が残存する可能性あり。
3 号墳	第 2 号墳	南尾根	28.7	円丘状の高まりの東寄りに石材が散布している。	竪穴式石室？
4 号墳	第 4 号墳	南尾根	29.0	石棺材片が散布している。石棺材が埋没している可能性が高い。	千崎丘陵最高所。
5 号墳	第 7 号墳	東尾根	14.0	竪穴式石室上面が露出している。周辺に石室石材が散布している。	
6 号墳	第 7 号墳	東尾根	13.3	南北 4.4m、東西 4.2m の範囲に石材が散布している。	徹底的に破壊されている。
7 号墳	第 8 号墳	東尾根	16.6	直径約 5 m の範囲に、竪穴式石室が崩壊したものと考えられる石材が積み重なるように散布する。	千崎古墳群内で最も大規模。 2 基以上の箱式石棺が存在する可能性あり。
8 号墳	第 9 号墳	東尾根	18.3	箱式石棺が露出している。	
9 号墳	第 10 号墳	東尾根	19.2	箱式石棺が露出している。付近に蓋石も見られる。	東尾根最高所。 10 号墳と隣接している。
10 号墳	第 11 号墳	東尾根	18.8	蓋をされた状態の箱式石棺が露出している。	第 1 次調査で、人骨 4 体分を検出。 9 号墳と隣接している。
11 号墳	第 5 号墳	尾根分岐点	27.2	箱式石棺の一部が露出している。周辺には蓋石の破片と思われる板石が散布する。	第 1 次調査で、棺外から鉄剣 1 点が、他に玉 12 点と鉄斧が出土。
12 号墳	第 6 号墳	北尾根	25.7	長軸 3 m、短軸 1.5 m の楕円形に石材が散布する。	竪穴式石室が破壊されたものか？
13 号墳	第 12 号墳	北尾根	24.0	箱式石棺が露出している。棺内および石棺の南 3.5 m に蓋石が残存している。	第 1 次調査で、棺外から鉄剣 1 点が、棺内からガラス小玉 1 点と刀子 1 点が出土。
14 号墳	第 13 号墳	北尾根	23.3	尾根分岐点から 1 つ目の北尾根頂部に位置する。直径約 5 m の範囲に石棺材や円礫が散布する。	円礫は石棺床面に敷かれたものか？
15 号墳	第 22 号墳	北尾根	18.7	箱式石棺が露出している。周辺に蓋石の破片が散布する。	棺内面に赤色顔料が塗布されている。
16 号墳	第 14 号墳	北尾根	19.6	箱式石棺が露出している。付近に蓋石も残存している。石棺東側は破壊された可能性がある。石室石材らしき多数の石材が散布する。	
17 号墳	記載無	北尾根	21.8	円丘状の高まりに、箱式石棺の長側石と思われる石材が 2 点露出している。	
18 号墳	第 15 号墳	北尾根	24.8	尾根分岐点から 2 つ目の北尾根頂部に位置する。直径約 2 m の範囲に石材が散布する。	第 1 次調査時には箱式石棺が完存。また、棺内から人骨 1 体分を検出。
19 号墳	記載無	北尾根	20.6	密柑畑造成時にできた崖面に沿って位置する。長さ約 2.5 m にわたり石材が散布する。	
20 号墳	第 16 号墳	北尾根	20.2	箱式石棺が露出している。周辺に石材が散布する。	墓竈の観察が可能。
21 号墳	第 17 号墳	北尾根	20.9	箱式石棺の一部が露出している。周辺に石材が散布する。	
22 号墳	第 18 号墳	北尾根	24.1	箱式石棺が露出している。周辺に蓋石や石室石材が散布する。	副室を持つ。
23 号墳	記載無	北尾根	22.0	段々畑の段落ち部分に長さ 2 m にわたって、積み上げられた石材が露出している。	竪穴式石室控え積の外郭線が露出したものである可能性あり。
24 号墳	第 19 号墳	北尾根	24.3	東西 4.3 m、南北 2.7 m、高さ約 70 cm の高まりに石材が集積している。	現状の石積みは後世の積み直しか？
25 号墳	第 20 号墳	北尾根	25.3	箱式石棺の小口石と長側石の一部が露出している。	北尾根最高所。
26 号墳	第 21 号墳	北尾根	24.7	箱式石棺が露出している。	

第 5 表 千崎古墳群所在箱式石棺の特徴

	主 軸		寸法 (内法) (cm)		石材数		小口と長側石の組み合わせ方	長側石※4	
	主軸方向	尾根筋との関係	小口※1	長さ※2	小 口	長側石		円状割り込み	2 枚の石材の組み合わせ方
8 号墳	N 22° E	直交	北：65.6 南：60	195	北：1 枚 南：1 枚	西：2 枚 東：1 枚	H 字形	○	カギ状加工
9 号墳	N 11.5° E	直交	北：58 南：54.5	204.5	北：1 枚 南：1 枚	西：2 枚 東：2 枚	H 字形	○	カギ状加工
10 号墳	N 10.5° E	直交	幅：35.5	224.5	北：1 枚 南：1 枚	西：2 枚 東：2 枚？	H 字形	○？	カギ状加工？
13 号墳	N 61.5° W	直交	西：56 東：50	184	西：1 枚 東：1 枚	北：2 枚 南：2 枚	H 字形	○	カギ状加工
15 号墳	N 118.5° W	直交	西：42 東：42	178	西：1 枚 東：1 枚	北：2 枚 南：2 枚	H 字形	○	重ね継ぎ A
16 号墳	N 96° W	直交	西：70	65	西：1 枚	—	H 字形	×	—
17 号墳	N 89.5° W	(直交)	—※3	—	—	(2 枚)	—	—	—
20 号墳	N 60.5° W	直交	東：40～50	196	—	南：1 枚	—	—	—
21 号墳	N 62.5° W	直交	東：47	163	東：1 枚	—	H 字形	—	—
22 号墳	N 142° E	直交	北：60 南：65	173	北：1 枚 南：1 枚	西：1 枚 東：1 枚	北：コ字形 南：H 字形	○	—
25 号墳	N 101° E	平行	東：29.5	86.5	(東：1 枚)	—	H 字形	—	—
26 号墳	N 20° E	直交	北：51 南：28	176	北：1 枚 南：1 枚	西：2 枚 東：3 枚以上？	北：H 字形 南：井桁状	×	重ね継ぎ

※ 1 10 号墳は棺身露出部の幅、20 号墳は東断面での推定値、25 号墳は露出部の値である。  
※ 2 10 号墳は蓋石をされた状態での全長、20 号墳は南長側石の長さ、16・25 号墳は残存部の最大の長さである。  
※ 3 — は不明もしくは残存していないことを示す。  
※ 4 ○ はその要素を持つこと、× はその要素を持たないことを示す。

わせ方は22号墳と26号墳にみられる。22号墳の北小口部には副室が形成されている。すなわち、本来北小口石となるべき石材を仕切り石にして、その外側にもう1枚板石を置いている。したがって22号墳の北小口はコ字形である。26号墳は南小口が井桁状に組み合わされている。なお、長側石の小口石と組み合う部分には凹状の削り込みが施されている石棺が多い。

箱式石棺の小口はすべて1枚の石材から形成されている。長側石は1枚もしくは2枚の石材で形成されているが、2枚の石材で形成されているものの方が多い。8号墳は西長側石が2枚の石材、東長側石が1枚の石材で形成されている。22号墳は当古墳群で唯一両長側石が1枚の石材で形成される。また、26号墳の東長側石は、2枚の石材の間に約60cmの隙間があるため、本来3枚以上の石材で形成されていた可能性がある。

長側石の2枚の石材の組み合わせ方には3パターンがみられる。9号墳と13号墳の両長側石と8号墳の東長側石は、2枚の石材の端部をカギ状に加工し組み合わせたものである。この種の組み合わせ方が当古墳群で最も多くみられる。15号墳は両長側石とも東側の石材を西側の石材の外側に配置するいわゆる重ね継ぎA（清家2001）で形成されている。26号墳は両長側石の構造が異なっている。すなわち、西長側石は北側の石材を南側の石材の内側に重ね継いでいるが、東長側石は上述のように3枚以上の石材で形成されていた可能性がある。

20号墳の墓  
墳

20号墳では石棺墓墳の観察が可能であった。それによると、墓墳は地山の岩盤を2段に掘り込んだ2段墓墳であったことがわかる。このことから他の古墳の石棺においても地山を掘り込んで墓墳を形成していることが想定される。また、棺内床面には円礫を敷いていること、上段墓墳底のテラス面が棺外面となっていることもわかる。

5号墳の発  
掘調査成果

5号墳では第2次調査において、竪穴式石室の存在が想定された。発掘調査の結果、散布する石材の中央に矩形に並列する石材が検出され、竪穴式石室の下半部が残存していることが判明した。散布する石材は破壊された石室上半部の石材であると判断できる。現状で推定される石室の主軸方向はN25.5° Eである。これは尾根筋と直交しており箱式石棺の特徴と一致する。石室の規模は検出面で長さ1.45m、幅0.95mである。壁体が観察できる部分では持ち送りの存在を確認できることから、石室床面での規模はこれより幾分大きなものとなるだろう。

6号墳の発  
掘調査成果

6号墳では低い円丘状の高まりに石材が散布していた。調査の結果、発掘区の全体で表土直下に地山の岩盤が検出された。20号墳では地山を掘り込んで墓墳を築いていることがわかってから、6号墳でも同様のことが想定されたが、地山面に人為的な加工の痕跡を見出すことはできなかった。しかし、散布する石材の状況から、当地に箱式石棺が存在していたことは想定できる。したがって6号墳はその墓墳まで徹底的に破壊されたと判断できる。

他の積石塚とされていた古墳においても、現在散布する石材は、竪穴式石室が破壊された際に生じた石材や、残存している竪穴式石室の一部、あるいは破壊された石棺の破片であると思われる。従来積石塚とされてきたのは、こうした破壊された竪穴式石室や箱式石棺の石材の散布状況を捉えてのことであったと判断できよう。（森）

### 3. 古墳群の評価と今後の課題

今回の調査成果をもとに、千崎古墳群に関して若干の考察を行なう。

古墳のグル  
ープ分け

当古墳群に所在する古墳は、その分布から判断していくつかのグループに分けることができようである。まず、南尾根と東尾根に分布するものはそれぞれの尾根ごとに1つのグループでいると考えられる。

北尾根では、尾根分岐点と3つの頂部に位置する古墳を中心とした複数のグループが考えられる。まず、尾根分岐点に位置する11号墳を中心とした11～13号墳のグループを抽出できる。次に14号墳と18号墳が位置する2つの頂部に挟まれた14～18号墳のグループを想定できる。このグループはさらに細分が可能であるのかもしれない。また、同一平坦面にほぼ等間隔で築かれた19～21号墳も1つのグループと判断できる。北尾根北端に位置する22～26号墳は1つのグループとみることもできる。しかし、22号墳は他と離れて分布しており、さらに、後述するように22号墳と26号墳の箱式石棺の構造に共通性がみられない。また、23号墳は尾根筋から離れて立地している。したがって、22号墳と23号墳はそれぞれが独立して存在していた可能性も考えられる。

想定したグループを箱式石棺の構造から検証する。ただし、南尾根のグループには箱式石棺がみられず、また19～21号墳のグループには完形に近い箱式石棺が残存していないので、今回は検討対象から除外する。

まず、東尾根のグループのなかで箱式石棺を詳細に観察できるのは8～10号墳である。8号墳と9号墳は長側石の石材数が異なるが、他の要素は共通する。10号墳は9号墳との間隔が2mと非常に狭く、9号墳と同一墳に築かれた可能性がある。また、かつての写真から判断する限り、10号墳の構造は8号墳、9号墳の構造と大きな違いはみられない（坂本経堯・経昌1971）。このことから8～10号墳は非常に密接な関係にあったと考えられる。東尾根のグループでは5号墳と7号墳が竪穴式石室である。今後、箱式石棺のみが築かれたと考えられる古墳と竪穴式石室を有する古墳の関係も明らかにする必要がある。

東尾根のグループ

11～13号墳のグループで箱式石棺の構造が判明しているのは13号墳のみである。13号墳の構造は東尾根のグループの9号墳と同様である。このことを根拠にすると、東尾根のグループと11～13号墳のグループをあわせたさらに大きなグループを想定できる。

11～13号墳のグループ

14～18号墳のグループで箱式石棺が完全に近い状態で露出しているのは15号墳だけである。したがってこのグループ内で箱式石棺どうしを比較することはできない。15号墳は2枚の長側石の組み合わせ方が当古墳群で唯一重ね継ぎAであり、また現状で当古墳群において唯一棺内面に赤色顔料の付着が確認されるなど独自の要素を持つ。しかし、15号墳にみられるその他の要素は、8・9・13号墳と共通している。したがって、先の2つのグループとの関係を想定することも可能である。

14～18号墳のグループ

北尾根北端のグループは22号墳と26号墳の箱式石棺がほぼ完全に近い状態で残存している。22号墳と26号墳の石棺は、それぞれが当古墳群において特殊な構造をなす。したがって、箱式石棺の構造のみから判断すると、北尾根北端のグループは、東尾根、11～13号墳、14～18号墳のグループとの関係が弱かったと想定できる。また、同一グループ内でも22号墳と26号墳の構造に共通性がみられないことから、上述したように22号墳は独立して存在していた可能性の方が高いのかもしれない。また、19～21号墳のグループの20号墳の箱式石棺は半壊しているが、南長側石は1枚の石材で形成されている。長側石の石材数を根拠にすると、22号墳は19～21号墳のグループと関係を有していたと想定することもできる。

北尾根北端のグループ

以上のように箱式石棺の構造からは、東尾根と尾根分岐点付近をひとまとまりとした大きなグループを想定できる。そして、箱式石棺の構造は、北尾根を北へ進むにしたがい、この大きなグループとの共通性が少なくなり、徐々に差異が大きくなっていく。さらに北尾根北端のグ

ループでは、近接しているにもかかわらず箱式石棺の構造に共通性がみられなくなる。

#### 今後の課題

今後は上述のようなグループ分けが妥当か否かの検証や、こうしたグループに分けられることの要因、各グループの箱式石棺の構造などから想定される相互関係を明らかにしていかなければならない。さらに、箱式石棺の構造の差異が何に由来するものなのかということも今後の検討課題である。

#### 成合津古墳群との共通性

さて、天草諸島において千崎古墳群と類似した事例として熊本県上天草市成合津古墳群が挙げられる（阿部ほか1977）。成合津古墳群では箱式石棺（1号墳）と箱式石棺を内部に持つ竪穴式石室（2号墳）の存在が確認されている。箱式石棺と竪穴式石室という組み合わせは千崎古墳群の様相と共通する。さらに成合津1号墳の箱式石棺の構造と千崎古墳群の箱式石棺のそれが類似している。また、千崎古墳群においても今回の調査で5号墳の内部主体が竪穴式石室であることを確認したが、それが短小な竪穴式石室であるという点で成合津2号墳の石室構造と酷似する。

#### 千崎古墳群の築造年代

高木恭二は、成合津2号墳を石障系横穴式石室の最古型式である熊本県八代市小鼠蔵1号墳の前段階に位置付け、その築造時期を4世紀末から5世紀初頭に比定している（高木1994）。高木は成合津1号墳の築造時期については言及していないが、成合津2号墳と隣り合った位置関係にあることから、それほど隔たった時期のものとは考えがたい。千崎古墳群の築造時期は、成合津1号墳の石棺や成合津2号墳の石室構造との類似性を根拠にすれば、それらに近い時期であった可能性がある。熊本県地域に石障系横穴式石室が成立する以前、古墳時代前期後半から中期前半の時期を考えておきたい。しかし、千崎古墳群の築造年代は、第1次調査時に検出された遺物の詳細な分析や、周辺に分布する箱式石棺とのさらなる比較作業、そして慎重な発掘調査を通じて、さらに検討されるべきものであることはいうまでもない。

#### 今後の課題

今年度の調査は現状の確認と記録が大きな目的であり、当古墳群の築造時期や性格に関する詳細な情報を得ることはできなかった。しかし、こうした地道な作業を通じて基礎資料を収集・提示する意義はきわめて大きいものと考えている。今後、1955年の第1次調査で検出された遺物や人骨を整理し報告する作業も含め、当古墳群に関する調査を継続的に行っていくことで上記の課題を解決していきたい。

今年度の調査によって、千崎古墳群にはいくつかのグループが存在することが想定され、また箱式石棺に形態差があることが判明した。さらに各グループの箱式石棺の共通性・差異性も指摘した。これら当古墳群内での差異が何に由来するものなのかという点も解明しなければならない課題である。また各グループ内での立地や埋葬施設の違いにも何らかの意味があるのかもしれない。これらの課題を解明することは、天草諸島の古墳時代の社会構造、さらには天草諸島と八代海沿岸地域との関連などを解明する手がかりになるだろう。（森）

#### 参考文献

- 阿部堅二・今井義康・山崎純男・西健一郎・松本健郎・三島格 1977「熊本県天草郡成合津古墳調査概報」『熊本史学』第五〇号 熊本史学会：pp. 19-40  
 坂本経亮・坂本経昌 1971『天草の古代』私家版  
 清家 章 2001「畿内周辺における箱形石棺の型式と集団」『古代学研究』第152号 古代学研究会：pp. 1-18  
 高木恭二 1994「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号 宮嶋利治学術財団：pp. 110-132



## 第 2 部

# 長砂連古墳石障実測調査報告



維和島から大矢野島南東端を望む

## 一 位置と環境

長砂連古墳（37：番号は第1部の第2図に対応）は熊本県上天草市大矢野町中長砂連6554番地に所在する装飾古墳である。そこは天草諸島の北端をなす大矢野島の南東端にあたり、その地からは狭い海峡をはさんで維和島南端の広浦古墳（装飾古墳、36）を望むことができる。

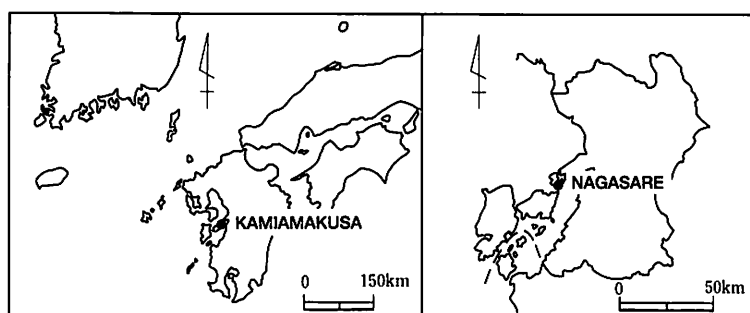
長砂連古墳  
の位置

長砂連古墳は、熊本県地域に分布の中心を持つ石障系横穴式石室墳の1つで、石障に直弧文が刻まれていることで全国にその名を知られている。高木恭二によると、石障系横穴式石室墳の初現は八代市小鼠蔵1号墳（83）で、5世紀前葉に位置付けられる（高木恭1994）。その後、県南部の八代市周辺では尾張宮古墳（85）や田川内1号墳（88）などが、宇土半島では城1号墳（22）や小田良古墳（24）などが、また天草地域では大戸鼻北古墳（89）や長砂連古墳（37）などが5世紀のうちに築造された。一方、熊本平野周辺部や県北部でこの種の石室が出現する時期は若干遅れ、前者では小坂大塚古墳や千金甲1号墳、後者では銭亀塚古墳などが著名である。6世紀になると、石障系横穴式石室はその前障を失うことによって石屋形を有する横穴式石室に変化していく（藏富士1997）。なお、石障系横穴式石室は、県南部では円墳に採用されるという特徴がある（高木恭1994）。

石障系石室  
の動向

熊本県地域では、天草地域から宇土半島、熊本平野周辺部に直弧文が施された装飾古墳が多く分布する。それらのなかで長砂連古墳はもっとも古くに位置付けられ、高木正文は5世紀中葉の年代を与えている（高木正1999）。その後に続くものとして千金甲1号墳や井寺古墳、国越古墳（47）などがある。

装飾古墳としてみた場合、八代海沿岸地域でもっとも時期がさかのぼるのは、石障に円文が刻まれた小鼠蔵1号墳である。円文は八代海沿岸地域の古墳に多くみられる文様である。天草地域では、大戸鼻北古墳には円文が、広浦古墳には円文に加えて大刀や短甲などの器物が描かれている。海峡を挟んで対峙する長砂連古墳と広浦古墳で描かれた文様が異なることには注目できる。（平野・杉井）



第42図 長砂連古墳の位置



第43図 長砂連古墳周辺の地形

### 参考文献

- 藏富士寛 1997「石屋形考－平入横口式石棺の出現とその意義－」『先史学・考古学論究』Ⅱ 龍田考古会：pp.133-166  
 藏富士寛 1999「肥後地域の横穴式石室」『九州における横穴式石室の導入と展開』第2回九州前方後円墳研究会資料集第Ⅱ分冊 第2回九州前方後円墳研究会実行委員会：pp.639-650  
 高木恭二 1994「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号 宮嶋利治学術財団：pp.110-132  
 高木正文 1999「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集 国立歴史民俗博物館：pp.97-150

## 二 調査経過

### 1. 古墳の発見

古墳の発見  
とその後の  
経過

長砂連古墳は、1934年、金刀比羅宮の社殿建設工事の際に発見され、直弧文が刻まれた石障をもつことが明らかとなった。発見時、すでに墳丘の大半が失われ、石室は陥没した状態であったという（第46図）。このとき、右石障と奥石障が接するコーナー付近で鉄刀および鉄鉾の破片が発見された。ほかに土器片も検出された（下林1984）。その後、破片となった石障は接合され覆屋をかけて保存されたが、本来の場所に復元されたのかどうかは定かでない。なお、現在の円丘が築かれたのは1975年のことで、同年、熊本県文化財に指定された。（杉井）

### 2. 今回の調査

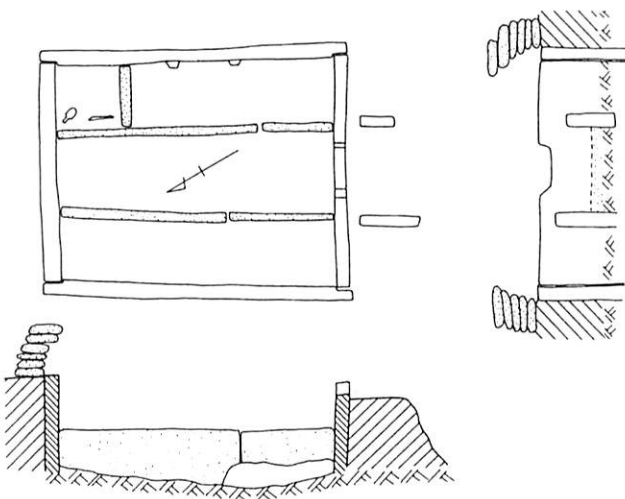
これまでの  
調査

当古墳の石障実測図は斎藤忠と乙益重隆によって作成されていたが（斎藤編1965）（第45図）、左石障と奥石障が示されていないなどの改善すべき点があった。とくに直弧文が刻まれた左石障の図化は、この種の文様の研究にとってきわめて有用なことで判断された。そこで、上天草市史大矢野町編纂事業にともなう基礎資料収集の一環として、2004年8月31日から9月16日までの17日間をかけて石障の実測調査を実施した。同時に採拓と写真撮影も行った。コンクリートで覆われた室内での作業は高い気温と湿度のため難渋をきわめたが、扇風機を使うなどして何とか乗り切ることができた。また、1934年に発見された遺物は所在不明とされてきたが（乙益1964など）、地元の塩田三吉氏（故人）によって保管されていたことが判明した。それら遺物は、2003年に塩田福一氏を経由して貝川徳次郎氏より大矢野町（現上天草市）へ寄贈されたが、今回それらの実測と写真撮影も行ったので、あわせてその成果も報告する。（杉井）

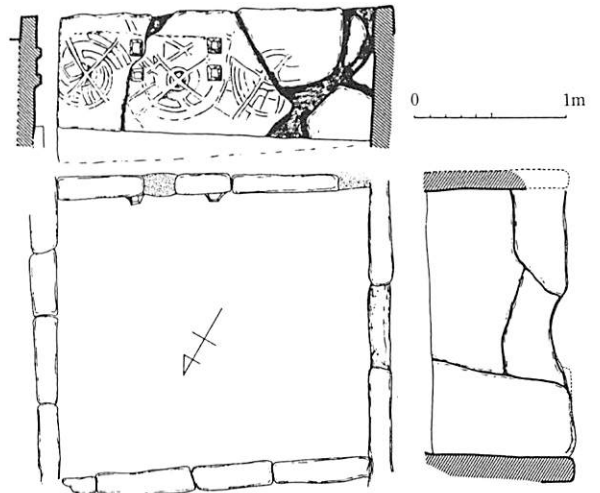
今回の調査

#### 参考文献

- 上野辰男 1976「長砂連古墳（県史跡）」『熊本の装飾古墳 熊本の風土とところシリーズ7 熊本日日新聞：pp. 176-179  
乙益重隆 1964「長砂連古墳」『装飾古墳』平凡社：p. 91  
乙益重隆 1984「長砂連古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp. 140-141  
斎藤 忠編 1965『日本原始美術』5 古墳壁画 講談社  
斎藤 忠 1973『日本装飾古墳の研究』講談社  
下林繁夫 1984「長砂連古墳調査報告」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp. 141-143  
（初出は『天草維和村の考古学的調査の栞』熊本県立玉名高等学校考古学部、1955年）



第44図 発見時の長砂連古墳石室見取図（下林1984より）



第45図 斎藤忠・乙益重隆作図の石障実測図  
（斎藤1973より）

### 三 調査成果

#### 1. 古墳発見時の状況と現状（第44～48図、図版7-1・2）

1934年の発見当時、現地を踏査した下林繁夫の記録（下林1984）によると、古墳はすでに封土の大部分を失い、石室石材が散乱した状態であったという。原位置を保っていたのは、石障とその内部を3つに画す2枚の仕切り石、および玄門に立てられた2枚の石材のみであった（第44・46図）。ただし、石障のうちほぼ完全に残っていたのは前障だけで、奥石障は下半部のみ、左右の石障は基部のみの残存であった。それらの上部石材は数個の破片となって石障内に埋没していたが、その時、一箇所に集めて仮小屋内に収納された。石障内床面は深く掘り下げられていたため、本来の状態を保つものではなかった。遺物としては、北東隅の副室内で鉄鉾と鉄刀の破片が、土中より土師器高坏片が検出された。石室石材は石垣構築に利用されていた。

その後、石障だけが仮小屋内で組み立てられ保存されていたが（第47・48図）（乙益1964）、1975年の熊本県教育委員会による保存工事の際に現在の円丘が造られた（熊本県教育委員会編1981）。現在、石障基部はコンクリートによって固定されているが、記録写真によればそれは円丘を築く以前になされたものであることがわかる（斎藤1973）。なお、仕切り石や玄門の石材は、現在残存していない。（杉井）

#### 2. 石障実測の方法

奥石障と前障の midpoint を結んで主軸線とし、主軸線の midpoint から前後に50cm間隔で石障の割り付けを行った。レベルは、石障が本来の位置をとどめていないと考えられるため、任意の水平線によった。（南）

#### 3. 石障の構造

##### （1）全体の概要（第49図、図版7-2）

入口からみて奥の石障を奥石障、手前を前障、向かって右側を右石障、左側を左石障として以下の記述を進める。

石障は1934年の発見時には大きく破壊されていた。現在の石障はその後復元整備されたものである。各石障には明らかに本来の石材でないものが含まれており、石材間がコンクリートで充填されている部分も存在する。石障基部はコンクリートで固定されている。また、現在は右石障の直弧文を隠すかたちで奥石障が置かれているが、第44図が正しいとした場合、右石障の奥壁側が本来のものより短くなっている可能性も考慮される。ただし、右石障には3個連続して彫刻された直弧文が明瞭に残存する。左石障の中央から右側は大きく改変されているが、左側の直弧文はほぼ完全なかたちで残っている。奥石障は改変が著しく、様々な石材で復元されている。前障は剥落している部分があるものの、その石材は構築当時のものである。（南）

##### （2）右石障（第50図の上、図版9・10-1）

縦約75cm、横約190cmの範囲が観察できる。石材の厚さは約13.5cmである。構築当時は1枚

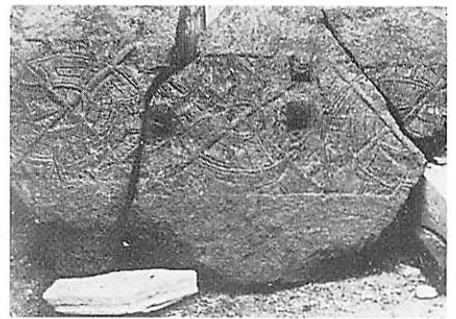
各石障の名称

石障の現状

右石障現状



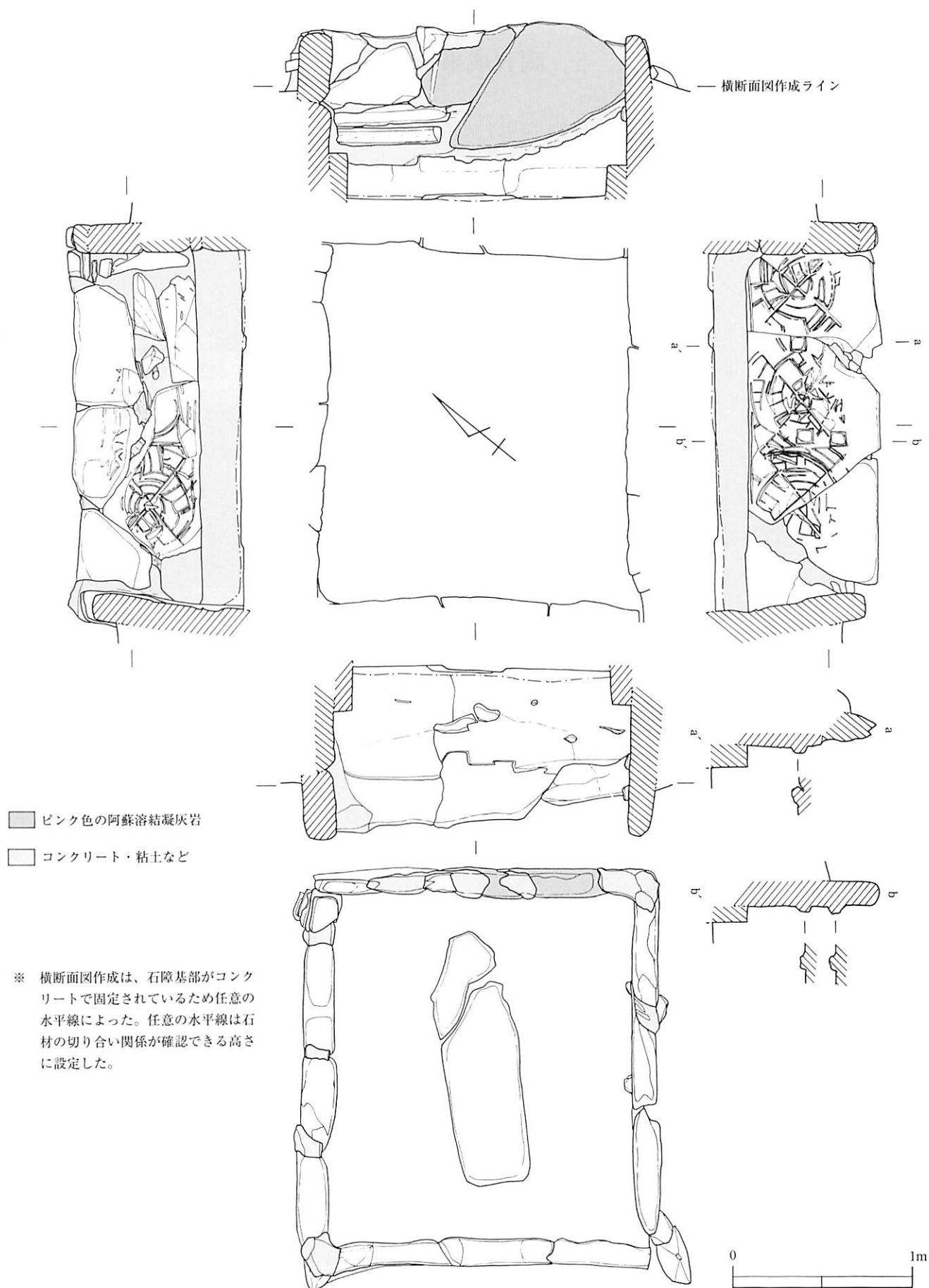
第46図 発見時の石障（坂本1971より）



第47図 以前の右石障（乙益1964より）

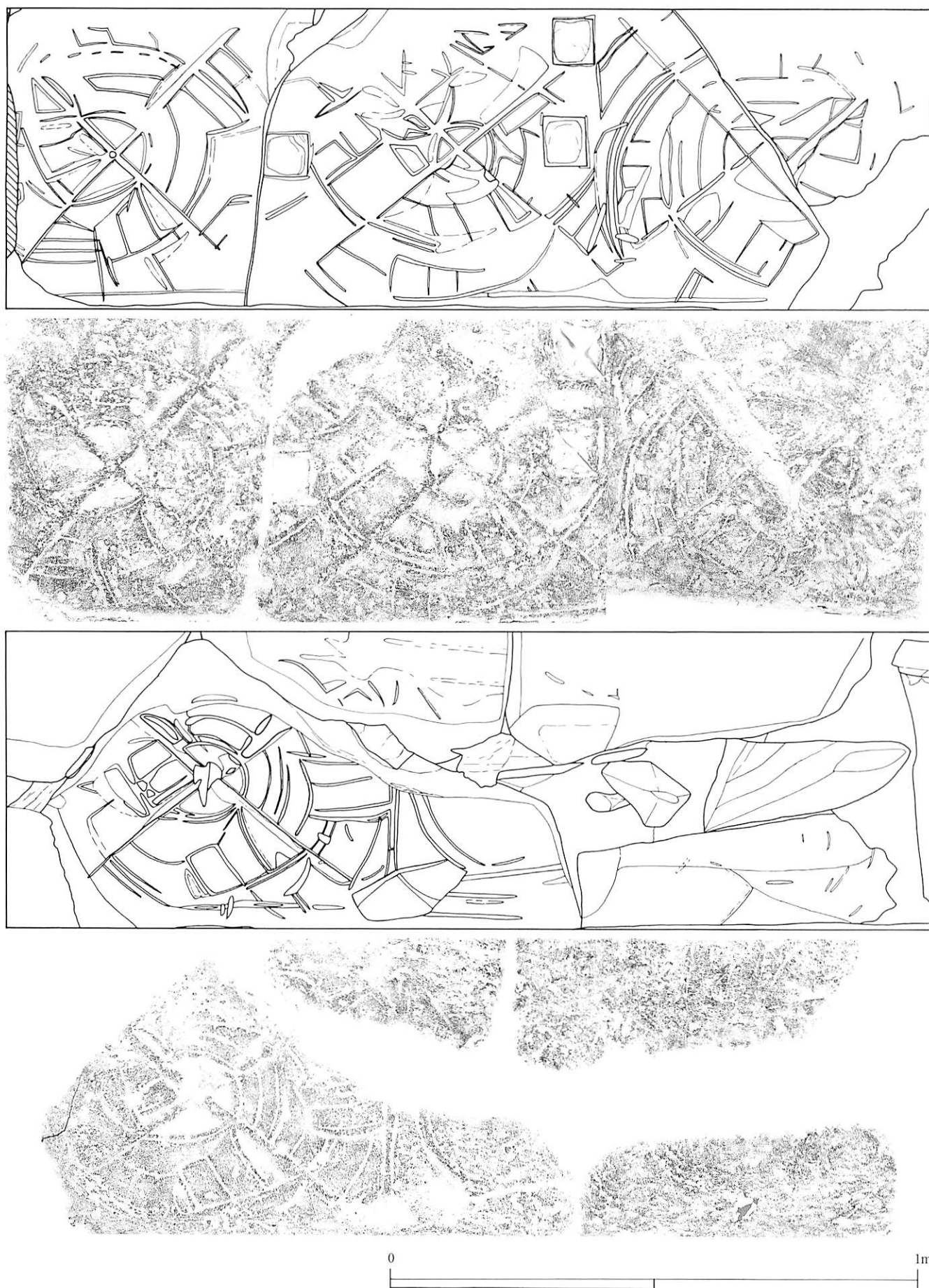


第48図 以前の左石障（乙益1964より）



第49図 石障実測図





第50図 直弧文実測図・拓影（上：右石障、下：左石障）



石であったが現在は3片に割れている。灰色の阿蘇溶結凝灰岩が使用されている。

向かって右側の直弧文以外は線刻がよく残存しており、文様構成の判断に耐えうるものである。ただし、風化によって線刻の幅や深さには差異がみられる。

直弧文の定義と分類

小林行雄は、直弧文を「斜めに交わる二条の帯を基準とし、そのおのおのの帯の一側縁における交点を中心として、渦巻形にべつの帯を配置し、さらにそれらのあいだに出没する帯の表現を加えた、複雑な構図の文様」と定義する（小林1976：p.486）。そして、この帯の表現は「両側の縁と、これに近接した縁どりの線と、帯の中央を走る中心線との、五本の刻線によって表出する」とみなす（同：p.487）。直弧文の構図は斜交軸によって四分割されるが、弧線の屈曲部と斜交軸の接点がある区画を1区、そこから主文様が展開する方向に2～4区と呼ばれる。直弧文は小林によってA～Cの3つに分類されている。A型は一辺に屈曲部を二度、B型は屈曲部を一度だけ接する。C型は1・2区にB型、3・4区にA型を用いるものである。

右石障左側の直弧文

さて、右石障左側の直弧文は残存状態が非常によい。小林分類ではA型に該当する。右回りの図形を用い、1区を上にしてしている。斜交軸は浮き彫り表現され、1～2cmの幅をもつ。斜交軸の片側の辺には1本の線が刻まれるが、もう一方の辺は斜交軸からそれぞれの区画に向かって斜めに掘り下げることで表現される。斜交軸以外の文様はすべて線刻により施されている。帯は五本の線刻で表現されており、直弧文の基本原理を守っている。斜交軸の交点には直径1cmほどの円形の窪みがみられる。

右石障中央の直弧文

中央の直弧文は小林分類のC型に該当する。1区を上にしており、1区と2区はB型、3区と4区はA型である。斜交軸交点付近の円弧内を平面的に彫り込み、他の部分は線刻で文様を表現する。1区にはB型に典型的な鋭角な屈折部が認められ、1区から2区にかけて斜交軸とほぼ平行の左上から右下へのびる直線も確認できる。小林が述べるように、4区には通常のA型ではなく、特異な表現が用いられている。すなわち、斜交軸の中心をめぐる内縁が1つの円を描いている。また、4区にも右上から左下にのびる斜交軸に平行の直線が確認できる。

右石障右側の直弧文

右側の直弧文は、風化が著しい部分があるため、1区と2区の構造がはっきりしない。小林分類ではA型に該当する。小林は「左回りで」「1区を上にし」、左側の直弧文を裏返したものであるとしている（小林1976：p.491）。

赤色顔料の塗布

右石障には赤色顔料の付着が確認できるが、風化のためその範囲を確定することができない。しかし、右石障全体に赤色顔料が認められるため、広範囲に塗布されていた可能性が高い。

刀掛状突起

斎藤忠および乙益重隆によって作成された実測図（第45図）には4個の刀掛状突起が記されているが、現在は上段左側の突起が欠損している。その部分には、突起が剥落したと考えられる割れ目がみられる。刀掛状突起の本来の突出度は、その表面が風化しているため不明である。突起基底部のところどころに1条の線刻が観察されるが、本来は突起の四方に配されていたものと考えられる。

文様が施される区画を区切るための上端と下端の横線は、現在下端の線刻のみが確認できる。しかし、それも石障基部のコンクリートによって途中でみえなくなる。（南）

（3）左石障（第50図の下、図版8）

左石障現状

縦約71.5cm、横約195cmの範囲が観察できる。石材の厚さは約20cmである。多くの石材が散逸しており、復元整備される際に、他の石材や瓦、コンクリートなどで隙間が充填されている。かつての写真（第48図）をみると、左右2箇所の直弧文の間に同心円文が彫刻されている状況

を確認できる。しかし、現在は左側の直弧文と中央の同心円文の一部しか確認できない。使用石材は灰色の阿蘇溶結凝灰岩である。

左側の直弧文は非常によく残存している。線刻は深く太い。小林分類ではA型に該当する。1区を上にし、右回りの図形を用いている。斜交軸は、右石障左側の直弧文と同様の表現である。斜交軸以外はすべて線刻で表現されている。斜交軸の交点付近は、第48図によると線が上下に交差する様子がみられるが、現在は剥落しているため詳細な構造は明らかでない。3区と4区を区画する斜交軸から派生する帯の一部は、2区へ向かわずに横方向に直進している。帯は5本の線刻で施されており、右石障左側と同様に直弧文の基本原理を守っている。

左石障左側の直弧文

中央には同心円文の一部と縦に走る区画線の一部が残存している。しかし、これら以外の文様を明確に確認することはできない。

左石障中央の同心円文

文様の上端と下端を区切る横線のうち、下端の線刻の一部のみが確認できる。

直弧文が残存している石材には赤色顔料が付着している。左石障も全面に赤色顔料が塗布されていた可能性が高い。

赤色顔料の塗布

なお、直弧文が施されている部材以外の石材にも線刻の形跡かと思われるものがみられるが、本来の装飾文様かどうかは不明である。また、後世の線刻も一部にみられる。(南)

#### (4) 奥石障(第49図、図版7-3)

縦約100cm、横約170cmの範囲が観察できる。石材の厚さは約17cmである。左石障と同様に多くの石材が散逸したものと考えられ、構築当時の石材であるのかどうかの判断が難しい。ただし、向かって右半部にピンク色を呈する阿蘇溶結凝灰岩(以下、ピンク石と記述する)が使用されている点には注目できる。ピンク石は宇土半島に産出する特徴的な阿蘇溶結凝灰岩であり、古墳時代の石棺に使用された石材として著名である。現在こうした石材をわざわざ使って復元することは考えがたいため、これは当初からのものであると判断できる。長砂連古墳でピンク石が用いられるのは奥石障のみで、他は灰色の阿蘇溶結凝灰岩である。同様の石材の使い分けが行われている古墳にはヤンボシ塚古墳がある(高木1995)。(南)

奥石障現状

ピンク石の使用

#### (5) 前障(第49図、図版7-4)

縦最大87.5cm、最小70.5cm、横約180cmの範囲が観察できる。石材の厚さは約15cmである。上部左側が一部欠損しているが、構築当時の1枚石がそのまま残存している。上部中央には幅37.5cm、深さ5cmの浅いU字形の挟り込みが残存している。現在、挟り込みの左側が失われているため明瞭なものではないが、発見当初の写真(第46図)をみればさらに深いものであったことは確実である。かなり風化が進んでおり、全体的に剥落が激しい。(南)

前障現状

U字形挟り込み

#### 参考文献

- 上野辰男 1976「長砂連古墳(県史跡)」『熊本の装飾古墳』熊本の風土とこころシリーズ7 熊本日日新聞: pp. 176-179  
 乙益重隆 1964「長砂連古墳」『装飾古墳』平凡社: p. 91  
 乙益重隆 1984「長砂連古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会: pp. 140-141  
 熊本県教育委員会編 1981「長砂連古墳」『熊本県の文化財』第3集 史跡: pp. 168-169  
 小林行雄 1976「直弧文」『古墳文化論考』平凡社: pp. 483-540  
 斎藤 忠 1973『日本装飾古墳の研究』講談社  
 坂本経堯・坂本経昌 1971「長砂連古墳」『天草の古代』私家版: pp. 63-64  
 櫻井久之 1999「直弧文の成立と意義」『ヒストリア』第163号 大阪歴史学会: pp. 151-174  
 下林繁夫 1984「長砂連古墳調査報告」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会: pp. 141-143  
 (初出は『天草維和村の考古学的調査の果』熊本県立玉名高等学校考古学部、1955年)  
 高木恭二 1995「石棺式石室と肥後-宇土半島基部における源流的要素-」『横穴式石室にみる山陰と九州-石棺式石室をめぐって-』古代の出雲を考える8 出雲考古学研究会: pp. 50-69

## 四 過去の出土遺物

### 遺物の概要

今回報告する遺物は、1934年の金刀比羅宮の社殿建設工事にともなって発見されたものである。総数は10点で、内訳は鉄器片9点、土師器片1点である。鉄器片は鉄銚片2点、鉄刀片1点、不明鉄器片6点に分けられる。これらのうち鉄銚と鉄刀は石障北東隅の副室内で、土師器は土中より検出された（下林1984）。長く所在不明とされてきたが、地元の方によって大切に保管されていたことがわかり、2003年に大矢野町（現上天草市）へ寄贈された。（牧野）

### 1. 鉄器

#### (1) 鉄銚（第51図1・3、図版10-2・3の1）

#### 鉄銚袋部

3は鉄銚の袋部である。袋部上端で振じ切られているが、それは後世の破損であろう。残存長は16.6cm、袋部の直径は3cmである。袋部の断面形は円形である。合わせ目と山形の挟りがみられる。目釘孔は確認できなかった。高田貫太編年のⅡ期に相当する（高田1998）。

#### 鉄銚刃部

1は鉄銚の刃部片である。残存長は5.4cm、刃部幅は1.6cmである。断面形は菱形で、明瞭な鑄が確認できる。

1と3は同一個体の可能性がある。（牧野）

#### (2) 鉄刀（第51図2、図版10-3の2）

#### 鉄刀

2は鉄刀の刃部片である。残存長は5.3cm、刃部幅は2.7cmである。（牧野）

#### (3) 不明鉄器（図版10-3の4～9）

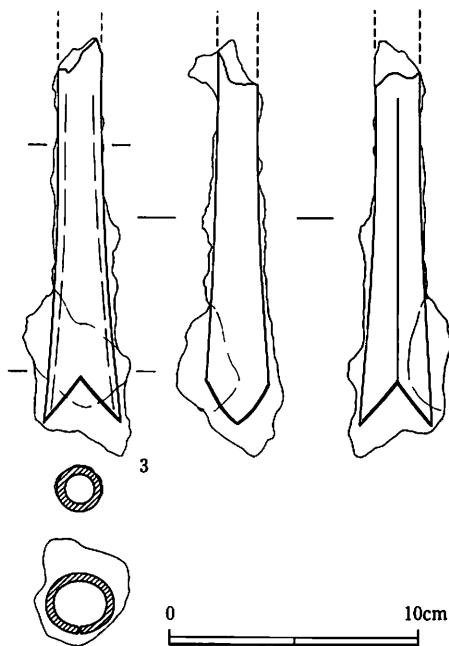
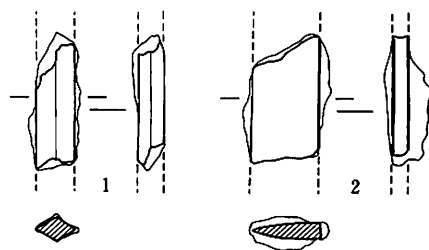
#### 不明鉄器

図版10-3の4・5は半裁されており片面のみの遺存であるが、共に鑄が確認できる。鉄銚の刃部片である可能性がある。6～9は小破片であるため、全体の形状は不明である。（牧野）

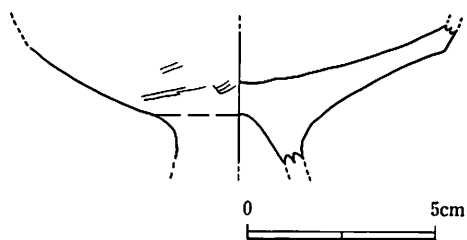
### 2. 土器（第52図、図版10-4）

#### 土師器

第52図は土師器の高坏である。坏屈曲部より上部と脚部の大半が欠損している。内面・外面ともに磨滅が著しいが、坏部外面の一部にはハケ目が残る。その他はナデ仕上げである。坏部内面はやや湾曲している。脚部はハの字状に広がると考えられるが、裾部の形状は不明である。林田和人分類のBa3ないしBa4に該当する（林田2002）。（南）



第51図 鉄銚・鉄刀実測図



第52図 土師器実測図

### 参考文献

- 下林繁夫 1984「長砂連古墳調査報告」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp.141-143（初出は『天草維和村の考古学的調査の果』熊本県立玉名高等学校考古学部、1955年）  
高田貫太 1998「古墳副葬鉄銚の性格」『考古学研究』第45巻第1号 考古学研究会：pp.49-70  
林田和人 2002「肥後における中・後期の様相」『古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 第5回九州前方後円墳研究会実行委員会：pp.117-144

## 五 まとめ

### 1. 古墳の現状と調査に至る経緯

長砂連古墳は熊本県上天草市大矢野町中長砂連6554番地に所在する。そこは大矢野島の南東端にあたり、古墳は独立丘陵である六部塚の丘頂に位置する。墳丘および石室は1934年の金刀比羅宮の社殿建設にともなう工事によって破壊されており、古墳築造当時の墳丘形態や石室構造の詳細は不明である。現在の円丘は1975年に復元整備されたもので、そのなかに造られたコンクリート製の小部屋のなかに石障が復元・保存されている。

古墳の位置  
と現状

長砂連古墳は、その石障に精緻な直弧文をもつことで全国にその名を知られている。しかし、正式な報告書がなく、公表されている石障実測図にもいくつかの改善すべき点がみられた。そこで上天草市は、上天草市史大矢野町編纂事業にともなう基礎資料収集の一環として、熊本大学文学部考古学研究室の協力を得ながら、2004年8～9月に当古墳の石障実測調査を実施した。また、所在不明であった1934年の出土遺物が地元の方によって大切に保管されていたことが判明し、大矢野町（現上天草市）は2003年にその寄贈を受け整理作業を行った。（南）

今回の調査

### 2. 調査の成果

今回の調査によって以下のような成果が得られた。

第1に、各石障の現状と文様の詳細についての知見を得ることができた。各石障とも改変や剥落などはあるが、奥石障以外は石障構築当時の姿を垣間見ることができる。右石障には3個連続して直弧文が彫刻されている。小林行雄分類では左からA型・C型・A型となる（小林1976）。中央の直弧文の4区には、通有のA型とは異なる特異な表現が用いられている。元来4個あった刀掛状突起は上段左側が欠損しており3個しか残存していない。左石障はその一部が失われており、左側の直弧文と中央の同心円文の一部のみが残存している。左側の直弧文はA型で、文様の基本原理を守ったものである。残存状態がよい。左右の石障は全面に赤色顔料が塗布されていた可能性が高い。奥石障は改変が著しいが、ピンク色の阿蘇溶結凝灰岩が使用されている点は注目に値する。前障の中央には浅いU字形抉り込みがみられる。

右石障

左石障

奥石障  
前障

第2に、これまで所在が不明であった過去の出土遺物の詳細を知ることができた。その内訳は鉄器片9点、土師器片1点である。鉄器には鉄鉾の袋部や刃部片、鉄刀刃部片が含まれる。鉄鉾は高田貫太編年のⅡ期に該当する（高田1998）。土師器は高杯の坏部下半から脚部にかけての破片で、林田和人分類のBa3からBa4に相当する（林田2002）。鉄鉾と高杯の年代観に矛盾はなく、5世紀中葉から後葉に位置づけられる。（南）

過去の出土  
遺物

### 3. 古墳の評価

長砂連古墳の石障は、Ⅱ字形の屍床、浅いU字形削り込み、全面に赤色顔料を塗布するといった石障系横穴式石室のなかでも古い要素を持ち合わせている。また、ここに描かれた直弧文は基本原理を守ったもので、しかもその斜交軸が浮き彫り表現される点で古い様相を呈している。同種の直弧文表現をもつ古墳には、岡山県千足古墳や福岡県石人山古墳などがある。高木正文は、熊本県地域に分布する直弧文が施された装飾古墳のなかで長砂連古墳を最古に位置付け、「5世紀半をやや遡る時期」の年代を与えている（高木正1999：p.115）。こうした石障や直弧文表現からみた年代観と出土遺物のそれを総合し、長砂連古墳の築造年代を5世紀中葉

石障と直弧  
文の様相

築造年代

と考えておこう。長砂連古墳に後続する直弧文が施された装飾古墳として高木正文は千金甲1号墳や鴨籠古墳、井寺古墳等をあげるが（高木正1999）、それらの直弧文の斜交軸は沈線表現によるものである。

#### 吉備地方との関係

長砂連古墳の右石障中央の直弧文C型は、小林行雄によって岡山県千足古墳と類似点をもつことが指摘されている（小林1976）。両者の類似点は斜交軸の中心をめぐって内縁が1つの円を描くことである。この表現は他の直弧文にはみられないものである。千足古墳石障の直弧文はA型を2つ並べて施されているが、その4区はC型の4区に類似する図形となっている（小林1976）。また、千足古墳の石障石材には、天草産の砂岩が使用されたことが指摘されている（高木恭1986・1994・1999）。九州以外ではまれな石障系横穴式石室を採用している点からも、千足古墳が熊本県地域と強い関連性をもつ古墳であることをうかがい知ることができる。特異な直弧文の構図、石障系横穴式石室の採用、天草産石材の運搬など、長砂連古墳と千足古墳を結びつける要素は多い。岡山県造山古墳前方部におかれている石棺が阿蘇溶結凝灰岩を使用したものである点からも両地域の密接な関係が想起される。

#### 長砂連古墳以後の直弧文系装飾古墳

長砂連古墳以後も、八代海沿岸地域では直弧文を施す装飾古墳の築造が継続して行われている（高木正1999）。櫻井久之は、直弧文は「倭政権によって権威づけられた政治的色彩の強い文様であり、政権を支える道具の一つとして創出された文様であった」と述べる（櫻井1999：pp. 167-168）。また、高木正文は、直弧文を施す装飾古墳が「群を抜いて秀れている」とし、直弧文を「権力を象徴する文様」としている（高木正1999：p. 144）。鴨籠古墳や井寺古墳に後続する直弧文を施す装飾古墳には国越古墳（乙益1967・1984）があるが、その主体部石屋形から出土した画文帯環状乳神獣鏡は江田船山古墳など5古墳との同型関係にある。また、石室内の通路をはさんで左側の西屍床からは半肉彫獣帯鏡が出土し、この鏡にも福岡県沖ノ島21号遺跡など8面の同型鏡が知られている。石屋形と東西屍床に挟まれた別区からは銅椀が検出されている。

#### 直弧文系装飾古墳の性格

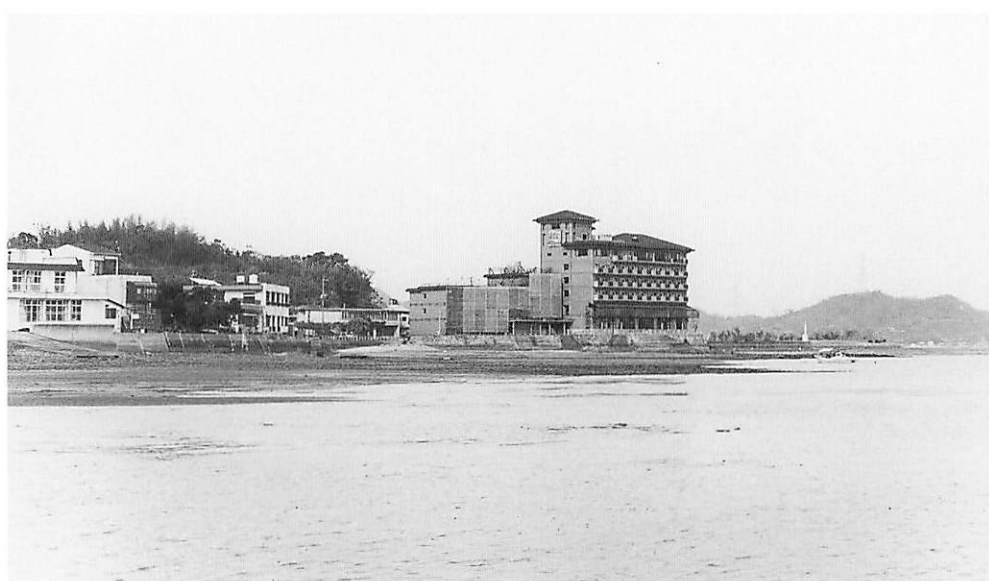
このように、長砂連古墳をはじめとする直弧文を施す装飾古墳が、古墳時代中期から後期にわたって熊本県地域の重要な位置にあったことは明らかである。中期においては吉備地方との強い関連性がうかがえ、後期においては江田船山古墳や沖ノ島など中央政権と強い関係をもつ古墳や遺跡との密接な関連があったことを物語っている。前期前葉から続く中央政権と八代海沿岸地域の関係の一端が、中期以降においては直弧文系装飾古墳にも引き継がれたとみてよからう。（南）

#### 参考文献

- 乙益重隆 1967「宇土郡不知火町国越古墳」『昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概要』熊本県教育委員会：pp. 1-8  
 乙益重隆 1984「国越古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会：pp. 127-130  
 小林行雄 1976「直弧文」『古墳文化論考』平凡社：pp. 483-540  
 櫻井久之 1999「直弧文の成立と意義」『ヒストリア』第163号 大阪歴史学会：pp. 151-174  
 高木恭二 1986「鴨別と鴨籠」『Museum Kyusyu』通巻21号 博物館建設推進九州会議：pp. 34-40  
 高木恭二 1994「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮嶋クリエイト』第6号 宮嶋利治学術財団：pp. 110-132  
 高木恭二 1999「横穴式石室の石材－石障系横穴式石室の事例を中心に－」『九州における横穴式石室の導入と展開』第2回九州前方後円墳研究会資料集第Ⅱ分冊 第2回九州前方後円墳研究会実行委員会：pp. 695-706  
 高木正文 1999「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集 国立歴史民俗博物館：pp. 97-150  
 高田賢太 1998「古墳副葬鉄鍔の性格」『考古学研究』第45巻第1号 考古学研究会：pp. 49-70  
 林田和人 2002「肥後における中・後期の様相」『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 第5回九州前方後円墳研究会実行委員会：pp. 117-144

## 第 3 部

# 柳貝塚採集資料報告



柳貝塚近景

## 一 資料報告に至る経緯

柳貝塚は現在平均海面線下にある縄文時代の遺跡であるが、干潮時には土器片をはじめとして様々な遺物が砂泥干潟の上に姿を現す。柳貝塚でこれまで表面採集されている遺物は土器片をはじめ石器、骨角器、獣骨など多岐にわたり、天草地域、ひいては九州における縄文時代研究にとって非常に重要な資料であるといえるが、これまでに公表された資料はごく僅かである。そこで、上天草市大矢野公民館に展示されている故徳永公路氏採集資料・福田正文氏採集資料<sup>(1)</sup>および熊本大学文学部考古学研究室保管資料を併せて報告することとしたい。（荒木）

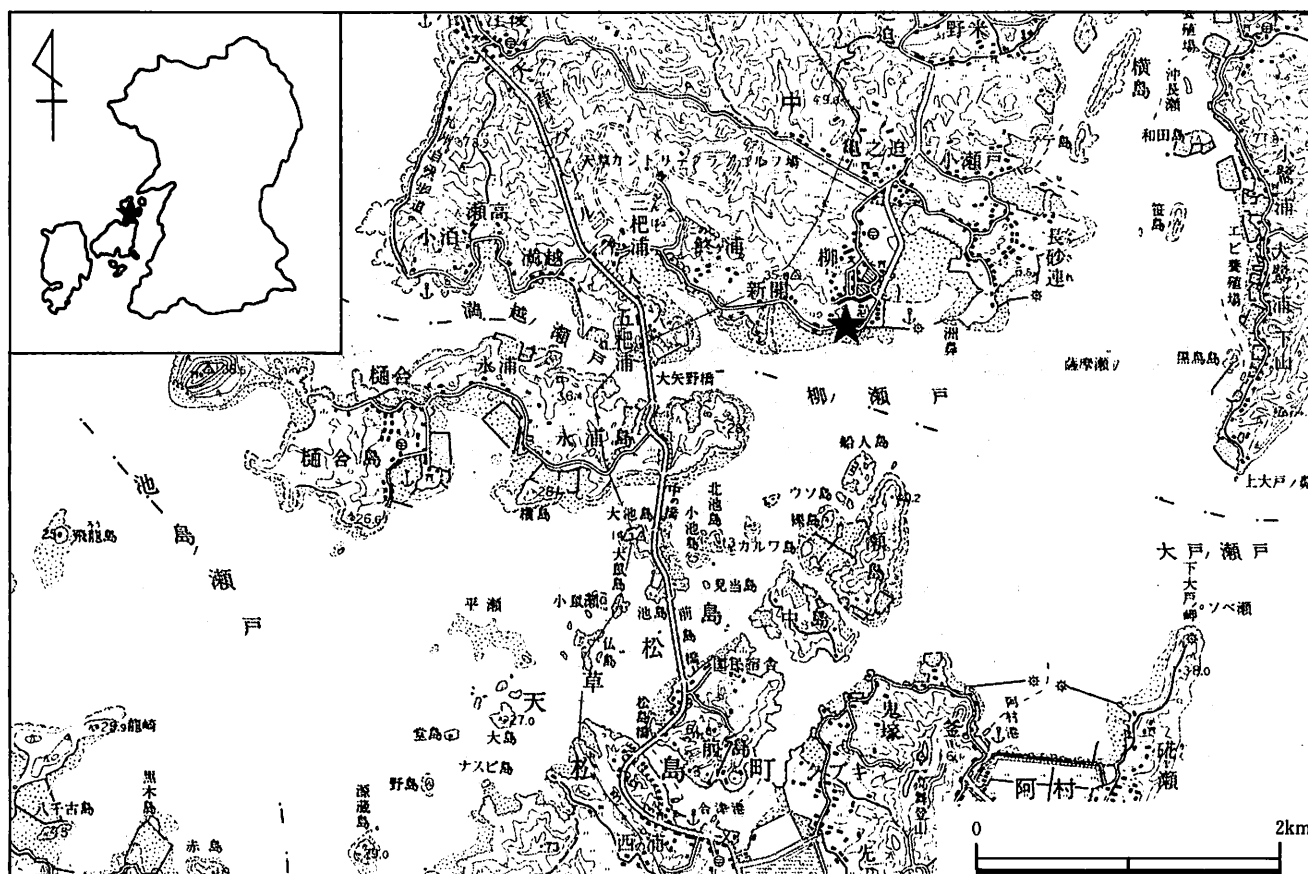
資料報告に  
至る経緯

註（１）村上浩明 2001「―― 柳貝塚採集資料」『考古学研究室報告』第36集 熊本大学文学部考古学研究室：pp.1-10

## 二 位置と環境

柳貝塚は熊本県上天草市大矢野町中柳に所在する（第53図）。遺跡前面の海は柳ノ瀬戸と呼ばれ、そこから東の大戸ノ瀬戸を抜けると八代海が、西の満越ノ瀬戸を抜けると島原湾が広がっている。遺跡のわずか700m南には船人島が所在している。当地周辺は、格好の漁場を周囲に備えた漁撈の基地となりうる場所であり、現在遺跡のすぐ東には柳港という漁港がある。本遺跡の周辺には、大矢野島に小波戸遺跡、野米貝塚、東の維和島に梅ノ木貝塚、弓田貝塚、南の松島に前島貝塚など、海岸あるいは海底に存在する縄文遺跡が多く認められる。（荒木）

柳貝塚の位  
置と環境



第53図 柳貝塚の位置



### 三 採集遺物

#### 1. 土器（第54～56図）

柳貝塚から採集されている土器片は多数あるが、大半を占めるのは縄文早期末から前期にかけてのものであり、特に縄式の系統のものが多い。また中期、後期に属するものも若干認められる。

縄文早期の  
土器

1は早期末の平椀式と思われる。内面のみ横位に貝殻条痕調整が施される。外器面は棒状工具で縦位の沈線が引かれ、その間隙に連点文が充填される。

縄文前期の  
土器

2～32は前期に属する土器である。その大部分は内外面に貝殻条痕調整が施された縄式系統の土器であり、野口式も認められる。

2～9は横位の微隆起線文が貼付けられる土器である。2は内外面ともに貝殻条痕調整が施された後、やや強くナデられる。口縁端部にヘラ状工具による刻目が施され、その下位には横位の微隆起線が貼付けられる。3は内外面ともナデ調整で外面に横位の微隆起線、口唇部に棒状工具による刺突文が施される。4・5は内外面ともに貝殻条痕調整後、ナデ調整が施され、外面に横位の微隆起線が貼付けられる。4はさらに口縁端部外面にヘラ状工具により刻目が施されている。6は内外面ともに横位の貝殻条痕調整の後、軽くナデられる。口唇部には棒状工具による刺突文が施され、同一工具で口縁端部内面に横位の沈線文が引かれる。外面には横位の微隆起線が貼付けられている。7はやや波状口縁気味となる口縁部片で、内外面とも横位の貝殻条痕調整後、軽くナデられる。口唇部に棒状工具による刺突文、外面には横位の微隆起線が施文される。8は内外面とも貝殻条痕調整され、外面に横位の微隆起線が貼り付けられる。9は内外面とも貝殻条痕調整され、外面に横位の微隆起線、その間に波状の微隆起線が貼付けられる。

10～17は縦位の微隆起線文が貼付けられる土器である。10は内外面とも貝殻条痕調整で、縦位の隆起線が貼付けられる。11と13は内外面とも横位の貝殻条痕調整後、ナデ調整が施される。外面に縦位の隆起線が貼付けられ、口唇部にはヘラ状工具により刺突文が施される。12は内外面とも横位の貝殻条痕調整が施され、外面に縦位の微隆起線が貼付けられる。14は内外面とも横方向の貝殻による条痕調整が施され、外面に縦位の隆起線が貼付けられる。15は内外面とも横位の貝殻条痕調整後、軽くナデられている。外面に縦位の微隆起線が貼付けられる。16は外面が縦位、内面は横位の貝殻条痕調整後、外面のみナデられている。外面には縦位の短い微隆起線が貼付けられる。17は内外面とも貝殻条痕調整され、外面に縦位の微隆起線が貼付けられている。

18～22は沈線文が施される土器である。18は貝殻条痕調整された器面に棒状工具による接近した沈線が2本引かれ、その間が隆起線状を呈している。19は内面が横方向の貝殻条痕、外面はナデ調整で仕上げられている。口縁部には、斜行する縦位のヘラ状工具による沈線文が施され、その下位に押引き状の列点文が施される。20は内外器面ともに貝殻条痕調整された後、軽くナデられている。口唇部はナデられて平坦になり、外器面には棒状工具による横位の沈線が引かれ、その上部が隆起線状になっている。21は内外面を貝殻条痕調整後にナデ調整されている。外面には、接近して2本ずつ、計4本の横位の沈線文がヘラ状工具により施文される。ま

た口縁端部内面にはヘラ状工具により刻みを施す。22は内外面とも貝殻条痕調整後ナデが施される。外面に縦位の隆起帯を貼付けた後、横位および弧状の2本単位の沈線文が引かれる。

23・24は横位に貝殻条痕調整された後、軽くナデられている。外面には調整具と同じ二枚貝腹縁で23には直線文及び曲線文、24には曲線文が描かれる。

25～27は蕪式と曾畑式の間位置づけられるとされる野口式<sup>(1)</sup>の胴部片である。25は内器面に貝殻条痕の痕跡を留めるが、ナデ調整が施されている。26・27は内外面ともナデ調整が施されている。25・26は外器面に棒状工具で並行沈線文が描かれ、27は並行沈線文間に曲線文が施される。

28～32は蕪式系の無文胴部片である。いずれも内外面に貝殻条痕調整が施され、30以外は外器面のみ軽くナデられる。

33～36は中期末から後期に属する土器である。33・34・36は阿高式系土器である。

縄文中期～  
後期の土器

33・34は中期の阿高式土器である。33は内外面ともナデ調整が施される。横走る凹線で区画された口縁部に、指頭による縦位の短凹線文および凹点文が交互に施され、口唇部の内面側には指頭により凹点文列が施される。34は内外面ともにナデ調整で、横走る凹線で区画された文様帯に先端の丸い棒状工具で縦位および横位の凹線文が施される。口唇部には外面の施文具と同一の丸棒状工具で凹線および刻みが施される。36は後期初頭の出水式で、内外面ともナデ調整され、やや波状気味の口縁部をもつ。口縁部内面に稜を有し、口縁部文様帯に30のものより細い棒状工具により斜行する短凹線文と連点文が施される。35は後期中葉の西平式土器である。内外面ともナデ調整が施され、細い棒状工具により外面に2本の沈線文、内面に波状文が施される。

37は晩期の刻目突帯文土器である。内外面が貝殻条痕調整されたのち、外面はナデ調整で仕上げられている。口縁部に横位の突帯を貼付け、その突帯上と口唇部にヘラ状工具による刻目が施される。

縄文晩期の  
土器

38～46は深鉢形土器の底部資料である。

底部資料

38は曾畑式の底部である。丸底で、内外面とも丁寧なナデ調整で仕上げられ、外面には棒状工具により放射状の沈線文が施されている。今回報告する資料の中では唯一の曾畑式である。胎土中への滑石の混入はみられなかった。39～43は蕪式系土器の底部で、すべて平底である。39以外はいずれも内外器面ともに不定方向の貝殻条痕調整の後、軽くナデられている。44・45は阿高式系土器の底部である。胎土中への滑石の混入および鯨底は確認できなかった。44は内外面ともナデ調整が施される。45は内外面とも貝殻条痕調整された後、ナデ消されている。46は早期末頃の平底かとおもわれる。内外面ともナデ調整され、底部接地面には深い指頭圧痕が認められる。

(荒木)

## 2. 土製品 (第57図)

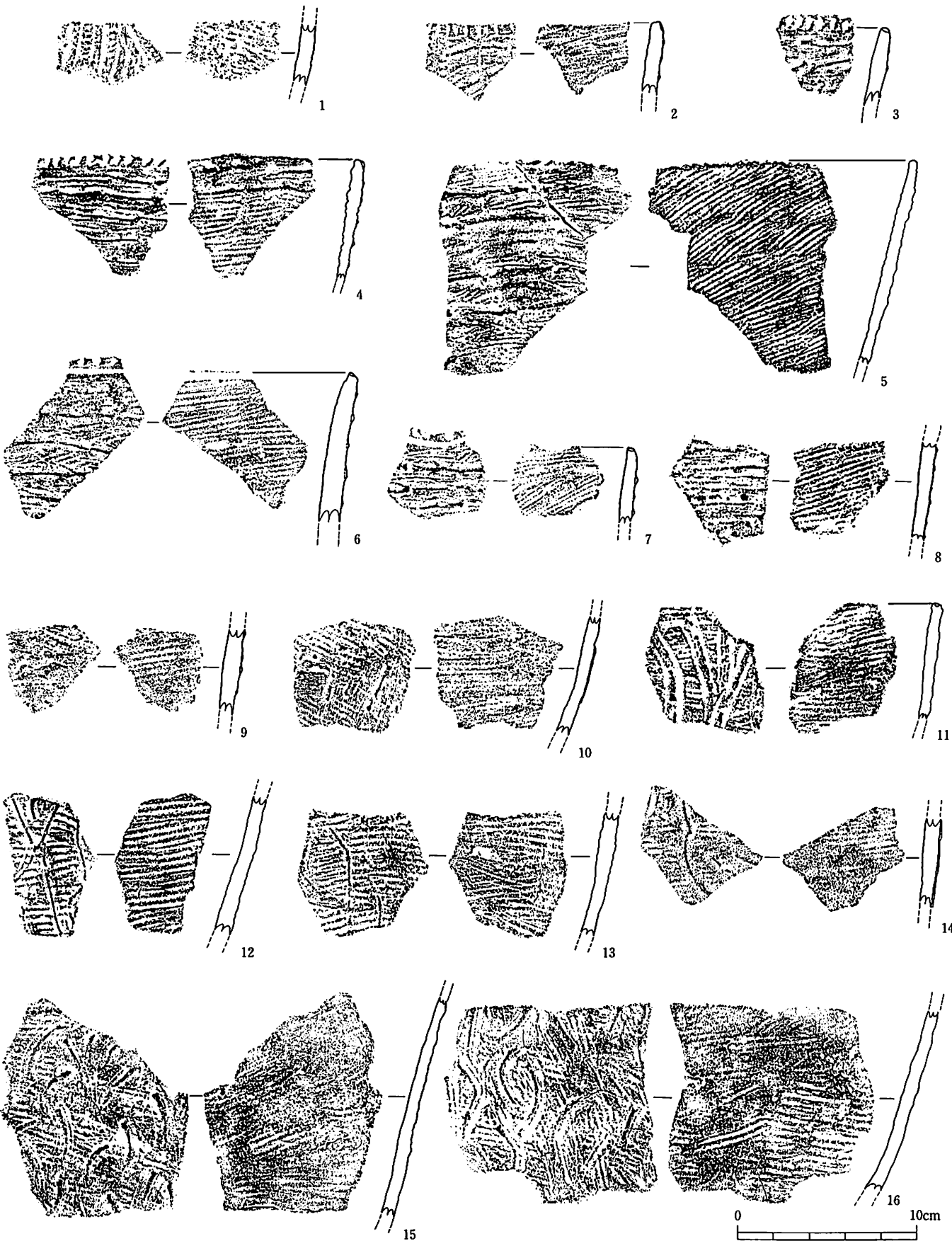
土製品

いずれも臼形を呈する耳栓である。1～3とも全面ナデ調整によって仕上げられ、1以外は無文である。1は表面の縁辺にヘラ状工具による刻目が施されている。

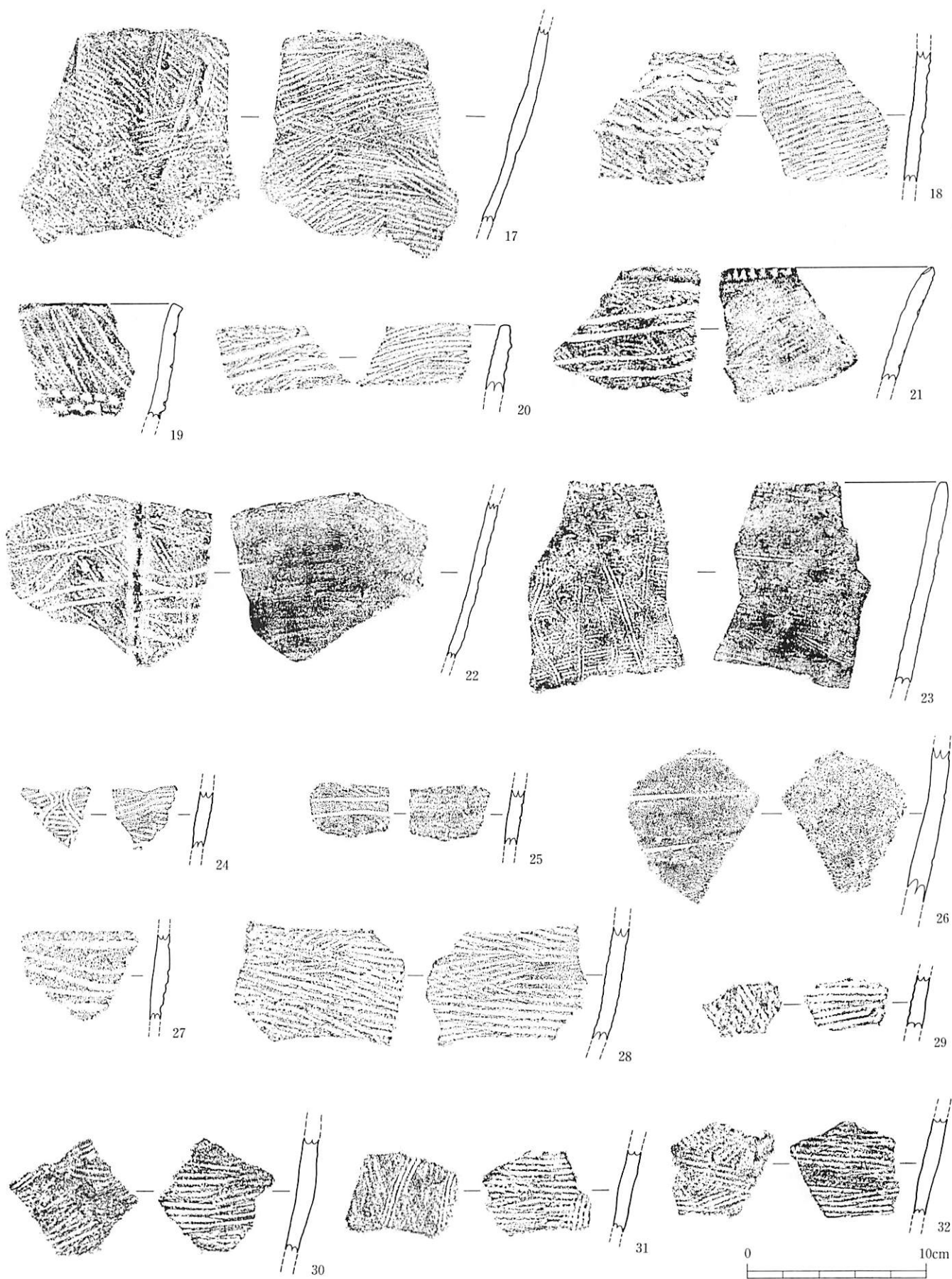
(荒木)

## 3. 石器 (第58～61図)

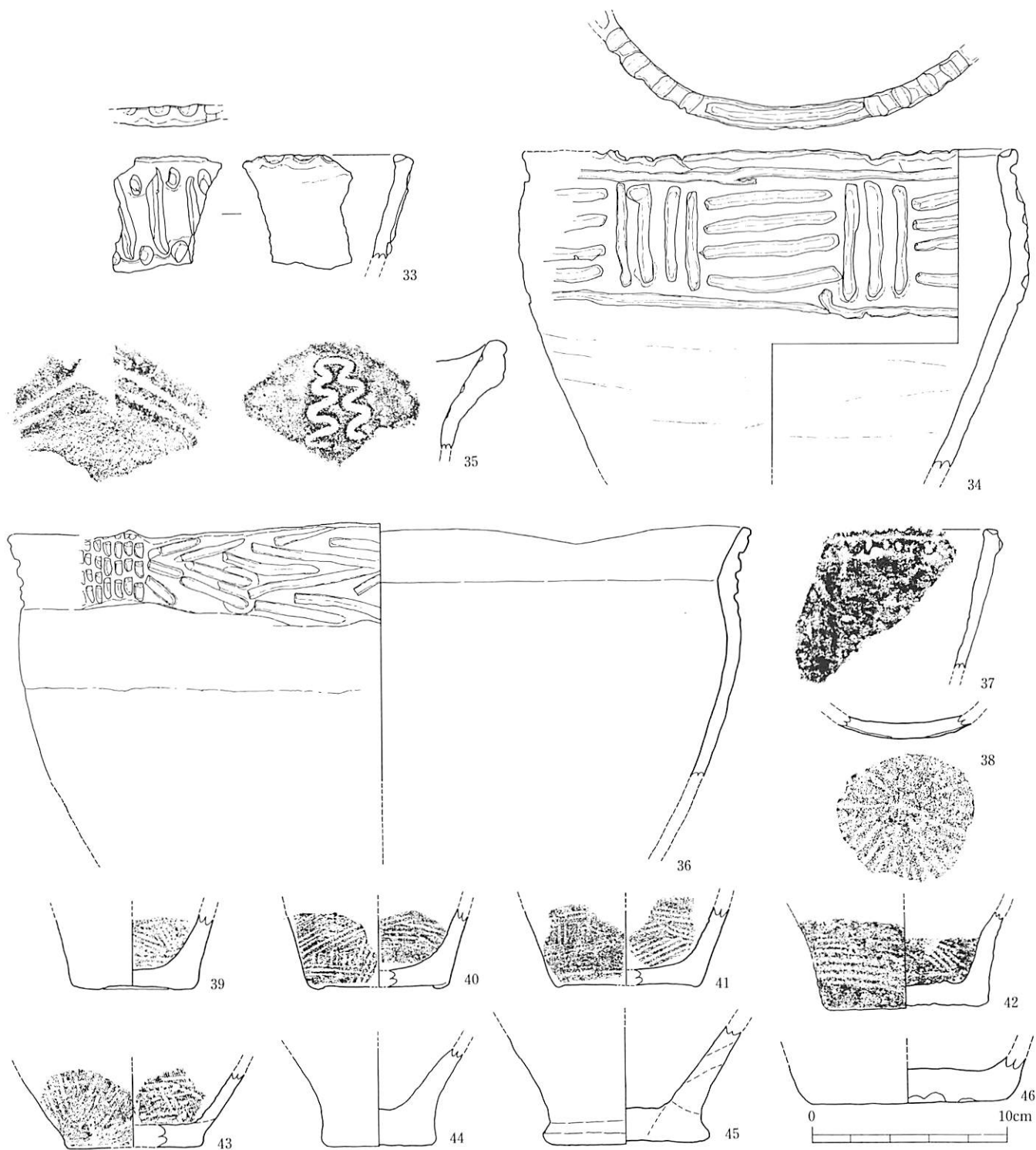
前回報告の中では、福田正文氏や熊本大学文学部考古学研究室の学生が採集した石器39点を紹介、図示した<sup>(2)</sup>。今回は、その報告分に上天草市教育委員会所蔵の石器28点を加えた計67点を報告したい。



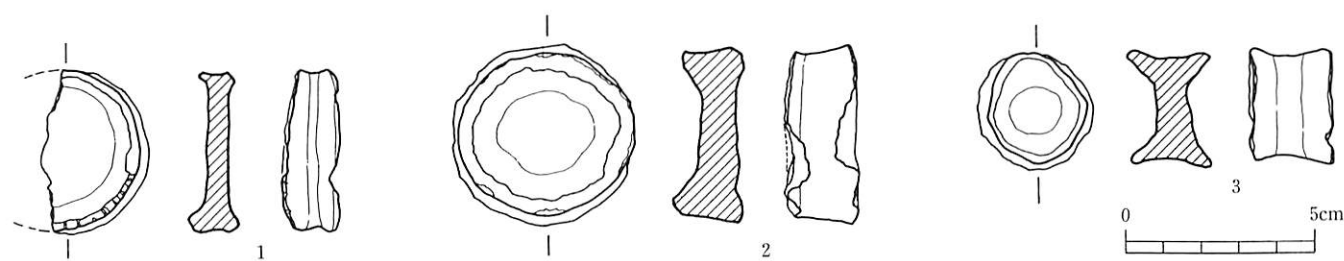
第54図 土器実測図（1）



第55図 土器実測図(2)



第56図 土器実測図 (3)



第57図 土製品実測図

**石鏃**（第58図1～29） 29点図示した。全体的にみてつくりの粗いものが多い。未製品のもの以外はほとんどが凹基無茎鏃であるが、26・27はその長さ、幅、厚みなどからみて、尖頭状石器である可能性が高い。ほとんどのものが欠損しており、完形品は29点中14点である。石材は1・12が灰白色黒曜石製、3が漆黒色黒曜石製、5が砂岩製、9・10が不透明灰白色黒曜石製、20が青灰色黒曜石製、その他は全て安山岩製である。以下個別にみていく。

1～25は凹基無茎鏃である。1は鋸歯鏃で、つくりは丁寧である。2は両面に剥離の入る脚の短いタイプである。3は裏面に主要剥離面を残し、表面はやや粗いつくりで、中央部に厚みをもつ。4は薄い剥片を利用し、調整加工はさほど丁寧でなく、裏面の右側縁には調整を施さない。5は両面に剥離面を大きく残し、片脚を欠損している。6は両面に大きな剥離面を残し、基部に少し抉りを入れ、両側縁を粗く作り出す程度である。7は両面に大きく剥離面を残す。左側辺は素材剥片の薄さを利用し、右側辺には厚みを減じようとする調整が入る。8は薄い剥片を利用したもので、磨耗が著しい。基部の抉りは他のものに比べて深く、片脚を欠損する。9は剥片の形態を利用し、非常に薄い。下半部を大きく欠損している。10は粗い調整加工が全面に施され、片脚を欠損する。11は調整加工が全面に及ぶが中央部に厚みがある。両脚の先端を欠損する。12は細長い石鏃で、非常に丁寧なつくりである。13は側面から表面に求心状の剥離が入り、薄くしようとする意図が窺える。14は丁寧な二次加工が入る。両脚が欠損しており、裏面の磨耗は著しい。15は非常に丁寧なつくりで片脚を大きく欠損する。16は非常に薄い縦長剥片を利用している。二次加工は比較的厚い側辺部、基部のみにとどまり、剥片の形状を利用する。先端部を欠損する。17は非常に粗いつくりをしていることから未成品とみられる。18～20は未成品である。18は自然面を大きく残している。19は粗く形成されたもので、厚さを減じきれていない。20は裏面の一部に主要剥離面を残す。裏面は両側辺から表面に比べて丁寧な調整剥離が施されるが、表面は凹凸が激しく、剥離も粗い。21は両面に剥離面を大きく残し、厚みが不均一な石鏃である。22は両面に大きく剥離面を残す。全周に丁寧な調整を入れて、形を整えている。23は表面に丁寧な調整剥離を施し、裏面には大きく剥離面を残す。両脚を欠損しており、磨耗している。24は裏面に大きく剥離面を残している。側辺には丁寧な調整剥離が入る。25は表面には薄く整えようとしたことが窺えるが、中央部は厚いままである。

凹基無茎鏃

26・27は尖頭状の石器である。26は両側辺には丁寧な調整加工が施される。27も同様に両側

尖頭状石器

28・29は未成品である。28は薄い剥片を使用し先端部を作り出すが、基部はあまり調整が加えられない。29も薄い剥片の剥離面を大きく残す。表面には粗い剥離が加えられるが、裏面にはほとんど調整が加えられない。

石鏃未成品

**石匙**（第58図30～32、第59図33～46） 17点図示した。これらは大きく縦匙（30～32）と横匙（33～46）に分けられる。これらは全て安山岩製である。

30は小型で、分銅形を呈し、表裏交互剥離による二次加工が施される。31は典型的な縦匙で、縦匙海水に洗われたことによる磨耗が著しいが、表裏交互剥離によるやや粗い調整加工が施される。下部は欠損する。32は横長剥片の側辺に調整加工が施され、その一端に抉りが入る。表裏面に大きな剥離面を残している。

横匙はいずれも横長剥片を素材とし、その打点部をつまみ部として、周縁全体に丁寧な加工が施されている。これらは大きさによって、大・中・小の3タイプに区分できる可能性がある。

横匙



また形態によっても、長幅比が3対1以上になる細長いタイプと2対1ほどのずんぐりしたタイプに分類でき、刃部形態も直線的なものと湾曲するものに分けることが可能である。33～35・39・41・42は刃部欠損、43はつまみ部と刃部を欠損している。その他はほぼ完形である。

#### 磨製石斧

**磨製石斧**（第60図47～54） 8点図示した。47は両側辺に剥離が施され、表裏両面とも丁寧な研磨がなされる。基部は大きく欠損する。頁岩製。48は全面丁寧な研磨が施され、両側辺には面が形成される。刃部および基部を欠損する。蛇紋岩製。49は表裏とも大きく調整剥離の痕跡を残している。刃部以外の研磨は粗く、礫面を大きく残す。基部を欠損する。玄武岩製。50は全面に研磨痕が観察されるが、刃部は剥離面で構成される。この剥離痕が研磨面をきっており、再利用を意図して剥離による調整を加えたことが窺える。頁岩製。51は唯一の完形品で裏面のみ調整剥離がみられる。全面が研磨され、両側縁にははっきりとした面が形成される。玄武岩製。52は全面にわたって丁寧な研磨痕が施されるが、一部調整剥離の痕跡が観察される。刃部の一部は破損している。蛇紋岩製。53は大型石斧。全体に風化をみせ研磨痕は僅かに残るのみである。基部を破損する。玄武岩製。54は基部で、右側縁のみ調整剥離が施され、左側縁は素材の形状をそのまま残す。部分的に研磨されるのみで表裏とも礫面を残す。安山岩製。

#### 打製石斧

**打製石斧**（第60図55・56） 2点図示した。55は打面を残す横長剥片を素材とし、刃部に数枚の剥離痕が観察される。左側辺には礫面が大きく残っている。安山岩製。56は片刃の打製石斧である。板状の礫を素材とし、両側縁から中心に向かって粗く調整剥離を施す。刃部の形成は主に表面にむかって施される。裏面および右側面には礫面を残す。頁岩製。

**礫器**（第60図57、第61図58～61） 5点図示した。この中には、環有明海地域特有の尖頭状の礫器も含まれている。57は三角形の礫の一辺に剥離を加えたもので、断面も三角形を呈する。剥離はこの部分のみで、極めて鋭利である。刃器としての使用が考えられる。砂岩製。58は大振りな剥片の全面に調整剥離が加えられ、おおむね長方形を呈する。上部は意識的に抉りが入れている。下部も加工が施されており、抉りを作り出そうとしている可能性もある。

#### 双角状礫器

安山岩製。59・61は双角状礫器である。59は砂岩の厚みのある礫を、61は凝灰岩製の扁平な礫を使用しており、それぞれ片面および両面に礫面を残している。調整剥離はほぼ全面に及ぶが、抉り部に顕著である。そうしてできた抉りの両側には2つの突起が作り出されている。60も板状の礫を素材とし、その縁辺に調整剥離が施される。平面形は三角形をなす。頁岩製。

#### 有溝石錘

**石錘**（第61図62～66） 5点図示した。石材は全て砂岩が用いられる。石錘は有溝石錘（62）と打欠石錘（63～66）に区分できる。62は平面形態が卵形の礫の短軸に一条の溝が観察できる。溝の幅は最大で5mm、最小で2mmである。63～66は全て扁平な円礫を素材として用いている。その礫の短軸の一端の表裏を打ち欠いて抉りを作り出している。65の長軸下部には若干のくぼみが観察でき、紐ずれ痕の可能性もある。

#### 打欠石錘

#### 石皿

**石皿**（第61図67） 1点図示した。中央部は大きく窪んでいる。右側はごつごつしており、素材面を残しているが、上下および左側面は剥離痕が観察され、皿としての形を整えようとする意図が感じられる。砂岩製。

（芝）

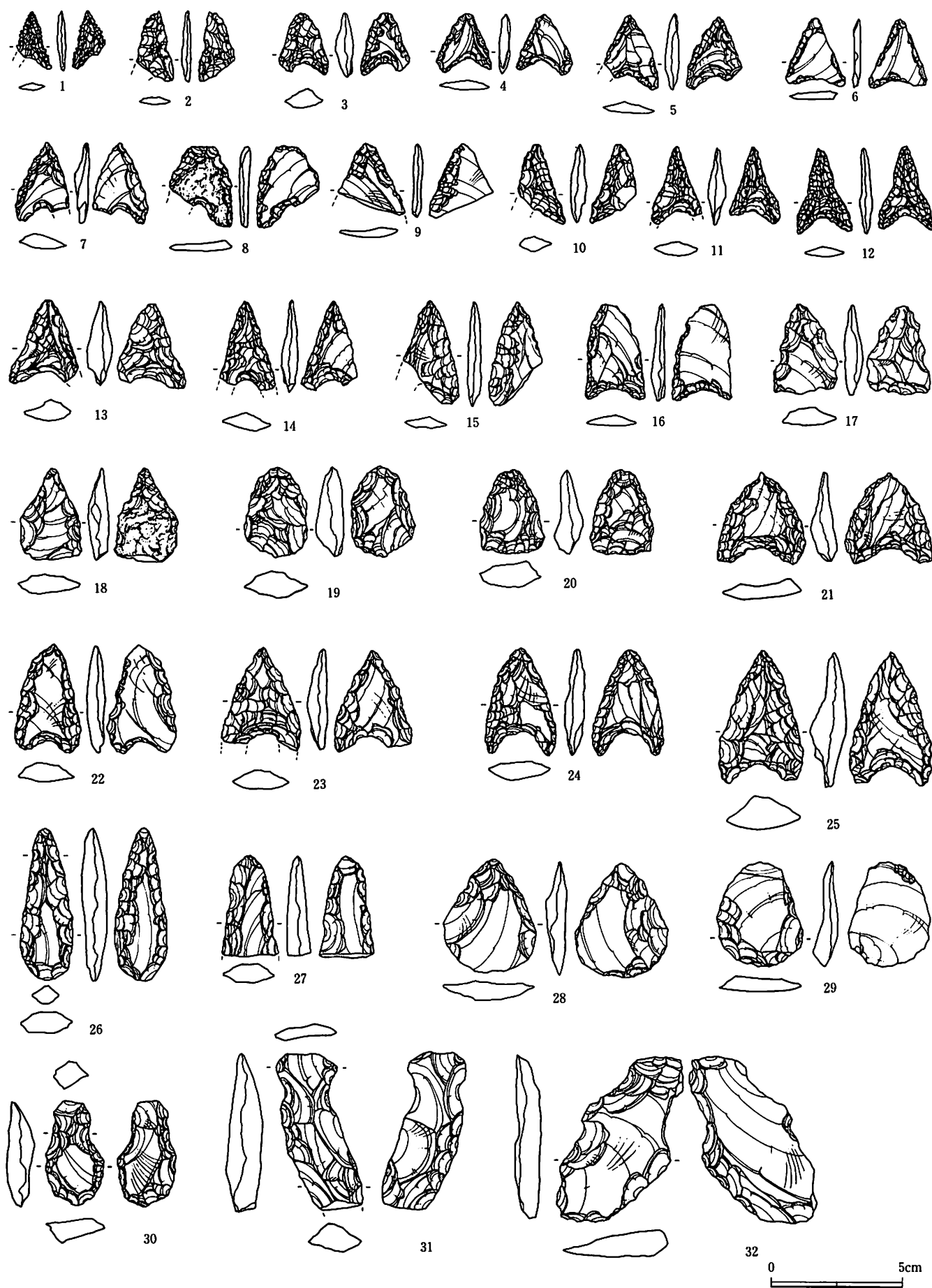
註（1）このような土器は以下の論文で様々な名称が与えられているが、ここではその出土量が多い遺跡名をその呼称として使用した。

田島龍太 1981「葉畑遺跡」『未慮園』六興出版

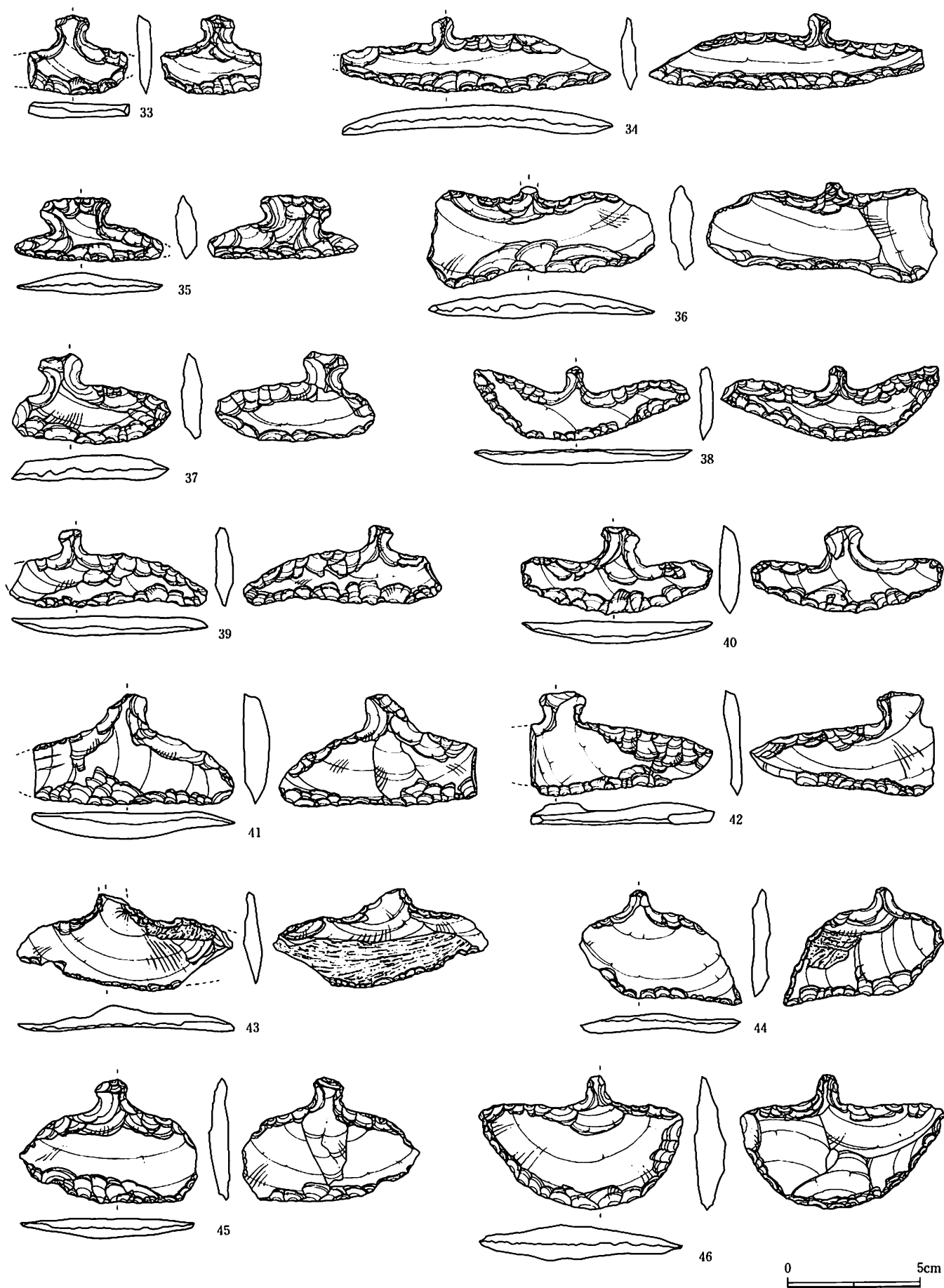
中村 恵 1982「曾畑式土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣出版

水ノ江和同 1988「曾畑式土器の出現－東アジアにおける先史時代の交流」『古代学研究』117 古代学研究会

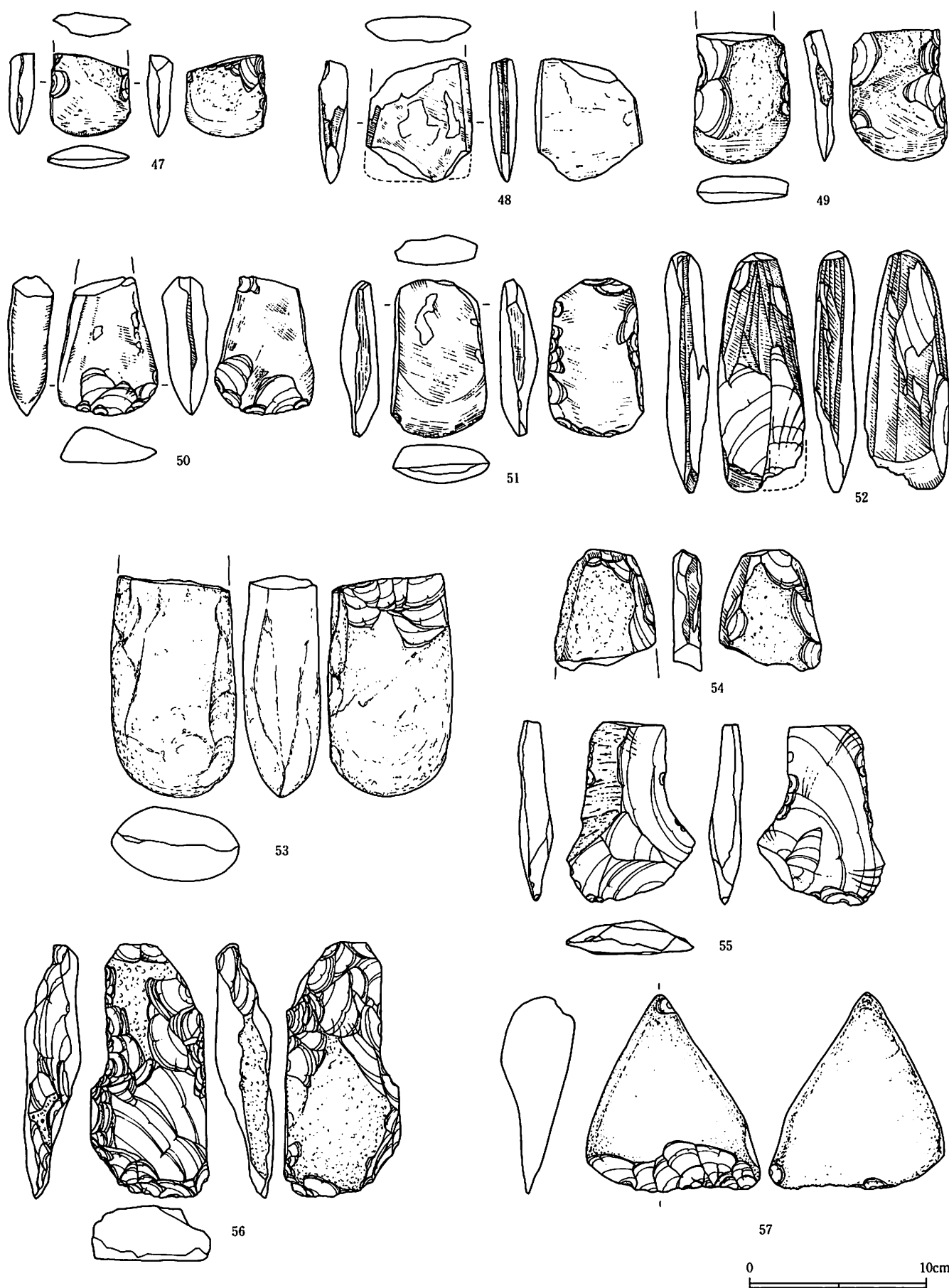
（2）村上浩明 2001「一 柳貝塚採集資料」『考古学研究室報告』第36集 熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1－10



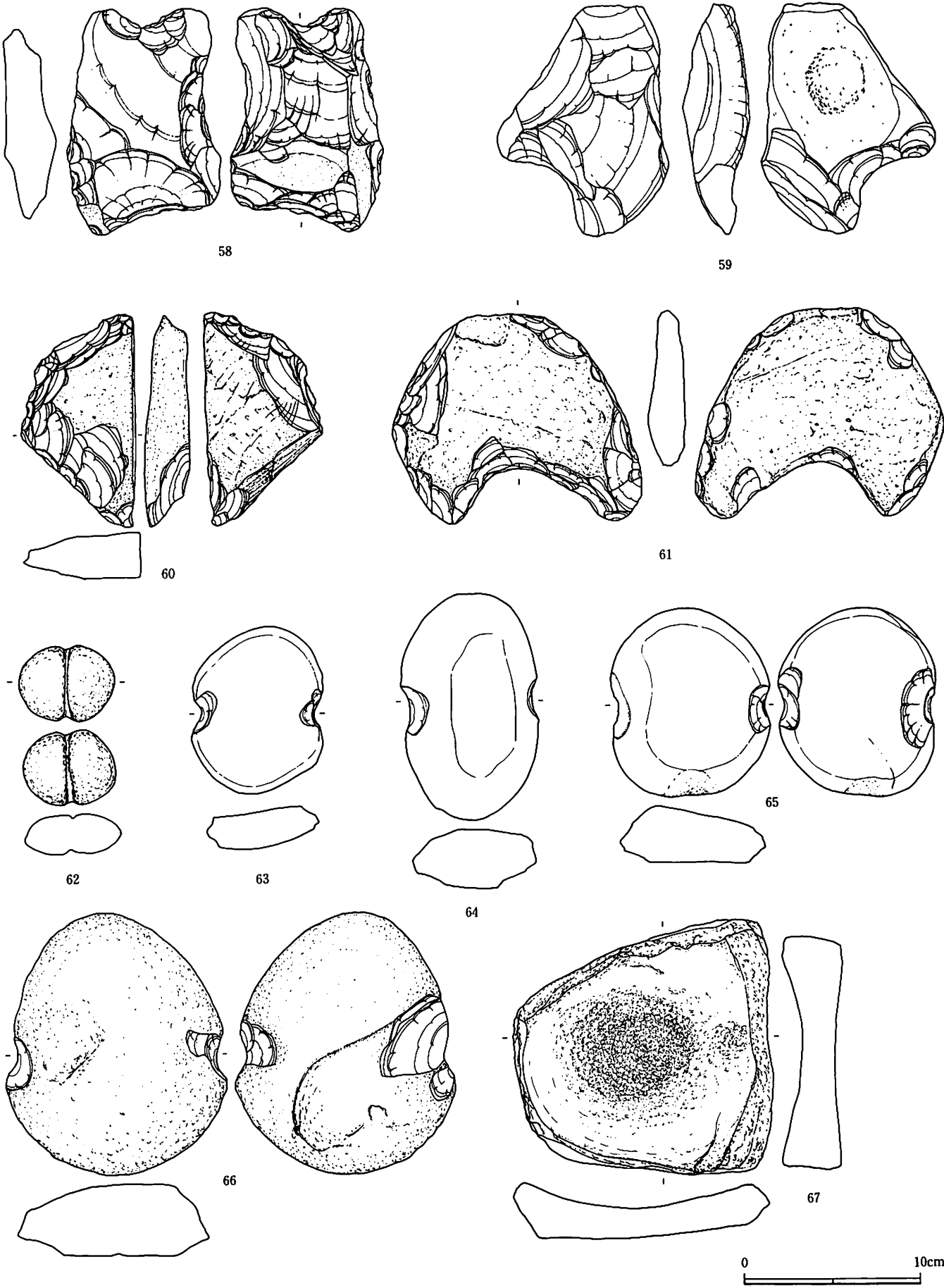
第58圖 石器実測圖(1)



第59図 石器実測図（2）



第60図 石器実測図（3）



第61図 石器実測図（4）